でもわたし達が厭にならない様にして頂戴！　あなたはわたし達にとつて一番恰度いゝ時に來て下すつたんだと思ひますわ、わたしほんとに神様の思召しといふ様な有難い氣持がしますの、ね、え、クルト！　ほんとにいつまでもわたし達を見棄てないで下さい、わたし達夫婦は全世界中の人間の中で一番不幸な男と女なのですから！　〔泣く〕

クルト　わたしは或る一の結婚生活をもつと近い距離から觀察した事が有るんですが……それは實に慘憺たるものでした。然し之れは殆どそれ以上だ！

アリーツェ　ほんとうにさう？

クルト　えゝさうです。

アリーツェ　一體誰が惡いんでせう？

クルト　アリーツェ！　その誰が惡いんだなんていふ詮索を止めた其瞬間になつて、あなたはホッと息がつける様に成るんですよ。何も彼も宿命として、堪へ忍ばなければならぬ試練としてあきらめる様にして御覽なさい！

アリーツェ　そんな事はわたしには出來ません！　あんまりですもの！〔起上りながら〕どうにも仕方の無い事ですもの！

クルト　氣の毒な人達だ！……あなた方は一體何故お互にさうして憎み合つてるかが解つてるんですか？

アリーツェ　いゝえ！　理窟も何も無い盲目的な憎みなんです――根據も無く、目的も無く、其代りに終りも無い！　そしてあの人は何故一番死を怖がつてゐるのかお解りになつて？　あの人はわたしの再婚を恐れて居るのよ。

クルト　では矢張りあなたを愛しては居るんですね。

アリーツェ　さうらしいのです。でもそれだからつて、わたしを憎むのを止めるわけでも無いんです。

クルト　〔獨言の樣に〕愛の憎しみとでもいふんだらう、そして深いどん底から……　あなたが何か彈いて聞かせでもするとあの人は喜びますか？

アリーツェ　えゝ、でも恐しいメロデーで無ければ喜ばないんです――例へばあの『ボヤールの侵入』と云つた樣な凄い曲で無ければ。そんな曲を聞くとあの人はもう夢中に成つて踊り出すんですよ。

クルト　踊るんですか？

アリーツェ　えゝ、あの人は時々馬鹿げた事をやり出すんです。

クルト　もう一つ……お差支へが無かつたら伺ひたいんですが、お子さん達は只今どちらに？

アリーツェ　あなた多分御存じ無いんでせうね、二人亡くしたんですよ！

クルト　じやああなたも矢張り其苦痛を經驗なすつたんですか？

アリーツェ　わたしの經驗しない苦痛なんて有るもんですか？

クルト　しかしあとのお二人は？

アリーツェ　町に居りますの。家には置けないんです。あの人は子供達をそゝのかして、わたしに反抗させる樣に仕向けますから……

クルト　そしてあなたもあの人に向つて同じ樣な事をやるのでせう。

アリーツェ　えゝ、無論ですわ。それだもんだから家の中に黨派が出來てしまつて、互に味方を殖やさうと爭つたり、買收したりする樣な事にも成るんです、それで子供達を毒しないやうに、離れて暮す事にしたんですの。子は鍵なんて云ひますけれど、わたし達のは却つて二人の仲を引裂く斧なんです、一家の祝福と成る可き物が呪詛に成つてしまつたんです！　ほんとうにわたし時々、わたし達の一家は神樣に呪はれて永遠に苦まなければならぬ因緣の一族ででもある樣な氣がして參りますわ。

クルト　墮落以來さうなんです、確に呪はれては居るんです。

アリーツェ　〔毒氣を含める眸と鋭き聲音とを以て〕墮落ですつて？

クルト　人類の最初の先祖の墮落の事ですよ。

アリーツェ　あゝさう、わたしは又何か他の事かと思つたものだから。

間の惡き沈默。

アリーツェ　〔手を合せて〕クルト！　ねえ、あなた！　わたし今迄あなたに向つては正當な態度を執つて居なかつた樣な氣がしますわ。けれど今度といふ今度こそわたし罰を受けましたわ、そしてあなたはまんまと復讐を遂げてしまつたのね！

クルト　復讐なんて事は無いです。誰も復讐なんかしやしません。そんな話はどうぞ止して下さい！

アリーツェ　あなた覺えていらしつて――御婚約をなすつたばかりの何時かの日曜の事を？　わたしあなた方を御飯にお呼びした事が有つたでせう！

クルト　どうぞそんな話は……

アリーツェ　わたしどうしても云はなきやならないんです！　わたしのかうした心持をどうぞあはれんでやつて下さい！……あなた方がおいでなすつた時にはわたし達が内に居なかつたので、あなた方はすぐ〳〵歸らなければなりませんでしたわね。

クルト　あの時にはあなた方も恰度よそに呼ばれておいでになつたんですもの――そんな事彼れこ

れ云ふがものはありませんよ。

アリーツェ　クルト！　わたしたつた今あなたを夕飯に引止めた時には……何かしら戸棚に有るだらうと思つて居りましたの。〔と顔を両手にかくして〕ところが何んにも無いんです、一切れのパンも！……

クルト　〔泣く〕可哀相な、可哀相なアリーツェー

アリーツェ　今にあの人が歸つて來て、何か食べたいと云出しても、何んにも無いでせう、そしたらあの人屹度怒りますわ。あなたは未だあの人の怒つたのを御覽になりませんけれど！……あゝ神様、何といふ屈辱でせう！

クルト　わたし之れから出かけて行つて何か見付けて來てもいゝでせう？

アリーツェ　こんな島の中で何が有るもんですか！

クルト　勿論わたしの爲めじやありません、あの人やあなたの爲めです……一寸考へさして下さい、一寸！……さうだ、あの人が歸つて來ても、わたし達は平氣で、笑つてすまして居なければいけませんよー　わたしは先づあの人に酒を飲ませる樣にしますからね……其間に何かうまい工夫をしますよ……なるべく先生を上機嫌にさして置いて、何か一曲彈いて聞かせるんですねー　さあ、ピアノに向つて用意してるんです！

アリーツェ　まあわたしの手を見て下さいな、こんな手でピアノなんぞ彈けるものか彈けないものか？　眞鍮の道具を磨いたり、ガラスを拭いたり、火をおこしたり、掃除をしたり……

クルト　でもお宅には召使が二人居るんでせう！

アリーツェ　さう云つてゐませんとね、兎に角士官としての體面上からも……でも女中なんか兎角出て行つてしまひますのよ、ですから一人も女中が居らない樣な事も折々有りますの……折々どころか大抵さうなんですの！……それはさうと、わたし此夕飯の一件をどう切り拔けたらいゝんでせう？　いつそ火事で此家が燒けてでもしまへば！……

クルト　そんな事を云つては、アリーツェ、そんな事を！

アリーツェ　津浪でもやつて來て、みんなをさらつて行つてくれたら！

クルト　いけない、いけない、わたしそんな話はもう聞きません！

アリーツェ　あの人歸つて來たらどう云ふでせう？　どんな事を云つて怒るでせう？　行かないで下さい、クルト、どうぞわたしの側から離れないでねー

クルト　行きませんよ、可哀相に……決して行きはしませんよ。

アリーツェ　えゝ、でもあなたが行つちまつたら……

クルト　あなたを打つんですか？

アリーツェ　わたしを？　いゝえ、そんな事をしようもんならわたしが出て行つてしまふといふ事があの人にだつて解つて居ますからね。いくらわたし達の様な人間だつて矜（ほこり）といふ物は持たなければなりませんからね。

此時家の外に聲あり――『止ゝ！　誰か？――君か、よし！』

クルト　〔起上る〕あの人ですか？

アリーツェ　〔ぎよつとして〕えゝ、あの人ですわ！

間。

クルト　一體わたし達はどうすればいゝんです？

アリーツェ　わたし分りませんわ、分りませんわ！

大尉　〔正面奥より、元氣な聲で〕さあ、用は済んだぞ！……アリーツェの奴其ひまに十分にこぼし抜いたんだらう。實際かはい相な女じや無いか、え君？

クルト　外は天氣はどうです？

大尉　暴風と云つてもいゝ位だよ……〔冗談を云ひながら戸を少し開く〕塔の中には騎士の青髭君と若い娘、そして外には抜身の劍を持つた番兵が美しい娘を見張つて居る……ところへ兄弟達がやつて來る、けれども番兵は、見よ、歩調を取つて歩いて居る！　それはいゝ番兵さんだよ！　見給へ！　メリタムタムタ、メリタリア・レエー！　一つ劍舞をやつて見ようか？　クルト君には是非見せてやらなけりやあ！

クルト　いや、それで無く『ボヤールの侵入』（ノールウエー人ルフォルゼンの作）の方をお願ひしたいものですね！

大尉　君あんな物を知つてるのかい、君が？……アリーツェ、前掛のまゝでいゝから、來て彈いておくれ！　來い、と云つてるのに！

アリーツェ　〔しぶ〳〵ピアノに就く〕

大尉　〔彼女の腕を捻る〕おれのゐない間に蔭口をきき居つたな！

アリーツェ　わたしが？

クルト　〔身をそむける〕

アリーツェ　〔『ボヤールの侵入』を彈く〕

大尉　〔書き物机の後にて、一種のハンガリー・ダンスを模し、拍車を踏鳴らす。そのうち床（ゆか）の上に倒れる、然しクルトとアリーツェは之れに氣付かず、アリーツェは其曲を終りまで彈奏し續ける〕

アリーツェ　〔振向かずに〕もう一遍やるんですか？

沈默。

アリーツェ　〔振向いて、大尉の意識を失ひて倒れ伏せるを見る、但し彼れの身體は寄き物机の蔭になりて見物には見えず〕　あゝ、イェズス様！〔胸の上に兩手を組み、心より感謝し、重荷を下せる如くにホッと太息を吐く〕

クルト　〔振向いて、大尉の側に急ぐ〕　どうしたんです、どうしたんです？

アリーツェ　〔最高潮に達せる期待を以て〕死んだのでせうか？

クルト　わたしにはわかりません。一寸手を貸して下さい！

アリーツェ　〔立てるまゝにて〕わたしには觸れませんわ……死んでるんですか？

クルト　いゝえ！　生きて居ますよ！

アリーツェ　〔太息を吐く〕

クルト　〔起上らんとする大尉を助けて、椅子にかけさせる〕

大尉　どうしたんだらう？〔沈默〕どうしたんだらう？

クルト　轉んだんですよ！

大尉　何か有つたのかね？

クルト　あなたは床に倒れたんですよ。御氣分は如何ですか？

大尉　おれがかい？　まるで何ともありはし無いよ！　おれは何んにも知らないんだ！　何故お前達はそんな所に突立つて大口を開いて見て居るんだい？

クルト　あなたは御病氣なんですよ！

大尉　何を詰らん事を云つてるんだい？　演れ、アリーツェ！……あゝ、又こゝが！〔と前頭部を攫む〕

アリーツェ　わかりましたか——あなたは御病氣なんですよ！

大尉　ぐづ〳〵喚くなつていふのに！　只一寸氣が遠く成りかけたばかりなんだ！

クルト　兎に角醫者を呼ばなくつちやあ！　電話を掛けて來ませう……

大尉　おれは醫者には診て貰はんよ！

クルト　診て貰はなけりやいけません！　わたし達の爲めにも醫者を呼ばなければいけません、それで無いとわたし達の落度に成りますから。

大尉　來やがつたら追出すまでさ、ピストルで擊倒してやるからな！……あゝ又此處が！〔と前頭部を攫む〕

クルト　〔右手のドアの方へ〕　電話をかけて來ますよ！〔退場〕

アリーツェ　〔前掛をはづす〕

大尉　水を一杯くれないか！

アリーツェ　仕方が無い、今上げますよ。〔水を一杯飲ませる〕

大尉　ありがたう！

アリーツェ　あなた御病氣なの？

大尉　すまないが、どうも工合が善く無い樣だ。

アリーツェ　そんなら今度はお身體を大事になさるおつもり？

大尉　だつてそんな事をしたらお前は厭だらう！

アリーツェ　さう思つて居て間違は無いわ！

大尉　お前が待ちに待つて居た時が遂にやつて來たんだ！

アリーツェ　えゝ、そしてあなたが決して來ないものと決め込んで居た時がね！

大尉　おれの事を惡く思つてくれるなよ！

クルト　〔右手より登場〕困りましたな！

アリーツェ　どう云ひますの？

クルト　どうもかうも無いんです、いきなり向うから切つちやつたんです！

アリーツェ　〔大尉に〕あなたがふだん無闇に威張り散らした報いですわ！

大尉　おれはだん〳〵惡く成る樣な氣がする……町から醫者を呼ぶやうにしておくれ！

アリーツェ　〔電信機の方へ行きて〕そんなら電信で！

大尉　〔びつくりして、半ば身を起す〕お前……電信が……かけられるのか？

アリーツェ　〔電信をかけながら〕えゝ、かけられますわ！

大尉　さうか？……じやあともかくやつてくれ！……今迄よくも人をだまし居つたな！〔クルトに〕こつちへ來て、おれの側にかけてくれ給へ！

クルト　〔大尉の側に坐す〕

大尉　どうぞ此手をしつかりつかまへてくれ！　おれはかうして坐つて居りながら、何だか下の方へずん〳〵沈んで行く樣な氣がする、ほんとに君變じや無いか？

クルト　こんな發作は前にもあつたんですか？

大尉　いや、無かつた！

クルト　町から返事が來るまで、ドクトルの所へ行つて相談して來ませうよ。ドクトルは以前あなたを診た事があるんですか？

大尉　あるよ！

クルト　そんならあなたの身體はよく分つてるんですね！〔左手へ〕

アリーツェ　返事は直ぐ參りますわ！　ほんとにすみませんのね、クルト！　然しなるべく早く歸つて頂戴ね！

クルト　えゝ出來るだけ早く歸つて參りますよ！〔退場〕

大尉　親切だね、クルトは！　まるで人間が變つてしまつた！

アリーツェ　さうですね、都合のいゝ事には！　でもわたし達の不幸の中へ一緒に引ずり込まれるのは氣の毒ね、選りに選つてこんな場合に來合せて！

大尉　おれ達から見れば恰度もつけの幸さ！　だがあの男は一體どう成つてるんだらう！　お前は氣が付いたかどうか知らないが、あの男はちつとも自分の身の上の事はしやべりたがらない樣だね？

アリーツェ　わたしもそれは氣が付きましたわ、でも其事は誰もあまり深く訊ねなかつたからでせう！

大尉　考へて見ろ、あの男の生涯！……それからおれ達の生涯！　人間の生涯といふ物は一體みんなさういふ風に出來てる物かどうか、おれは知りたいのだ！

アリーツェ　多分同じ樣なものでせうよ、世間の人達はわたし達の樣に口に出してはしやべりませんけれど！

大尉　時々おれはこんな風に思ふ事が有るよ――不幸な人間といふ者は不幸な人間だけを自分の周圍に引付ける樣に成るし、幸福な人間はまた不幸な人間がいくら近寄つて來ても直ぐに追拂つてしまふんじや無いかとな！　だからおれ達の樣な不幸な人間は、一生涯人生の暗黑面だけを見せ付けられるんじや無いか知らん！

アリーツェ　あなたは幸福な家族といふ樣な物を見た事が無くつて？

大尉　さあ、一寸待つてくれ！……まあ無いね！……だが……あのエクマルクの家なんぞはどうだらう？

アリーツェ　何をおつしやるんです！　奥さんが去年あんな手術を受けたんじやありませんか……

大尉　成程！　するとおれには思ひ付かんな……でもクラフトの一家は？

アリーツェ　さう、まるで牧歌にでも有り相な平和な家庭でしたわね、家は裕福だし、世間の人には敬はれるし、子供達はみんな出來が善くつてそれ〴〵善い緣組みをするし……五十歲位まではほんとに申分無く幸福無事でしたわね。ところへあの從妹の人といふのが出て來て惡い事をした揚句、牢へ入れられたりなんぞしたもんだから、それで折角の平和も臺無しに成つちやつたんです。

家の名が始終新聞に出て散々に叩かれるやら……所謂クラフト事件の爲めに、あんなに尊敬された家柄の人達が世間に顔向けも出來無いやうな事に成つてしまつて、子供達なんか學校から下らなければならなかつたといふじやありませんか……まあ何といふ事でせう！

大尉　一體おれはどこが惡いのか知らん！

アリーツェ　あなたはどう思つて？

大尉　心臟か腦だらう。まるで魂がかうふら〳〵と飛出して、雲の中に溶け込んででもしまひ相な氣がする。

アリーツェ　食慾はありますか？

大尉　うむ！　夕飯はどうしたんだ？

アリーツェ　〔不安らしく室の中を歩き廻る〕　エンニーにきいて見ませう！

大尉　彼奴は行つてしまつたじや無いか！

アリーツェ　あ、さう〳〵！

大尉　呼鈴でクリステルを呼ぶといゝよ、汲立ての水を持つて來させるから！

アリーツェ　〔鳴らす〕　どうしたんでせう？……〔又鳴らす〕　聞えないのかしら？

大尉　行つて見ろ……　彼奴も逃げて行つちまつたんじや無いか！

アリーツェ　〔行つて左手のドアを開く〕　まあ、どうしたといふんでせう？　あの子の行李が廊下に荷作りして投り出してありますわ！

大尉　それじや矢張り行つちまつたんだ！

アリーツェ　まるで地獄だわ！……〔頭を椅子にもたせながらわつと泣き崩れる〕

大尉　何も彼も一緒くただ！……そこへクルトの奴がやつて來て、此みじめな有樣を殘らず見てしまふんだ！　之れ以上の屈辱が世の中にもつと有るなら、さつさと出て來やあがれ、今だ、さあ今の中だ！

アリーツェ　あゝ！　わたし心配でなりませんの――クルトは歸つて來さうもありませんわ！

大尉　或はさうかも知れない。

アリーツェ　さうですとも、どうせわたし達は呪はれて居るんですもの……

大尉　呪はれてゐる？

アリーツェ　だつて、誰も彼れもみんなわたし達の側から逃げ出さうとかゝつてるのがあなたにはわからないんですか？

大尉　そんな事かまふもんか！〔電信機鳴り出す〕　返事だ。靜にしろ、おれが聞くから！……「誰も暇が無い」？　態のいゝ逃げ口上だ！……畜生奴！

アリーツェ　、醫者を輕蔑した報いよ……そして診察料も拂はないんですもの！

大尉　さういふわけじゃ無いんだけど……

アリーツェ　あなたはたとひ拂へても拂はうとしないんです、醫者の仕事を輕蔑して居るんですもの。尤もあなたはわたしの仕事だつて他の人達の仕事だつて、みんな輕蔑して居るんだけど！　そんな人の所へ誰が來てくれるもんですか！　何の役にも立たないなんて馬鹿にするものだから電話は切られてしまふし！　あなたにかゝつちやあ鐵砲と大砲の他は三文の値も無いのね！

大尉　そこに立つてゐてぺちやくちやしやべるなと云つたら！

アリーツェ　因果といふ物はどうせめぐつて來るものですよ！

大尉　何を馬鹿な、詰らん迷信を云つてるんだ！　よく婆さん達はそんな泣事を並べるものだよ！

アリーツェ　あなただつて今に屹度思ひあたりますよ！……あなた御存じでせう――　あのクリステルにだつて半年も給金を拂はないで居るのが？

大尉　その代り彼奴はちやんとそれ以上の泥棒をしてるよ！

アリーツェ　でもわたし其他にも彼女からお金を借りなければならなかつたんですよ！

大尉　そんな事も有つたかね！

アリーツェ　あなたはほんとに恩知らずね！　子供達を町へやる時の費用に借りたんじやありませんか！

大尉　クルトの奴が又歸つて來た樣だよ！　彼奴も相變らず碌で無しで、其上に臆病なんだ！　だもんだから、こんな所はもう懲り〳〵で、ドクトルの家の舞踏會の方がどんなに善いか知れないといふ事が口に出しては云へないんだ。そしておれ達のところでまづい夕飯でも食ふ氣で居やあがる！　フム、可哀相な奴よ、矢張り相變らずだ！

クルト　〔急いで左手より登場〕　さあ、エドガー、行つて來ました！……ドクトルはあなたの心臓を詳しく知つてゐましたよ！

大尉　おれの心臓を？

クルト　えゝ、あなたの心臓は大分前から石灰化してるんですつて！

大尉　そんなら石の心臓か？

クルト　そして……

大尉　危險なのかい？

クルト　えゝ、つまりね……

大尉　危險なんだ！

クルト　えゝ！

大尉　死だ！

クルト　非常に攝生が必要だ相ですよ。先づ第一にシガーをよさなければいけません！

大尉　〔シガーを投出す〕

クルト　次には、ウィスキーも止めるんです！　それからベッドにやすむんです！

大尉　〔不安らしく〕いや、そんな事はおれは厭だ！　ベッドなんぞ眞平御免だ！　それこそおしまひだよ！　そんな物に一度寢たら最後、もう再び起つ事が出來ないにきまつてる！　今夜はソーファにやすまう！　それからまだどんな事を云つたね？

クルト　あの人はいろ〳〵親切に云つてくれましたよ、そして、呼びさへすれば直ぐにも來てくれる相です。

大尉　彼奴が親切だつて、あの猫かぶりが？　おれはあんな男の顏は見たくも無いよ！　それから食物はどうだらう？

クルト　今夜は何も食べない方がいゝ相です。そして之れからは當分牛乳だけだ相です。

大尉　牛乳？　そんな物が咽喉を通るもんか！

クルト　慣れなくちやあいけませんよ！

大尉　いや、おれの樣に年とつてからは、慣れるも何もありはしないよ！〔前頭部を擦んで〕あゝ又こゝが！〔ひきつけてじつと空を見詰める〕

アリーツェ　〔クルトに〕ドクトルは何と云ひまして？

クルト　死ぬかも知れないつて！

アリーツェ　まあ有難い！

クルト　氣を付けなさい、アリーツェ、氣を！……さあ、あちらへ行つて枕と何か掛ける物を持つて來て下さい！　其ソーファに寢せる樣にしますから。それからわたし今晩は此椅子に坐つて看護します。

アリーツェ　そしてわたしは？

クルト　あなたはあちらへ行つておやすみなさい！　あなたが附いてゐると、却つて惡く成る樣な氣がしますから。

アリーツェ　どうぞ何でもおつしやつて下さい！　わたしおつしやる通りにしますわ、あなたはわたし達二人を惡い樣にはして下さいませんわね。〔左手へ去る〕

クルト　あなた方お二人をですよ――よく承知してゐて下さいよ、わたしは決してどちらの黨派にも引込まれる樣な事はしませんからね！〔水さしを取りて右手より退場〕

大尉　いや、軍人といふ者は常に武装して居なけりやならん！

クルト　じやああなたは戰爭の覺悟をしてるんですね？

大尉　まあさうだ！……〔ベッドに起直つて〕　クルト！　おれが自分の恥をさらけ出して何も彼も打明けた人間は後にも前にも君だけなんだよ！　おれはたつた一つ聞いて貰ひたい事が有る！　若しおれが今夜死ぬ様な事が有つたら……子供の事をどうぞよろしく頼みます！

クルト　承知しました。

大尉　有難う、おれは君を信頼する！

クルト　どうしてあなたはわたしの様な者をそんなに信頼して下さるんでせう――それがあなたに解つてるんですか？

大尉　君とおれとは決して親友じや無かつた、おれは元來友情なんていふ物を信じない人間なんだから。そして君の家とおれの家とは生れながらの敵同士で、始終喧嘩ばつかりやつて居たものだ……

クルト　それにもかゝはらずあなたはわたしを信頼するんですか？

大尉　さうだ！　何故といふ事は無いけれど！

沈默。

大尉　君、おれは死ぬだらうと思ふかい？

クルト　あなただつて誰だつて人間はみんな同じ事ですよ！　あなただけの爲めに除外例が設けられるといふ法はありません！

大尉　君は苦しくはないかい？

クルト　そりや苦しいです！……あなたも死ぬのは氣味が惡いですか？　例の肥料車と花壇とが！

大尉　若しそれだけでおしまひにならなかつたとしたらどうだらう？

クルト　さう思つてゐる人も澤山有りますね！

大尉　それで、死後はどういふ事に成るんだらう？

クルト　單に驚異だらうと、わたしは思ひますね。

大尉　でもそれに就いては人間は何等確實な物をつかんでは居ないよ。

クルト　そりやあ誰にだつて解りはしません！　だから我々はどんな物がやつて來ても敢て驚かないだけの覺悟が必要なんです。

大尉　君はまさかそんな子供らしいんじや無いだらう、それでゐて君はあの――地獄を信じてるのかい？

戸外に吹きすさぶ風の音聞ゆ。それから正面の扉風の爲めに開いて、貧しげなる、不快なる容貌の老婆内部をのぞき込む。

大尉　〔氣が付いて、身を起し、あたりを見廻す〕さうか、奴等はおれを置去りにしやがつたんだな、惡黨奴等！〔老婆を見付けて不氣味らしく〕誰だ？　何の用だい？

老婆　一寸戸を閉めようと思ひましてね、旦那様！

大尉　どうして、どうしてそんな事を？

老婆　恰度わたしがこゝを通りましたら、風であふられましたんで！

大尉　貴様、何か盗まうとしたんだな？

老婆　クリステルの話じやあ、盗る程の物も無いつて事でしたつけ！

大尉　クリステルだと？

老婆　左様なら、旦那様、おやすみなさいまし！〔扉を閉めて退場〕

アリーツェ　〔枕と布團を携へて左手より〕

大尉　誰だい、今ドアのところに立つて居たのは？　誰か居たのかい？

アリーツェ　えゝ、貧民院のマーヤ婆さんならたつた今そこを通りましたわ！

大尉　確だらうな？

アリーツェ　あなた氣味が惡いんですか？

大尉　おれが、氣味が惡い？　そんな事が有るもんか！

アリーツェ　ベッドに寢たく無いとおつしやるなら、此處におやすみなさいな！

大尉　〔ソーフアまで行つて横になる〕之れに寢よう！〔とアリーツェの手を執らうとするが、彼女は手を引込める〕

クルト　〔水さしを持ちて登場〕

大尉　クルト、わたしの側から離れないでくれ！

クルト　わたし今夜はこゝに附いてゐます！　アリーツェはあちらへ行つてやすんで貰ふんです！

大尉　そんならおやすみ、アリーツェ！

アリーツェ　〔クルトに〕おやすみなさい、クルト！

クルト　おやすみ！

クルト　〔椅子を取つてベッドの側に腰を下す〕あなた靴は脱がないんですか？

大尉　いや、軍人といふ者は常に武装して居なけりやならん！

クルト　じやああなたは戰爭の覺悟をしてるんですね？

大尉　まあさうだ！……〔ベッドに起直つて〕　クルト！　おれが自分の恥をさらけ出して何も彼も打明けた人間は後にも前にも君だけなんだよ！　おれはたつた一つ聞いて貰ひたい事が有る！　若しおれが今夜死ぬ様な事が有つたら……子供の事をどうぞよろしく頼みます！

クルト　承知しました。

大尉　有難う、おれは君を信頼する！

クルト　どうしてあなたはわたしの様な者をそんなに信頼して下さるんでせう――それがあなたに解つてるんですか？

大尉　君とおれとは決して親友じや無かつた、おれは元來友情なんていふ物を信じない人間なんだから。そして君の家とおれの家とは生れながらの敵同士で、始終喧嘩ばつかりやつて居たものだ……

クルト　それにもかゝはらずあなたはわたしを信頼するんですか？

大尉　さうだ！　何故といふ事は無いけれど！

沈黙。

大尉　君、おれは死ぬだらうと思ふかい？

クルト　あなただつて誰だつて人間はみんな同じ事ですよ！　あなただけの爲めに除外例が設けられるといふ法はありません！

大尉　君は苦しくはないかい？

クルト　そりや苦しいです！……あなたも死ぬのは氣味が惡いですか？　例の肥料車と花壇とが！

大尉　若しそれだけでおしまひにならなかつたとしたらどうだらう？

クルト　さう思つてゐる人も澤山有りますね！

大尉　それで、死後はどういふ事に成るんだらう？

クルト　單に驚異だらうと、わたしは思ひますね。

大尉　でもそれに就いては人間は何等確實な物をつかんでは居ないよ。

クルト　そりやあ誰にだつて解りはしません！　だから我々はどんな物がやつて來ても敢て驚かないだけの覺悟が必要なんです。

大尉　君はまさかそんな子供らしいんじや無いだらう、それでゐて君はあの――地獄を信じてるのかい？

クルト　あなたは自ら地獄のどん底に落ちて居ると稱しながら、それを信じないんですか？

大尉　あれは單に比喩的な話さ！

クルト　でもあなたの描寫が餘りに眞に迫つて居るものだから、詩的な比喩とか何とかいふ樣な事を思つてゐる餘地がまるで無く成るんです。

沈默。

大尉　おれの此苦みが君に分つたらなあ！

クルト　肉體的の苦痛ですか？

大尉　いや、肉體的じやあ無いんだ！

クルト　じやあ精神的の苦痛なんですね——肉體的でも、精神的でも無い第三の苦痛なんて物が有る筈が有りませんからね！

間。

大尉　〔ソーファに起直つて〕おれは死にたくない！

クルト　ついさつきあなたは寂滅といふ事を望んだじやありませんか？

大尉　それは苦痛を伴はない場合の話さ！

クルト　でも寂滅といふ物は決してそんな物じやありません！

大尉　それじやあ之れが其寂滅といふ物なんだらうか？

クルト　まあその始まりでせうね！

大尉　おやすみ！

クルト　おやすみ！

第二幕

前幕と同一の舞臺裝置、但しランプは消えかゝつて居る。正面の窓及びガラス扉越しに曇れる朝の空ほの見え、海は浪立てり。砲臺の歩哨は前幕のまゝ。大尉はソーファに眠つてゐる。クルトは徹夜の疲れに蒼ざめつゝ椅子に坐す。

アリーツェ　〔左手より登場〕睡つてるの？

クルト　えゝ、夜が明けてからやうやく。

アリーツェ　昨夜はどんな風でした？

クルト　時々は睡りましたがね、然し隨分しやべりましたよ。

アリーツェ　どんな事を？

クルト　宗教といふ物に就いてまるで學生の樣に盛に論じましたよ、我れこそ世界の謎を解決し得たといふ樣な顏をしてね！　そして遂に夜明方に至つて靈魂不滅の大原理を發見し得たんです。

アリーツェ　つまり自分の虚榮の滿足の爲めなんですわ！

クルト　無論ですー……恐らくわたしの出逢つた人間の中では最も自尊心の強い人でせう。『我れ有り、故に神も有り。』――眞面目でこんな事を云つてるんですからね。

アリーツェ　あなたはよく見拔きましたわね！　まあ此長靴を御覽じろ！　此人は若し出來るものなら、それで以て世界中をぺしやんこに成る程踏ん付けたかも知れませんわ！　此靴で以て少くとも他人の家の庭や畑を蹂躙したり、他人の足の指を踏潰したり、おまけにわたしの頭を蹴飛ばしたりしたんです！……熊、今度こそとう〳〵彈丸を食ひ込んだね！

クルト　兎に角此人は悲劇的で無いとすりや喜劇的な人間なんですね、そして隨分こせ〳〵したこまかい點が有るにもかゝはらず、確に偉大なる物を有つては居りますよ！　然しあなたは徹頭徹尾此人を賞める言葉を有たないとおつしやるんですか？

アリーツェ　〔坐す〕そりやあ賞めてやらないものでもありませんわ、此人が聞いてさへゐなかつたら。何故つて、何か一言でもおだて上げる樣な事でも口に出さうもんなら、此人は矢鱈に氣ばかり大きく成つて狂人の樣に成つてしまひますからね！

クルト　大丈夫聞えはしませんよ、モルヒネ劑を飲んだんですから！

アリーツェ　貧乏な家に生れて同胞が澤山有つたものですから、エドガーは早くから人に物を敎へたりして家の暮しを助けて行かなければならなかつたのです、何しろ此人のお父さんといふのが、仕樣の無いのらくら者――いゝえ、それ以上の惡者だつたものですからね。青春の喜びといふ樣

な物をちつとも知らずにあくせくするといふ事は、若い身空にはほんとうに辛い事だつたに相違ありませんわ、殊に、自分の子でも無い澤山の、恩知らずな子供達の爲めにまるで奴隷の樣に眞黒になつて働くといふ事はね。わたしは未だ小さな小娘の頃に初めて此人に逢つたんですが、其頃は未だうら若い青年でしたけれど、冬でも外套無しなんです。それも二十五度なんていふ寒さにですわ……その癖小さな妹達には厚い毛織のマントをぬく〳〵着せてるんですの……それはほんとに感心なものでした、だからわたしもひそかに敬服したもんです、けれど此人の醜いのにはわたしも恐れて居ましたの……全く滅多に無い程に醜い人じやありませんか？

クルト　えゝ、そしてその醜いのが單に醜いといふだけで無くて、何かしら氣味が惡く成る樣な所が有りますねー　何時でもわたし達が仲違ひした時に、一番餘計それが目に立つんです。そして此人が居なく成ると、その幻影がだん〳〵ぼうつと大きく成つて、素晴しく大きな變な形の物に成つてしまつて、文字通り目の前に幽靈になつて現れて惱ますんですよ！

アリーツェ　そんなら少しはわたしの事も考へて見て下さいよ！……此人の最初の士官時代は無論犧牲的精神で一杯でした。でも時々金持の人達の補助は受けましたの。然し此人は決してそんな物を有難いとも何とも思はないんです、そして人樣から貰ふ物は、當然の貢物かなんぞの樣に御禮も云はずに平氣で受取つたものです。

クルト　もう此人の事は惡く云はないことにしませうよ！

アリーツェ　ほんとにさうですわね、わたしだつて、死んでしまつたら、もう決して惡くは申しませんわ！　わたしもうそんな事はすつかり忘れてしまひますわ！

クルト　あなたは此人を意地惡だと思つて居たんですか？

アリーツェ　えゝ――でも此人には、いくらか物に感じ易くつて、お人好しの性質も無くはありませんの！――敵として向うに廻した日にはほんとにこはい人ですけれど！

クルト　少佐に成らなかつたわけといふのはどういふんですか？

アリーツェ　それはあなた解つてるじやありませんか！　自分達より下に居てさへそんな我がまゝな人間を、誰が上役にしようなどゝするもんですか！　でも此事は一寸でも匂はせる事は禁物よ、自分では、少佐なんぞは眞平御免だなんて威張つてるんですからね。……子供の事を何か云ひまして？

クルト　えゝ、頻りにユーディトに逢ひ度がつて居ました！

アリーツェ　屹度さうでせう！　まあ、あなた、ユーディトつてどんな子だと思ひます？　わたしに楯を突く樣に一生懸命仕込まれた此人の生寫しといふ子なんですよ！　どうでせう、あなた、自分の腹を痛めた生みの子が現在の親に向つて……手を擧げるんですよ！

クルト　まさか、あんまりひど過ぎる！

アリーツェ　静に！　少し動きますわ！……狸寝入りでわたし達の話を聞いてるんじゃ無いか知ら！……此人はそりやあ意地が悪いんですからね！

クルト　ほんとうに目をさましますよ！

アリーツェ　まるで悪鬼かなんぞの様な顔をしてゐますわね！　わたし氣味が悪く成つた！

沈默。

大尉　〔むく〳〵動き出して目を醒し、起直つてあたりを見廻す〕　朝だな！　とう〳〵！……

クルト　御氣分は今如何です？

大尉　善くない！

クルト　醫者に診て貰ひませんか？

大尉　いや！……　おれはユーディトに逢ひたいんだ、娘に！

クルト　それよりも先づ家の事を整理して置いた方が善くは無いですか――若しひよつと……何か始まるといけませんからね！

大尉　何を云つてるんだい、君は？　何が始まるだらうといふんだい？

クルト　有らゆる人間に一人も例外無く起り得るあの事がです！

大尉　何だ、下らない事を！　おれがそんなに無造作にくたばつてたまるもんか、お前達は信じて居てもいゝよ！　あんまり早く喜ぶなよ、アリーツェ！

クルト　まあお子さん達の事も考へて御覽なさいよ！　そして遺言狀を作つてお置きなさいよ――奥さんには少くとも家具を保有する事にしてね。

大尉　じやあ妻は、おれが生きて居る間に遺産の相續をする事に成るのかい？

クルト　いゝえ！　然し何か事が起つた場合に奥さんが一物も持たずに往來に投り出される樣な事が有つても困るじやありませんか！　二十五年間もこんな家具を掃除したり手入れをした人間は、それを保有する權利をも有つのが當然だらうと思ふんです。公證人を呼びませうか？

大尉　いや！

クルト　あなたは殘酷な人間ですね、わたしが思つてたよりも遙に殘酷だ！

大尉　〔失神して倒れる〕　又此處が！

アリーツェ　〔右手へ〕臺所に人が來て居ますから、一寸行つて來なければなりませんわ。

クルト　行つて來なさい！　こちらはそんなに用が有りませんから！

アリーツェ　〔退場〕

大尉　〔目醒めて〕クルト、君は此島に出來る檢疫所をどんな風にやつて行く積りだね？

クルト　どうにか成るでせうよ！

大尉　いや、おれは此島の命令者なんだよ、萬事君はおれに謀つて事をしなければいけない、いゝかい、此點を先づ忘れない樣にしてくれ給へ！

クルト　あなたは一體檢疫所つて物を見た事が有るんですか？

大尉　見た事が有るか？　フム、君なんか未だ生れない中にちやんと見てるよ！　それでおれは豫め君に忠告して置かうと思ふんだが、消毒竈だけはあんまり海岸に近く置かない事だね。

クルト　わたしはまた、是非海水の近くに置かなけりやならんと思つてたんですが……

大尉　それでほゞ君の御造詣も親はれるといふもんだね。水は君、黴菌の要素、黴菌には缺く可からざる生活要素じや無いか！

クルト　でも鹽分を含んでる海水は汚物を洗滌するには是非必要な物じやありませんか！

大尉　馬鹿だね、君は！……それはさうと、君は住居が見付かり次第、子供達を呼寄せる積りかい？

クルト　呼寄せられて來る樣な子供だと思つてるんですか？

大尉　無論さ、君がそれだけの覺悟を持つてる人間なら！　君が此點に於ても義務に忠實なのを見せたら、此島の人達はいゝ印象を受けるに相違無いと思ふよ！

クルト　わたしは何時だつて其點に於ても忠實だつた積りですが！

大尉　〔聲を高くして〕君の最も弱點とする其點に於てだよ！

クルト　だからあなたに云つたじやありませんか……

大尉　〔云續ける〕何故つて、あんな風に自分の子供を見棄てるといふ法はあるわけのものじや無いよ……

クルト　もつと云つて下さい！

大尉　おれは君の親戚として、一番年長の親戚として、ほんとうの事實を君に云つて聞かせる一種の權利を持つてゐる樣に思ふ、君の耳には痛い言葉かも知れないけれどね……そして君、それを惡く取つてはいかんよ！……

クルト　あなた空腹じやありませんか？

大尉　うむ、空腹だよ！

クルト　何か柔かい物をおあがりになりますか？

大尉　いや、何か硬い物が欲しいね！

クルト　そんな事をしたらおしまひですよ！

大尉　病氣だけでも澤山じや無いか、其上に腹まで空かさせなくつても！

クルト　でも醫者がさうしろといふんですからね！

大尉　それから、酒も飲むな、煙草も吸ふなつていふんだらう！　そんな風にして生きてる甲斐があると思ふかい、君！

クルト　死といふ奴は犧牲を要求するんです、それで無いと直ぐにやつて來ます！

アリーツェ　〔數箇の花束、數通の電報及び手紙を携へて登場〕　さあ、あなたに參りましたの！〔書き物机の上に花を投り出す〕

大尉　〔得意になつて〕おれに！……どれ、見せろ！……

アリーツェ　えゝ、只下士と樂隊と砲手達からよこしたんですの！

大尉　嫉いてるな、貴樣！

アリーツェ　誰がそんな物を……月桂樹でもあつたら知らぬ事……でもあなたなんぞにそんな物を贈つてよこす人はまあ無いでせうね！

大尉　ふむ！……大佐からの電報だな……讀んでくれ給へ、クルト！　大佐はともかく紳士（ジヤントルマン）には相違無いよ……少しばかり頭の惡い所も無くは無いがね！……之れは……何だい、之れは？　あゝユーディトだ！……濟まないけれど、君、直ぐ此次のボートで來るやうに電信をかけてくれ給へ！……之れは……さう！……矢張り渡る世間に鬼は無しだ、かうして病人の事を思つてくれるのは感心なものだよ——尤も病人と云つても只の病人じや無いよ、功績の有つた人間であり、その地位以上の働きを爲して、其上何等内にやましい點も無く非難も無いといふ人物なんだからな！

アリーツェ　わたしにはさつぱり解りませんわ！　一體此人達はあなたが病氣に成つたのでお目出度いとでもいふんでせうか？

大尉　畜生奴！

アリーツェ　〔クルトに〕さう〳〵、何時かもひどくみんなに憎まれた或る醫者が此島から行つてしまふ事に成つた時に、みんなが大振舞をした事があるんですよ——其人を送る爲めにでは無くつて其人が居なく成つたお祝ひにね。

大尉　此花は瓶に挿して置け……おれは無論他人の好意なんて物を輕々しく信じはせんさ、大抵の人間は馬鹿だからな、だが、かうした單純な敬意や見舞までも何か底が有る樣に思ふのは疑が深過ぎるといふものだよ……之れは誰が何と云つたつて、ありのまゝの見舞品に相違無いんだから

な！

アリーツェ　馬鹿ね！

クルト　〔電報を讀む〕　ユーディトから返事です――暴風で汽船が出ないから來られない相です。

大尉　それだけか？

クルト　いゝえ、未だあとが有ります！

大尉　早く讀んでくれ給へ！

クルト　えゝ、お父さんがあんまり酒をたんと飲まない樣にといふお願ひです！

大尉　ふむ、生意氣を云つてやがる！　これがおれの子供だ！　おれの大事な一人娘だ……おれのユーディトだ！　おれの偶像だ！

アリーツェ　そして、あなたの生寫し！

大尉　これが人生か、そして人生の無上の喜びといふ奴か！　畜生、馬鹿氣切つてる！

アリーツェ　それが卽ちあなたの播いた種のとり入れよ！　あなたは娘をけしかけて母親に楯突かしたでせう、だから今度は父親に反抗する番に成つたのよ！　神も佛も無い世の中だ、とでもおつしやいよ！

大尉　〔クルトに〕大佐からはどう云つて來てるね？

クルト　卽刻退職を許可する相です！

大尉　退職？　おれはそんな物を願つてやつた覺えは無いよ。

アリーツェ　あなたは無くつても、わたしが有ります！

大尉　誰がそんな物を受付けるもんか！

アリーツェ　もう辭令が下つてますわ！

大尉　ふむ、そんな物おれの知つた事か！

アリーツェ　まあ此通りなんですの、クルト、此人にかゝつちやあ法も掟も有つた物じゃ無いんです、人間の定めた秩序なんて物はてんで眼中に無いんです……此人は有らゆる事物、有らゆる人間の上に自分だけ一人超然としてるんです、詰り全宇宙は此人の利用の爲めに創造せられたものなんです、太陽も月も只此人の讃美を星の世界へ傳へる爲めに空を廻つてるんです！　さうした人間なのですよ、此人は！　然もその實は――少佐にも成り損ねた程のへつぽこ大尉で、飛んでも無い法螺を吹いてみんなに笑はれてばかり居るんです――尤も自分ではそれをみんなに畏敬せられてるのだと思ひ込んでるんですから罪が有りませんわ！　實は暗闇の中でびく〳〵したり、晴雨計を信じたりする樣な、可哀相な人間なんです！　そして大詰は、例の手押車に一杯の肥料といふところで鬼が付くんだわ――それも餘り上等の肥料にはなれませんがね！

大尉　〔滿足げに花束を以て煽ぎつゝ、アリーツェの云ふ事には耳を貸さず〕お前クルトを朝飯に呼んだのかい？

アリーツェ　いゝえ！

大尉　そんなら早速上等の燒肉料理（シャトーブリアン）を二人前こしらへろ！

アリーツェ　二人前ですつて？

大尉　おれも食ふんだ！

アリーツェ　だつてわたし達は三人じやありませんか！

大尉　お前も食ふのか？　うむ、じやあ三人前にするさ！

アリーツェ　一體何處からそんな物を持つて來るんです？　あなた昨日クルトに夕飯を食つて行けと云つたでせう、ところが實は家中捜したつてパンの皮だつて有りはしなかつたんですよ、だからクルトは夜つぴて空腹を抱へて起きてなけりやならなかつたんですの、コーヒー一杯飲む事も出來ずにね！　コーヒーだつてもう有りはしませんわ、それに信用はすつかり無く成つて一文だつて貸してくれる人は無し……！

大尉　何の彼のと云つて貴樣怒つてるんだな——昨日おれが御註文通りに死ななかつたものだからー

アリーツェ　御冗談でせう——昨日死ななかつたから怒つてるなんて！　あなたが二十五年前に死ななかつたのが、いゝえさ、わたしが生れない先に死んでゐなかつたのが、わたし口惜しいんです！

大尉　〔クルトに〕あれを聞いたかい、君！……君だつて結婚すりやあ此通りさ！　結婚なんて物は天國に於て打樹てられたもので無いつて事は之れでも確だよ！

クルトとアリーツェ　〔互に顔を見合せる〕

大尉　〔起上つてドアの方へ行く〕云ひ度い事を勝手に云つて居るさ！　おれは勤務に行かなけりやならんから！〔古代バイエルン風の兜帽（ヘルメット）を冠り、サーベルを腰に吊し、マントを羽織る〕誰か用が有つたら、おれは砲臺の方へ行つてると云へ！

クルトとアリーツェ　〔彼れを引止めんとすれども能はず〕

大尉　退（ど）けー！〔急ぎて退場〕

アリーツェ　えゝ、行つちまへー　かなはないと見ると何時でも尻に帆掛けて逃げ出してしまつて、自分の妻に退却の掩護をさせるんだ——飲んだくれの、法螺吹きの、嘔吐き野郎奴！　畜生！

クルト　まるで底が知れない！

アリーツェ　えゝ、これでもあなたは未だ殘らずは見て居ないんです！

クルト　じやあもつとひどい事が有るんですか？

アリーツェ　けれどわたし恥かしくつて云ふ事が……

クルト　然しあの人は一體何處へ行つたんです？　そして一體何處からあの力を持つて來るんです？

アリーツェ　えゝ、それが問題ですわ！　今あの人は下士達のところへ出かけて行つて花の御禮を云つてるんです……それからみんなと一緒に飲んだり食つたりするんです！　それから今度は例の將校團の惡口が始まるんです……ほんとうに其爲めに今まで何遍首を切られようとしたか知れませんわ。家族の者が可哀相だといふ同情が有ればこそ、かうやつてどうにか首がつながれて居るんですけれど！　自分では、あんまり豪過ぎるんでみんなに恐れられたり嫌まれたりしてるんだといふ風に、いゝ氣に成つて納まつてるんですの！　そしてわたし達の爲めに何かとりなしてくれる士官の奥さん達をば、そりや怨んで惡く云ふんですの！

クルト　實はわたしが此處へやつて來たのは、此海のほとりで平和を見出さんが爲めでした……そしてあなた方の事情はちつとも知らなかつたものですから……

アリーツェ　ほんとにお氣の毒に！……それはさうとあなた食べ物はどうなさいますの？

クルト　わたしはドクトルの家へでも參りますが、然しあなたは？　失禮ですがあなたの分はどうぞわたしに心配さして下さいませんか？

アリーツェ　でもあの人にそんな事を感付かれようもんなら、わたし殺されてしまひますわ！

クルト　〔窓から外を覗きて〕御覽なさい、あんな巖壁の上に突立つて風にさらされて居りますよ！

アリーツェ　考へて見ればあの人だつて可哀相よ……そんな人間に出來上つてゐるといふ事がね！

クルト　可哀相と云へばお二人ともですよ……一體之れはどうしたものでせうね？

アリーツェ　わたしには解りません！……それから勘定書が一束も來て居りますわ、あの人は未だ見もしませんけれど……

クルト　物を見ないといふ事も場合によつては幸福かも知れませんね！

アリーツェ　〔窓際にて〕マントを開いて胸を風にさらして居りますわ！　屹度死ぬつもりよ、あの人は！

クルト　死ぬつもりだらうとはわたしには思はれませんね、と云ふのは、昨夜すんでの事に自分の命が流れ出してしまひ相に成つた時、あの人はしつかりとわたしの命にしがみ付いて、わたしの內部の事情を根掘り葉掘りほじくり出したもんです、まるで自分の肉體から脫出してわたしの中へもぐり込んで來て、わたしの命を自分の物として生きようとでもする樣な工合にね。

アリーツェ　それがそれあの人が吸血鬼（ワンピール）だといふ理由なんですの――他人の運命に干渉して、他人の生活から生血を吸取り、他人の運命を決定したり左右したりしようとするんです――自分自身の生活はあの人にはちつとも興味が無いもんですからね。それから、氣を付けなさいよ、クルト、あの人を家庭生活の内部へ引入れたり、自分の友達等と近付きにしたりしようもんなら飛んでも無い事に成つてしまひますよ――あの人はそんな物を殘らずふんだくつてしまつて自分の物にしなけりや承知しないんですからね……其點にかけてはあの人はほんとに凄い魔力を持つて居りますの！……あの人があなたのお子さん達と知合にでも成らうもんなら、成るか成らない中にすつかり自分の味方に手馴付けてしまふに決つてゐますわ、そして自分の力で左右して、自分の頭通りに教育してしまふんです――無論あなたの御希望と恰度正反對な人間に出來上るやうにといふ事を第一の目的としてね。

クルト　アリーツェ、今考へ合せて見ると、わたしの離婚の際にわたしの手から子供を奪つたのはあの人じや無かつたんですか？

アリーツェ　もう古い話だから申上げてしまひますけれど――お察しの通り、あの人だつたんです！

クルト　わたしも其疑は持つて居たけれどはつきりとは解らなかつたんです！　矢張り彼奴だつたのか！

アリーツェ　あの時あなたはあの人を絶對に信頼して平和の使者として奥さんのところへおやりに成つたんでせう、するとあの人は早速奥さんを手に入れて、子供を横取りする策略を吹込んだのですわ！

クルト　あゝ、神様！……何といふ事だ！

アリーツェ　それであの人の性格の新しい一面が解つたといふわけですわ！

沈默。

クルト　あの人が昨夜……自分でもう駄目だと思つた時に……わたしに頼んで約束をさせた事が有るんですよ――將來お子さん達の面倒を見てくれといふ事をね！

アリーツェ　でもあなたは御自分のお子さんを奪はれた恨みの復讐をうちの子供達に晴さうとはなさいませんの？

クルト　復讐をすると云へば、わたしはわたしの約束を守り通す事に依つて復讐をするんです！　わたしはどんな事が有つても約束通りお子さん達の面倒は見て上げる積りですから！

アリーツェ　それこそほんとうに此上無しの復讐ですわ、さうした尊い雅量位あの人の嫌ひなものは無いんですからね！

クルト　そんなら別に復讐をせずとも、自然に復讐をした事に成るわけですね！

アリーツェ　わたしはこれでも正義としての復讐は大好きですわ！　そして、意地の悪い事をした人間が報いを受けて苦むのを見てやりたくてたまりませんの！

クルト　あなたは未だそんな風の考へ方に止まつていらつしやるんですか？

アリーツェ　えゝ〳〵、わたしは何時に成つたつてさうした女ですわ、そしてわたし、敵を赦すとか、敵を愛するなんて云出した日には、それこそ僞善者に成つたのですわ！

クルト　アリーツェ、心の中に思つてゐる事を洗ひざらひ打撒けてしまはない事、たまには見て見ぬふりして大目に見のがすといふ事が人間の務めに成つてる場合も隨分有るものです！　それが即ち寛容の德といふもので、人間には誰にも必要な事なんです！

アリーツェ　わたしにはそんな必要がありませんわ！　わたしの生活は明けつ放しで、影日向が有りません、わたしは一體ごまかし札といふ物を使つた事の無い人間ですわ！

クルト　それはちと云過ぎでせう！

アリーツェ　いゝえ、それでも云足りない位ですわ！　あの男の爲めに、愛しても居ないあの男の爲めに、罪も無くして苦んだ事といふ物は……

クルト　じやあ何故あなたは結婚なんかしたんです？

アリーツェ　何故ですつて？……あの人がわたしを浚つて行つたんじやありませんか！　詰りわたしを誘惑したんです！　わたしは何が何やら無我夢中だつたんですの！　然し一旦さう成ると、わたし高い所へ登らうと思ひ出しましたの、社會の高い所へ……

クルト　そしてあなたの藝術を棄てたんですね！

アリーツェ　えゝ、輕蔑されてゐた藝術をね！　でも御存じの通り、あの人はわたしをまんまと騙し了せたんです。あの人はわたし達の前には如何にも立派な生活がぶら下つてゐる樣な甘い事ばつかり云つて聞かしたんです……美しい家庭やら何やらね！　ところが實は有る物と云つたら借金ばかりでせう……金がくつ付いて居るのはぴか〳〵する軍服だけで、それもほんとうの金じや無いと來てるんですもの！　つまりわたしまんまと騙されちやつたんです！

クルト　一寸待つて下さいよ！　青年が戀に落ちた時には必ず希望多き未來を描くに決つたものです……其希望が其通りに實現せられなかつたからつて、それは赦されなければなりませんよ！　そんな事を云つた日にはわたしだつて同じ樣な工合に人を騙した覺えは有ります、それでも自分を嘘吐きだとは思つて居りませんからね……何か壁の上に見えますか？

アリーツェ　あの人が倒れやしないか見てるんですの！

クルト　倒れましたか！

アリーツェ　いゝえ、生憎倒れませんの！　あの人はいつでもわたしを騙してるんです！

クルト　じやあわたし之れからドクトルと區裁判官のところへ行つて來ます！

アリーツェ　〔窓に腰かけて〕行つて來て下さい、クルト！　わたし此處に坐つて待つてますわ。わたし待つ事なら幾らでも慣れて居りますからね！

第三幕

白晝に於ける同一舞臺裝置。砲臺上の歩哨の姿從前の如し。

アリーツェ　〔右手の臂掛椅子に坐す。その髪半白に成り居る〕

クルト　〔ドアをノックして後、左手より登場〕御免、アリーツェ！

アリーツェ　いらつしやい、あなた、さあおかけなすつて！

クルト　〔左手の臂掛椅子に腰を下す〕汽船が今着いたところです！

アリーツェ　あの人も其船で來たのなら、どんな事が始まるかわたし解つてますわ！

クルト　來ましたよ、此船で、わたしはあの人のヘルメットがピカ〳〵するのを確に見たんです！一體町へ行つてどんな事をやつて來たんでせう！

アリーツェ　大抵見當が付いてますわ。正裝で出かけたんですから、屹度大佐のところへ行つたに相違ありません、それに訪問用の手套なんか持つて行きましたから、訪問をして來たに相違ありませんわ！

クルト　あなたは昨日のあの人の落着き拂つた態度に氣が付きませんでしたか？　大人しく酒を止

めて節制を守る様に成つてからは、まるで別人に成つてしまひましたね――いやに落着いて、萬事控へ目勝ちで、思慮深く成つて……

アリーツェ　わたしにも解つて居りますわ！　そしてあの人が若ししよつ中あんな白面で居る様だつたら。みんなにとつてそれこそ恐る可き惡魔に成つた時ですよ、あの人はウィスキーに醉拂つて他愛も無く成つて居るのが多分人類にとつての幸福ですわ！

クルト　つまり酒の精があの人をすつかり骨抜きにして居たんですね！……でもあなたは御覽になりませんか――死の極印を打たれてからといふもの、あの人は自己を高める一種の威嚴と云つた様な物を體得した様ですね、尤も、例の靈魂不滅の新しい信仰が生ずると共に人生に對する違つた見方を體得した、といふ様な事も有り得るでせう――恐らく其爲めかも知れませんね。

アリーツェ　まるで、見當違ひの買冠りよ！　あの人は内心に恐しい事を企らんで居るのです、それだもんだから一寸外見はそんな風に見えるんです！　あの人の云ふ事なんぞ其まゝ信じたらそれこそ大變な事に成つて了ひますわ、あの人は考へ〳〵嘘を吐いてるんですからね！　惡だくみを考へ出す事の上手さと云つたら、とてもあの人の足下にも寄付ける人は有りませんわ……

クルト　〔ふとアリーツェに目を止める〕　アリーツェ！　どうしたんです？　あなたは此二日間で白髪に成つてしまつたんですか！

アリーツェ　いゝえ、あなた、わたしは一體初から白いんです、そしてあの人が死んだ様に成つてしまつてからは染めるのも止したもんですからね！　二十五年間もこんな要塞の中で……あなた、此處は元牢屋だつたんですの！

クルト　牢屋！　成程壁がさうらしいですね！

アリーツェ　わたしの顏色だつて矢張り其色ですわ！　子供達までが此牢屋の色に染まつてしまつたんです。

クルト　わたしには殆ど想像する事もむづかしいですね、元氣な子供達がこんな氣味の惡い壁に圍まれて遊び戯れて居られるものかどうか！

アリーツェ　えゝ、實際遊び戯れるなんて事は至つて稀でした！　そして亡くなつた二人の方は、光線不足の爲めにそんな事に成つてしまつたんですの！

クルト　ところで、之れからどんな事に成るか、あなたは見當が付くとかおつしやいましたね？

アリーツェ　えゝ、思ひ切つた打擊がやつて來るだらうと思ひますの、あなたにもわたしにもね！　あなたがユーディトの電報をお讀みになつた時、あの人の眼からよく覺えのある光がぎらり閃くのをわたし確に見付けたんです。無論其凄い目の光はユーディトを射る筈のものなんですけど、何と云つてもあの子は射線外に立つて居りますからね、それであの人の憎みはどつさりとあなた

の上に落ちかゝつて來たんですの！

クルト　ちやああの人は一體わたしをどうしようといふ積りなんでせう？

アリーツェ　それははつきりとは云へませんわ、けれどあの人は、他人の祕密を嗅出す事にかけては、とても信じられない樣な不思議な力を有つてるんですの……そしてあなただつて見聞きなすつた通り、あの人は昨日なんぞまる一日あなたの檢疫所の事に頭を突込んで其事ばかり云つて居ましたし、あなたの生存から自分の生活の興味を吸取つて、まるであなたのお子さん達だけの爲めに生きて居る樣な風だつたじやありませんかい！　「人喰ひ」――全くさうですわ！　あの人自身の生活なんて物は無く成りかけて居るか、もう無く成つてしまつて居て、他人の生活を自分の物にして生きて居るんですからね！

クルト　そんな印象は確にわたしも受けましたよ――あの人はもう違つた世界に住んで居ると云つた樣な感じをね。あの顏は、今や解體しかけた人間であると云ふ事を據言してゐる樣な顏ですね……そして目といふと、まるで墓場や沼等にちら〳〵する鬼火かなんぞのやうに凄く光つて居るし！……いよ〳〵來ましたね！　どうでせう、あの人はあなたとわたしに嫉妬らしい感情を持つたといふ樣な事が有り得るでせうか？

アリーツェ　いゝえ、そんな嫉妬なんかするにはあの人は餘りに氣位が高過ぎるんです！……『おれが嫉妬を感じなけりやあならん樣な男が有つたらお目にかゝらう！』――そんな事を云つてるんですからね、あの人と來たら！

クルト　そんなら勿怪の幸といふものですよ、あの人の缺點も時には役に立つ事が有るんですね！　どうでせう、わたし之れから出迎へたらいゝでせうか？

アリーツェ　成るべくあの人には不作法にした方がいゝんですの、さうで無いと、猫を冠つてるんだとひがんでしまひますからね！　それからあの人が又例の出鱈目を云ひ出したら、何も彼も一々御尤もといふ樣な顏をして聞いてるんです！　わたしあの人の云ふ事ならどんな嘘だつて直ぐにわたしの字引で飜譯して本音を發き出すのはわけが有りませんからね！……わたし何だか恐しい事が始まり相な氣がしますわ……でも、クルト、どんな事が有つても自分をしつかりと抑へて居なければ駄目よ！……わたし達の長い間の戰でわたしの唯一の勝味は、どんな場合にも夢中にならずにしつかりと自分を落着けて居るといふ事だつたんですの……あの人と來たら、反對にウィスキーで直ぐかつとのぼせ上つてしまふもんだから何時でも敗けて了ふんです！……さあ、見て居ませう！

大尉　（正裝に、ヘルメット帽、マンテル、白手袋にて左手より。落着き拂つて一種の威嚴を備へたれど、顏色蒼ざめ、目は凹み落ちたり。よろめきつゝ進み出で、ヘルメットとマンテルとを着けたるまゝ、クルトと

アリーツェより遠か離れたる右手の椅子にどつかと坐す。會話中常にサーベルを膝の間にしてゆる〕いや失敬！　こんな風をして失禮だけれど、少し疲れて居るもんだからね！

アリーツェとクルト　お歸りなさい！

アリーツェ　如何ですの？

大尉　氣分は極上さ！　只少しばかり疲れて居るんでね！……

アリーツェ　町では何か珍しい事が有りまして？

大尉　うむ少しばかり、善い事がね！　おれは醫者の所へも行つて來たよ、何でも無いんだ相だ、摂生を守りさへすりやあ、もう二十年位は大丈夫なんだ相だ！

アリーツェ　〔クルトに〕例の嘘よ！　〔大尉に〕それは結構でしたのね、あなた！

大尉　うむ、さうだよ！

沈默。其間に大尉何か自分に話しかけられん事を欲するもの〻如くに、アリーツェとクルトの方をじろ〳〵見やる。

アリーツェ　〔クルトに〕今何か云つちやあいけませんよ、向うの方から口を切らせるんです、すると自分の方から語るに落ちて尻尾を出してしまひますからね！

大尉　〔アリーツェに〕お前今何か云つたかい？

アリーツェ　いゝえ、わたし何んにも云ひはしませんわ！

大尉　〔ゆつくりと〕ねえ、クルト！

アリーツェ　〔クルトに〕さあ始まりましたよ！

大尉　おれは、おれは町へ行つて來たんだよ、知つての通り！

クルト　〔承知して頷く〕

大尉　おれは今日色々の人と近付きに成つたがね……其中に……若い志願兵が一人有つてね、〔ためらひつゝ〕砲兵のね！〔間、其間クルトに不安の色有り〕ところが……志願兵に缺員が有るものだから恰度此處でね、それでおれは大佐と相談して、其男を此方へ連れて來る事にしたよ……これは君も喜んでくれるに相違無いと思ふ。殊に君が喜ぶに相違無いわけといふのは……其男は他でも無い……君の……伜なんだ！

アリーツェ　〔クルトに〕そら、いよ〳〵吸血鬼の本性を發揮して來ましたわ！　ね！

クルト　普通の場合だつたらそれは親爺を喜ばせるかも知れませんが、わたしの様な場合には只苦しいだけですね！

大尉　君の云ふ事はおれには解らないよ！

クルト　いや強ひて解つて下さるにも及ばないんです、只わたしはそれを望まないと申し上げて置

けば澤山です。

大尉　さう、君はさういふ考へなんだね？……そんなら聞かして上げるがね、其青年はもう此方の隊へ移る命令を受けて居るんだよ、そして此瞬間からもうおれの指揮下に立つてるんだよ！

クルト　そんならわたしは是非とも他の聯隊へ轉ずる樣にさせます！

大尉　それは君駄目だよ、君は君の息子に對してはちつとも權利が無いんだからね！

クルト　ちつとも？

大尉　無いよ、裁判に依つて母親に親權が與へられてるんだからね！

クルト　そんならわたしは母親と連絡を取る事にしませう！

大尉　なあに、それには及びませんよ！

クルト　それには及びません？

大尉　うむ、其通り、其手續きはもうちやんとおれが濟まして來たからね！

クルト　〔起上るが、又腰を下す〕

アリーツェ　〔クルトに〕今度こそ此人は死ぬのが當然です！

クルト　本當の「人喰ひ」だ！

大尉　さういふ次第さ！　〔アリーツェとクルトに直接に〕お前達は何か云つたかね？

アリーツェ　いゝえ！　あなた耳がお惡いんぢや無いの？

大尉　うむ、ちつとばかり！……だがお前もつとおれの側へ寄つたら、少し話が有るんだが、内證で！

アリーツェ　そんな必要はありませんわ、そして證人が立合つて居る方がどちらにも利益なことも有るものです！

大尉　そりやあお前の云ふ通りだ、證人が居るのは何時でも善い事だよ！……だが先づ第一に、遺言狀は出來上つたかね？

アリーツェ　〔彼れに書類を渡す〕　公證人が自分で作つたんですよ！

大尉　お前の有利にだらう！……善し！　〔それを讀んでから、念入りにずた〳〵に引裂き、床に投げ棄てる〕　さうした次第さ！

アリーツェ　〔クルトに〕　あなたこんな人間を見た事が有つて？

クルト　之れは人間じやあ無い！

大尉　さう、おれはアリーツェにかういふ事を云ひたいんだ！

アリーツェ　〔不安らしく〕さあどうぞ！

大尉　〔相變らず落着き拂つて〕　我々の不幸なる結婚に於ける慘憺たる生活を打切らんとする、夙に

言明せられたるお前の希望を容れ、夫と子に對するお前の愛情の缺乏に基き、また家政を執るに際してのお前の怠惰に基き、おれは今日町へ出た序に、裁判所へ離婚の訴へを提起して來たよ！

アリーツェ　さう？　そしてその理由は？

大尉　〔相變らず冷靜に〕今述べた理由の他には、全然個人的な理由なんだ！　即ち、おれは尙二十年間も生きられるといふ事が明かに成つた以上、此不幸なる結婚を、より適當なる他の結婚に乘換へようといふ覺悟を決めたのだ——それでおれは、おれの運命を或る一人の女の運命と結び付けようと欲する——其女はその夫に對する從順と共に、若々しさをも、それから——遠慮無く云へば——幾分の美しさをも我が家にもたらしてくれるだらう處のお方なんだ！

アリーツェ　〔指輪を拔取りて大尉に投付ける〕　さあ、受取つて下さい！

大尉　〔それを受取つて、チョッキのかくしに仕舞ひ込む〕　此女は私に指輪を投げ付けました！　お立合の證人は此點を書留めて置いて下さるでせうね？

アリーツェ　〔昂奮して起上る〕　そしてあなたは、わたしを追出して、他の女を引ずり込まうつてんでせう？

大尉　如何にも！

アリーツェ　かう成つたらもう何も彼も打撒けてしまふ他に無いわ！……クルト、此人はね、わたしに對して謀殺未遂の罪を犯して居るのですよ！

クルト　謀殺未遂？

アリーツェ　えゝ、此人はわたしを海に突落したんです！

大尉　證人が無いよ！

アリーツェ　嘘ですよ！　ユーディトが見てたんじやありませんか！

大尉　それが何に成るんだ？

アリーツェ　あの子が證言してくれます！

大尉　いや、そんな事は出來ないよ、あの子は何んにも見はしないと云つてるからなあ！

アリーツェ　あなたがあの子を仕込んでそんな嘘を吐かせるんですよ！

大尉　いや、おれはちつとも仕込む必要なんか無かつたよ、お前がちやんと嘘を吐く事を敎へ込んで置いてくれたものだからね！

アリーツェ　あなたはユーディトに逢つて來たんですか？

大尉　うむ！

アリーツェ　お、神樣！

大尉　今や要塞は陷落した！　十分間の猶豫を與へて敵に自由撤退を許す事にしよう！〔時計を卓

の上に置く〕　十分間だぞ、時計を卓の上に置いて！　〔心臓部に手をあてゝじつとする〕

アリーツェ　〔大尉に靠せ寄つてその腕を捉へる〕　どうしたの？

大尉　知らん！

アリーツェ　何か欲しくはありませんの？　何か飲物は？

大尉　ウィスキーか？　いや、おれは死にたく無いんだ！　お前！……〔すつくと立つ〕　おれに觸るな！……十分間だぞ、それが經過すれば守備兵は斬倒されるんだ！　〔サーベルを抜放つ〕　十分間！　〔正面奥より退場〕

クルト　何だい、一體此人間は？

アリーツェ　惡魔ですわ、人間ぢやありませんわ！

クルト　一體おれの倅をどうしようといふ積りなんだらう？

アリーツェ　あの人は屹度人質に取らうといふんですよ、あなたを自分の自由にする事が出來るやうにね。あの人はあなたを此島の主立つた人達から引離して孤立にしてしまはうとするんです。……あなたは御存じかどうか知りませんけれど、此島は島の人達に「小地獄」と呼ばれて居るんですの。

クルト　それは知りませんでした！……アリーツェ、あなたはわたしの同情を呼起した最初の婦人です、大抵の女はどんな不幸に出逢つたつて自業自得で同情する餘地の無い奴等ばかりなんですがね。

アリーツェ　どうぞ今わたしを見棄てないで下さい！　どうぞわたしから逃げて行つて了はないで下さい、あの人わたしを打つんですから……あの人は此二十五年間わたしを打ち續けて來たんです……然も子供達の見てゐる前でね……おまけにわたしを海の中へ突落したんです……

クルト　其事を聞かされた以上、わたしは斷然あの男に反抗します！　わたしは實際何の惡意も持たずに此島へやつて來たんです、あの男の先年の侮辱や讒謗等も一向氣に止めずに！　わたしの子供達を奪つたのはあの男であるといふ事實をあなたの口から聞かされた時でさへ、わたしは宥してやる積りだつたんです……何しろ相手は病人で死にかけて居たんですからね……然し、今度といふ今度は、わたしの倅まで奪はうとするに至つては、もうあの男は死ぬのが當然です、彼れか――或は此わたしか、何方かが。

アリーツェ　よくおつしやいました！　どうしておめ〳〵此要塞を明け渡すもんか！　要塞も彼奴も一緒くたに空中に木葉微塵に爆發させてしまふんだ、わたし達も一緒に成つたつてかまやしない！　火藥の用意はわたしがしますわ！

クルト　わたしが此島へ來た時には實際ちつとも惡い感情を持つて居なかつたんです、そしてあなた方の憎惡が何だか自分にも感染して來さうに思はれた時、わたしは逃げ出さうと思つたんです。然しもう斯う成つてしまつては、わたしは何處までもあの男を憎み通さずに置きません――恰度惡といふ事を憎んで來たと同じ樣に！……それで、之れからどういふ風にしようといふんです？

アリーツェ　何時かあの人がわたしに戰略を授けた事が有りますの！　それはね、太鼓を鳴してあの人の敵を驅り集めて、同盟軍の味方を求めるのです！

クルト　あの男がわたしの妻を見付け出したといふのは！　何故あの二人は三十年も前にめぐり逢はなかつたんだらう！　それこそ大地を震はす樣な大戰爭がおつ始まつたんだらうに！

アリーツェ　でも今度其二人が甘くめぐり逢つたんです……そして直き又別れるに決つてますわ！　あの人の急所はわたしちやんと握つて居りますからね、わたし早くからあの人を變だ〳〵と思つてる事が有りますの！

クルト　此島では誰が一番あの人の苦手なんです？

アリーツェ　それはあの兵器監なの！

クルト　正直な人間ですか？

アリーツェ　えゝ、さうです！……そして其人は感付いてるんです、わたしの……わたしも知つてる事ですがね……あの人と或る砲兵曹長とが企らんで居る事を其人は氣が付いてるんです！

クルト　二人はどんな事を企らんだんです？……一體どんな事を？

アリーツェ　横領罪よ？

クルト　恐しい事だ！　いや、わたしはそんな事件には關係したくありません！　そんな穢い物には手を觸れるのもいやだ！

アリーツェ　ハ、、、！　ほんとに豪いのね、あなたは！　そんな事で敵を征伐する事が出來るもんですか！

クルト　以前には出來たんです、だがもう駄目ですよ！

アリーツェ　何故駄目なの？

クルト　わたし氣が付いたんです――矢張り此世には正義といふ物が支配して居るといふ事を！

アリーツェ　そんなら其正義が來るまでだまつて待つて居たらいゝでせうよ！　そしたらあなたの息子さんがあの人に取られてしまふまでです！　一寸わたしの白髪を見て頂戴！……之れでも染めさへすりやあ、まだ毛は澤山有るんですからね！……あの人は之れから再婚するつもりですつてね！　そしたらわたしも自由の身に成れるわ――再婚でも何でも出來る自由な身にね！　そしてもう十分經つとあの人は縛り上げられて此下に禁錮されて了ふんです、此下に（と足で床を踏付

けながら〕此下にね……そしてわたしあの人の頭の上で踊るんだわ、『ボヤールの侵入』を踊るんだわ……〔手を腰にして二三回ダンスの足取をなす〕……ハヽヽ！　そしてピアノをかき鳴らして彼奴に聞かしてやるんだ！　〔矢鱈にピアノを打鳴らす〕おゝ！　牢獄が入口を開く！　そして拔身の劍を持つた番兵はわたしを監視するのじや無くつて、彼奴を……メリタムタムタ・メリタリアレエ！……彼奴を、彼奴を、彼奴を監視する事に成るんだ！

クルト　〔醉へるが如き目をして彼女を見詰める〕　アリーツェ！　魔女だな、矢張りあなたも！

アリーツェ　〔椅子の上に飛び上つて月桂樹の花輪を取下す〕之れをわたし引揚げの時に持つて行く事にするわ……勝利の時には月桂樹をね！　それから此ひら〳〵するリボン！　少し埃が付いてるのね、でも常盤の綠は變らないわ！——わたしの若さと同じ様に！——わたし之れでも未だお婆さんぢやあ無くつてよ、クルト！

クルト　〔輝ける目もて〕どうしても魔女だ！

アリーツェ　えゝ、「小地獄」のね！……ちよいと、わたし之れからおめかしをやるわ……〔婆たほどく〕二分間で着物を着て……それから二分間で兵器監のところへ出かけて行つて……それから、要塞の爆破！

クルト　〔以前の如く〕魔女だ！

アリーツェ　あなたは何時でもさう云つてたのね、わたし達が未だ子供の時分にも！　あなた覺えて居て——二人で夫婦ごつこなぞをして遊んだあの時分の事を？　ハヽヽ！　あなたは其頃から矢張り内氣で臆病だつたのね！

クルト　〔眞面目になつて〕アリーツェ！

アリーツェ　えゝ、さうだつたわ、あなたは！　そしてそれがまたあなたにはよく似合ふんですもの！　ねえあなた、世の中にはなるべく内氣な男を好くお轉婆が有るものよ、そしてまた、お轉婆を好く大人しい男も……有るつて話だわ！……あなた、あの頃ちつとはわたしを好きだつたでせう、ねえ？

クルト　おれは一體何處に居るんだらう！

アリーツェ　一人の女優の側にいらつしやるのよ——禮儀作法なんて事には無頓着だけれど、其他の事にかけては申分の無い淑女なのよ！　さうよ、さうよ！　でもわたしもう自由の身だわ、自由だわ、自由だわ！……一寸其方を向いていらつしやいよ、ジャケツを取換へますから！

アリーツェ鈕を外す。クルト矢庭に飛付いて女を兩腕に抱き上げ、咽喉に嚙み付く。女聲を立てる。すると彼れは女を長椅子の上に投げ出して、あわてゝ左手より退場。

第四幕

同一の舞臺裝置にて、夕。砲臺上の歩哨の姿は相變らず正面の窓越しに見える。月桂樹の花輪は椅子の背に引かけてある。吊ランプ既にともされたり。

大尉、顏色蒼ざめ目は落ち凹みて、髪はやゝ白く成り、着古したる軍服に乘馬長靴を穿き、書き物机に坐し眼鏡をかけてパーシアンスをなせり（パーシアンスは「忍耐」の意にして、忍耐を要する一種の遊戯法。二人或は一人にても爲し得。多くカルタを用ふ。）。

幕合の音樂幕の揚りし後にも、新人物の登場するまで續けらる。

大尉は遊戯を續け居れど、時々痙攣的に肩をすくめ、不安らしく目を上げては耳を澄ます。

パーシアンスはいくらやつても決りが付かぬらしく、大尉はじれつた相にカルタを取集める。それから彼れは左方の窓へ行きて押開き、カルタを外に投げ出す。窓は開かれたるまゝにて、蝶番の所ががた〳〵鳴つて居る。

彼れは戸棚の所へ行きしが、窓のがた〳〵するに驚かされ、振返りて、何事なるかを見屆ける。戸棚よりウイスキーの黑き角瓶を三本取出し、しげ〳〵と打眺めて——扨てそれをも窓より投げ出す。次にシガーの箱を數箇取出し、其一つにじつと嗅ぎ入りて後、矢張り窓から投げ出す。

それより彼れは眼鏡を取外し、拭いて、それで見えるや否やを檢す。それから之れをも窓より投げ棄つ。彼れはよく目の見えぬ人の如くに家具の間をよろめき歩き、戸棚（シヴァスネール）の上に、六本の蠟燭立てる大燭臺に火を點す。扨て花輪が目に付きし故、それを取つて窓際迄行きしが、又引返す。ピアノの蔽布を以て注意深く花輪を包み込み、書き物机よりピンを持來りて、其隅々を留め、それを椅子の上に載せる。

さてピアノに近付いて拳を以て鍵を叩き試み、鍵盤を閉ぢて後、鍵（かぎ）を窓から投げ出す。それから彼れはピアノの上に灯を點ず。扨て飾棚に行きて妻の寫眞を取出し、熟視して二つに引裂き、床上に投げ出す。窓の蝶番未だがた〳〵する、彼れは又もそれに驚かされる。

それを見屆けて安心したる後、息子と娘の寫眞を取出し、慌しくキスして、胸のポケットに押込む。其他の寫眞は一氣に腕もて掃き落し、靴にて寄集めて一山と爲す。

それが濟むと今度は疲れた樣に書き物机にぐつたりと坐し、心臟部を攫む。扨て卓上に點火し、吐息をつき、恰も忌はしき幻影を見るかの如くにじつと空を凝視す。

再び起上つて戸棚（シヴァスネール）に近付き、開いて中より青絹の紐もて結へたる一束の手紙を取出し、ストーヴに投げ入れて、戸を閉す。

と、電信機こと〳〵と鳴り出せしも、間も無く又靜寂に歸る。大尉は殆ど死の恐怖に襲はれしものの如くに戰慄しつゝ起上り、心臟部に手をあてたるまゝ聽耳立てゝ立すくむ。然し電信機よりは最早何も聞えぬ故、左手のドアの方へ耳を澄ます。其方へ歩み寄り扉を開いて一歩中に入り、腕に一疋の猫を抱きて戻り來り、猫の背を撫でる。而して右手へ去る。

此時音樂はたと止む。

アリーツェ　〔正面の入口より登場。外出着、黒き髪、帽子、手袋――しなを作つて入り來り、數多の燈火を見て打驚く〕

クルト　〔左手より登場。神經質らしき顏付〕

アリーツェ　まるでクリスマスの晩見た樣だわ！

クルト　どうでした？

アリーツェ　〔彼れに手を差出してキスさせる〕　わたしにお禮をおつしやいよ！

クルト　〔厭々ながら彼女の手にキスする〕

アリーツェ　證人が六人よ、其中四人は岩の樣に大丈夫なの。もう告訴してしまひましたからね、返事は電信で此處へ來る筈なの――こゝへ、要塞の眞中へね！

クルト　さう！

アリーツェ　「さう」なんて云はずに、有難うとおつしやいよ！

クルト　どうしてあの人はこんなに澤山灯を點けたんだらう？

アリーツェ　暗い所に居ると怖いからよ、無論……まあ電信機を御覽なさい！　恰度コーヒー挽きの把手見たいじやありませんか――わたし挽くのよ、挽くのよ、そしてコーヒーの豆がパチ〳〵碎けるのよ、まるでごり〳〵齒を引つこ拔く時の樣に……

クルト　あの人は一體此部屋で何をやらかしたんでせう？

アリーツェ　まるで引越し騷ぎの樣だわ！　此下の方へあなたも引越すんでせう！

クルト　アリーツェ、そんな風に云つちやあいけない！　わたしはどうもあまりいゝ氣持がしませんよ……何と云つてもあの人は子供の時分からの親友だつたし、それにわたしの困る時には隨分好意を寄せてくれた事だつて有つたんですからね……考へて見れば氣の毒にも成りますよ！

アリーツェ　そして此わたしは氣の毒でも何でも無いのね――何の罪咎も無い此わたしは、あんな化物の爲めに折角の自分の經歷を臺無しにしてしまはなければならなかつた此わたしは？

クルト　經歷々々つて、一體どんな御經歷なんです？　そんなに御立派な物だつたんですか？

アリーツェ　〔猛り立つて〕何を云つてるの、あなたは？　御存じ無いの、あなたは――わたしがどんな人間であるか、どんな人間であつたか？

クルト　え〳〵！

アリーツェ　あなたももう始めるつもり？

クルト　もう？

アリーツェ　〔クルトの首玉に飛付いてキスする〕

クルト　〔彼女を兩腕に抱き上げて、彼女が聲を立てる程咽喉に噛み付く〕

アリーツェ　わたしに噛み付くのね！

クルト　えゝ、わたしはあなたに噛み付くんです、此咽喉笛の所にね、そして山猫の様にあなたの生血を吸ひたいんです！　あなたは、あなたつて人は、わたしの中に野獣の心を呼起したんだ、幾年も幾年もかゝつてわたしは此情慾を諦めと苦行とで押殺してしまはうとして居たのに！　こへやつて來た時、わたしは自分をあなた方に比較してちっとは善い人間だと思つて居ました、然し今に成つて見るとわたしは誰よりもみじめな人間に成下つてしまつた！　あなたの其恐しい赤裸々の姿を見せられてから、情慾がわたしを盲目にしてしまつてから、わたしは全身に漲る惡の力を感じて居るんです、そして醜は美に成り、善は醜い弱い物に成つて來ました！……さあお いで、キスで息の根を止めてくれる！……〔彼女を抱擁す〕

アリーツェ　〔彼れに左の手を見せて〕あなたが解いて下すつた鎖の印を御覽なさいよ！　これまではわたし奴隷だつたんです、でももう解放されましたわ！……

クルト　けれどその代り今度はわたしがあなたを縛りますよ……

アリーツェ　あなたが？

クルト　えゝ、わたしが！

アリーツェ　わたしはさう思つて居ましたわ、あなたは屹度……

クルト　贋信者だらうつて！

アリーツェ　えゝ、だつてあなたは人類の墮落だとか何だとか、いやに聖人振つた事ばかり云つてるんですもの！

クルト　さうだつたか知ら？

アリーツェ　だからわたし、あなたは屹度お說教をしに來たんだらうと思ひましたの！

クルト　さうだつたんですか？……一時間經つとわたし達は町へ出かけます！　そしたらわたしはどんな人間であるかがわかりますよ……

アリーツェ　町へ行つたら今夜は一緒に芝居へ行くのよ、そして大勢の人達へわざと見せ付けてやるんです！　わたしが他の男と逃げたといふ噂が廣まれば、あの人は此上無しの恥をかく事に成るんですからね！　あなた解つて？

クルト　解りかけて來ましたよ！　牢屋だけじやああの男には足りないといふんでせう？

アリーツェ　足りませんとも！　其上に赤恥をかゝしてやらなけりやあ！

クルト　それにしても變な世の中ですね！　あなたが破廉恥な行爲をやつて、それであの人が恥をかく事に成るなんて！

アリーツェ　世間なんてどうせさうした頓馬なものよ！

クルト　まるで此牢屋の壁が、無數の罪人の有らゆる邪惡を殘らず吸込んででも居る樣ですね、そして此部屋に籠つてゐる空氣を一寸吸つただけでもう、誰にでも其惡氣が乘移るんだ！　あなたは芝居や晩餐の事を思つて居た樣でしたね！　わたしは又伴の事を考へてたんですよ！

アリーツェ　〔手袋を以て彼れの口のあたりを打つ〕馬鹿！

クルト　〔手を上げて、彼女に耳打ちを喰はせんとす〕

アリーツェ　〔後に退きて〕シッ、シッ！

クルト　御免なさい！

アリーツェ　膝をついて！

クルト　〔跪く〕

アリーツェ　顏を地べたにくつ付けて！

クルト　〔床に額をすり付ける〕

アリーツェ　わたしの足にキスして！

クルト　〔彼女の足にキスする〕

アリーツェ　もう二度とするんじやありませんよ！……起つて！

クルト　〔起上る〕おれは何處へ來たんだらう？　おれは一體何處に居るんだらう？

アリーツェ　わかつてるわ！

クルト　〔ぎよつとしてあたりを見廻し〕おれはもう何だか……

大尉　〔杖にすがれる慘ましき姿にて、右手より登場〕君と一寸話が出來ないだらうか、クルト、君と二人だけで？

アリーツェ　自由撤退に關する事なんですか？

大尉　〔繼物卓の前に坐して〕どうぞ君、一寸でいゝからこゝにかけてくれないか！　それからお前は一寸……遠慮をして貰ひたいんだがね、アリーツェ！

アリーツェ　どんな事だらう？……新しい合圖！——〔クルトに〕どうぞ、そこにおかけ下さいな！

クルト　〔しぶ〳〵其處に腰を下す〕

アリーツェ　そして年長者と智惠者の云ふ事をよくお聽きするんですよ！……それから若し電信がかゝつて來たら　…一寸知らして下さいな！　〔左手へ去る〕

大尉　〔暫時の後、重々しく口を開いて〕君はおれの、おれ達の樣な運命を理解する事が出來たかね？

クルト　いゝえ、自分の運命すらよくは解らないんですからね！

大尉　然らば此混沌たる物の中に存する意義は一體何だと思ふね？

クルト　わたしのより善き瞬間に於てはわたしは斯う信じて居たものです――我々は其意義なる物を自ら經驗する事は不可能である、然も尙無意識的に何物かの前に身を下して頭を下げる、それが卽ち意義なんだ、といふ風に……

大尉　頭を下げる！　自分自身以外に確乎たる或物を認むるに非ずんば、おれは斷じて頭を下げる事なんぞ出來やしないよ！

クルト　如何にも御尤もです、然しあなたは數學家として、二三の旣知の數が與へられたる場合、之れより未知の一點を見出す事が出來る事は疑がありませんね！

大尉　おれは其點を求めて、然も遂に之れを見出す事が――出來なかつたんだ！

クルト　じやあ屹度誤算なすつたんでせう、もう一遍やり直した方がいゝでせう！

大尉　おれはもう一遍やり直すだらう！……だが一體君はどうしてそんな諦念を體得したんだ？

クルト　わたしはそんな諦念なんか體得しては居りませんよ！　どうぞ買かぶらないやうにして下さい！

大尉　君は多分氣が付いて居るかも知れないけれど、おれは處世法といふ奴をかういふ風に解してるんだ――『撮(つま)み出せ！』――之れがおれのモットーなんだ！　卽ち抹殺して而して押進むんだ！　おれは大きな袋を一つこしらへて置いて、有らゆる侮辱や屈辱をどん〳〵其中へ投り込んで置いたものだ。そして其袋が一杯に成ると、どぶんと海の中へ投り込むんだ！――おれは信じて居るが、凡そおれ位ひどい屈辱を受けた人間も無いだらう。だが、例の主義で抹殺して押進む時、そんな屈辱なんぞもうおれの前には存在しないんだ！

クルト　あなたは如何にあなたの生活と周圍とを詩的に改造したお方であるかは、わたしも氣が付いて居りましたよ！

大尉　さうでもしなかつたら、どうしておれは生きて來られただらう、どうしておれは持堪へる事が出來ただらう！〔心臟部を攫む〕

クルト　どうかなすつたんですか？

大尉　どうもいけない！〔間〕それから君の所謂「詩的改造」の能力が止む瞬間がやつて來る。すると現實が赤裸々に目の前に暴露せられる！……それは實際恐しい事だ！〔今や彼れは聲に老人らしき涙を滿へ、下顎を落して物語る〕ねえ、君……〔氣を取直し、いつもの聲にて〕ゆるしてくれ給へ！……町へ行つて醫者に聞いて見たら、〔再び涙聲に成つて〕おれはもう癈人だと云ふんだ……〔普通の聲に戻りて〕そしておれはもう長くは生きられないんだ相だ！

クルト　醫者がさう云つたんですか？

大尉　〔涙聲にて〕さうだ、醫者がさう云つたんだ！

クルト　じやああれはほんとうじや無かつたんですか？
大尉　何が？　あゝさうか……いや、あれはほんとうの事じや無かつたんだ！
　　間。
クルト　そんならもう一つの事も矢張りほんとうじや無かつたんですか？
大尉　おれの兄弟はどんな事を云つたつけね？
クルト　わたしの伴が志願兵としてこちらの方へ赴任させられたとかいふ事ですよ！
大尉　そんな話はちつとも聞いた事が無い様だね。
クルト　あなたは只今のお話の様に他人の非行だけで無く、あなた自身の非行をも抹殺する能力も無限に有つてるらしいですね！
大尉　おれの兄弟の云ふ事はどうもおれには解らないよ！
クルト　じやあもうあなたもおしまひですね！
大尉　うむ、もうおしまひに近いよ！
クルト　そんなら多分、奥さんを侮辱する様な離婚訴訟を提起したとかいふのも、あれも出鱈目なんですか？
大尉　離婚？　いや、そんな話はちつとも知らなかつたよ！

クルト　〔起上る〕　それじやあなたは嘘を吐いたんだつて事だけは承認するでせうね？
大尉　おれの兄弟の奴は隨分ひどい言葉を使ふからな！　だがお互に寛容の德といふ事が大切だよ！
クルト　じやああなたは其點を認めたんですか？
大尉　〔きつぱりと、ほがらかなる聲にて〕うむ、おれは其れを認めた！……だからあれはどうか宥してくれ、クルト！　何事も水に流してくれ！
クルト　男らしい一言でした！——然し實はわたしあなたを宥して上げる様な事は一つも無いんです！　そしてわたしはあなたが思つて居られる様な人間じや決して無いんです！　少くとも今ではもうそんな人間じや無く成つてるんです！　殊に、他の點はしばらく措いて、あなたの其告白を聽く資格の有る様な人間じやあ決して無いんです！
大尉　〔明晰なる聲もて〕人生つて奴は妙な物だつたよ！　兎角つむじ曲りで、意地の惡い奴でね——おれの子供の時分からさうだつた……そして世間の奴等も意地惡ばかりそろつてやがるんだ、それでおれも自然根性がひねくれて行つたんだ……
クルト　〔電信機の方へ目をやりながら、不安らしく室内を歩き廻る〕
大尉　何を見てるんだい？

クルト　電信機を止めてしまふわけには行かないものでせうか？

大尉　いや、そんな事は善く無いよ！

クルト　〔一層不安らしく〕砲兵曹長のエストベルクとかいふ男はどんな人間ですか？

大尉　正直な男だよ、いくらか商人根性は有るがね！

クルト　じゃあ兵器監といふのは？

大尉　あれはおれの敵では有るが、今更惡く云ふ程の男でも無いよ！

クルト　〔窓から外を眺める、外には提燈の光がちら〳〵動いてゐる〕あちらの砲臺の方で提燈を持つて騒いでるのはどうしたんです？

大尉　提燈かね？

クルト　さうです、そして人が四五人動いて居ますよ！

大尉　多分「加勢」つていふ奴だらう——我々の言葉で云へば！

クルト　それはどういふんですか？

大尉　四五人の兵士と砲手が一人さ！　又何處かの可哀相な奴が何か善く無い事をして暗い所へ打込まれるんだらう！

クルト　おゝ！

大尉　君はもうアリーツェをよくわかつてる筈だが、あの女をどう思ふね？

クルト　それはわたしには云へませんよ……わたしは一般に人間つて物が解らなく成つてるんです！　奥さんだつてあなた同様、又わたし自身と同様、どうもはつきりと正體が掴めません！　わたしも漸く『おれは何んにも知らない、おれは何んにも解らない！』といふ事を認め得る様な年輩に成つて來たらしいんです！——でも或る行爲を見ると、その動機を知りたいといふ心持だけは大いに有るんです……一體あなたはどうして奥さんを海に突落しなんぞしたんです？

大尉　おれには解らん！　只、彼女が棧橋の上に立つて居た時、おれには至つて自然な事の様に思はれたんだ——あれが海の中へ突落されなければならないつて事がね。

クルト　そしてあなたはそれを後悔もしないんですか？

大尉　しないねえ！

クルト　變ですね！

大尉　うむ、確に變だよ！　そして餘り變なものだから、しまひにはそんな卑劣な事をしたのは斷じて自分では無いと信ずる様に成つた位なんだ！

クルト　奥さんがあなたに復讐するだらうといふ事は考へなかつたんですか？

大尉　彼女はもう十分にそれをやつたんじや無いだらうか？　そして其れも甚だ自然な事だとおれは思つて居るよ！

クルト　どうしてあなたはそんなに早くそんな皮肉な諦めに到達する事が出來たんですか？

大尉　それはね、おれが一度死といふ奴に當面して以來、此人生つて物が之れ迄とは違つた顏を見せる樣に成つたんだよ！……ねえ、君！　若し君がアリーツェとおれの間を裁くとしたら、どちらを正當とするね？

クルト　どちらも正しくはありませんね！　然しわたしはどちらにも無限の同情を寄せます——どちらかと云つたら、あなたの方に少し多いかも知れません！

大尉　握手さしてくれ給へ、クルト！

クルト　〔片手を彼れに差出し、他の手を大尉の肩にかけて〕我が昔の親友！

アリーツェ　〔左手より。今度は日傘を持つてゐる〕　まあ、お睦しいこと！　ほんとうの友情ね！……電信は未だかゝつて來なくつて？

クルト　〔冷かに〕未だですよ！

アリーツェ　ほんとうにいつまでぐづ〳〵してるんだらう、わたしじれつたく成るわ、そしてじれつたくなれば、わたし自分の手でどし〳〵やつ付けてしまひますからね！……見ていらつしやい、クルト、わたし今此人に止めの鐵砲を打つのよ！　すると見てゐる間に斃れてしまふわ！……先づ彈丸を込めて——わたしだつて射擊法位は心得て居てよ、あの有名な射擊法をね、賣れ殘りが五千部もあつた此人の教科書で以てね……それからわたし狙ひを付けて——擊て！　〔傘を銃の如くに構へて狙ひを付ける〕　——あなたの新しい奥さんは如何です——あの若くつて、美しくつて、未だ知られない新夫人は？　あなた御存じ無いでせう！　でもわたしはちやんと知つてるのよ——わたしのいゝ人はどうしてるか！　〔クルトの首玉に噛り付いてキスする、彼れは彼女を突飛ばす〕　うちのいゝ人はピン〳〵してるの、只少しはにかんでるのよ、未だね！……あなたはほんとにお目出度いお氣の毒な方ね、わたしなんか一寸も愛した覺えの無いあなた、嫉妬をやくには餘りに已惚れが强過ぎるあなた、あなたは何んにも御存じ無しで鼻毛を伸しておいでになつたのね——わたしに鼻端をつかまへられて散々小突き廻されて居たのもとんと御存じ無しでさ！

大尉　〔サーベルを引拔いて彼女に切つてかゝる、然し徒らに家具を傷つくるのみ〕

アリーツェ　人殺し、人殺し！

クルト　〔動かずに立つたまゝ〕

大尉　〔サーベルを手にせるまゝ倒れる〕　ユーディト！　かたきをとつてくれ！

アリーツェ　萬歳！　くたばつた！

クルト　〔正面入口の方へ退く〕

大尉　〔起上る〕未だ死なないぞ！　〔サーベルを鞘に收め、縫物卓の側なる臂掛椅子に行きて腰を下す〕

ユーディト！　ユーディト！

アリーツェ　〔クルトの側へ行きて〕さあ、行きませう——御一緒に！

クルト　〔彼女を突飛ばす、彼女は膝を突く〕地獄へでも行つてしまひなさい、もとの古巣へ！　〔去らんとす〕

大尉　行かないでくれ、クルト、此女はおれを殺してしまふよ！

アリーツェ　クルト！　わたしを棄てないで、どうぞわたし達を見棄てないで！

クルト　御機嫌よう！　〔退場〕

アリーツェ　〔態度を豹變して〕何といふ情無い奴でせう！　あんな者があなたのお友達なのね！

大尉　〔柔しく〕ゆるしてくれ、アリーツェ、そして此方へ來てくれ！　さあ早く！

アリーツェ　〔大尉に〕彼奴はわたしが之れ迄出逢つた人間の中では一番情無い、一番ひどい僞善家よ！——あなたは何と云つたつて男子だわ！

大尉　アリーツェ、聞いてくれ！……おれはな、もう長くは生きられない身體だ相だ！

アリーツェ　さうを？

大尉　醫者がさう云ふんだよ！

アリーツェ　そんならもう一つの事もほんとうじや無かつたの？

大尉　さうだ！

アリーツェ　〔身の置き所も無い樣に〕まあ、わたし何んて事をしてしまつたんだらう！

大尉　どんな事だつてもと通りに返せるもんだよ！

アリーツェ　いゝえ、之れだけはどうしてももと通りには成らない事なの！

大尉　いや、抹殺して而して押進めば、どうにかならないつて事は無いものだよ！

アリーツェ　でも電信が！　電信が！

大尉　電信だつて？

アリーツェ　〔大尉の側に跪きて〕わたし達は見放された人間なんでせうか？　こんな事がどうしても起らなければならなかつたのでせうか？　わたしは自分を、自分とあなたとを爆發させてしまつたんです！　あゝ何故あなたはわたしを騙す樣な眞似をしなければならなかつたのでせう！　そして折も折とて、あんな男がやつて來て、わたしを焚付ける樣な眞似をする事になんぞどうして

成つたんでせう……わたし達はもう駄目よ！　どうぞ何事も助けて下さいな、どうぞ何も彼も宥して水に流して下さいな——あなたの廣いお胸でね！

大尉　此世界に宥されないといふ物なんぞ有るものじや無いよ！　之れ迄だつておれがお前に宥してやらなかつた事が一つでも有つたかい？

アリーツェ　その通りですわ……でも此事ばつかりはどうにもならない事なんですの！

大尉　どんな事かおれには一向見當が付かないよ、惡だくみを發明するお前の素晴しい獨創力は兼ねて承知して居るが……

アリーツェ　あゝ、わたし此苦みからさへ拔け出されるなら！　若しわたし此難關さへ切拔けられるなら、それこそあなたを大事にしますわ……エドガー！　わたしあなたを愛しますわ！

大尉　おい、一體どういふ事なんだ？

アリーツェ　わたしの云ふ事をどうぞ信じて下さい——誰の力でももうわたし達は助からないのよ……全くどんな人間の力でも！

大尉　じやあ誰なら出來るといふんだ？

アリーツェ　〔大尉の目の中を覗き込みて〕わたしわかりませんわ！　まあ考へて見て下さいな——子供達はどう成るのでせう、一生汚名を着せられて……

大尉　そんならお前は何か家名を汚す樣な眞似をしてしまつたのかい？

アリーツェ　わたしじやありませんわ！　わたしじやありませんわ！……さうなつたら子供達は學校にだつて上つて居られないでせうね！　そして世の中へ出てからも、わたし達と同じ樣に一人ぼつちで淋しい思ひをするのでせう、從つて自然わたし達の樣に意地の惡いひねくれた人間に成つてしまふのでせう！……そんならあなた町へ行つた時、實はユーディトにもお逢ひにならなかつたのね——今こそわたし初めてわかりましたわ！

大尉　うむ、實は逢はなかつたんだ！……然し、兎も角、抹殺して押進むんだ——それがおれの流儀だ！

電信機鳴り出す。アリーツェ飛上る。

アリーツェ　〔叫ぶ〕とう〳〵わたし達の頭に災難が落ちかゝつて來たわ！　〔大尉に〕それを聞くんじやありませんよ！

大尉　〔冷靜に〕そんな物を聞きはしないよ、どうぞもつと落着いてくれ、リーザや！

アリーツェ　〔電信機の側に立ちながら、爪立てして窓外を覗かんとす〕聞いてはいや、聞いてはいや！

大尉　〔耳を抑へて〕おれはかうして耳を塞いでゐるよ、リーザや！

アリーツェ　〔手を高くさし延べつゝ、跪きて〕神よ、助け給へ！——逮捕隊がやつて參ります……〔號泣

して〕天に在します神よ！〔默禱を凝すものの如く唇を動かす樣に見える〕

電信機尙しばらく鳴り續け、細長き紙そろ〳〵と流れ出でゝ、間も無く靜寂に歸す。

アリーツェ　〔身を起し、紙片をもぎ取りて、口の中で讀む。それから目を天に向けて打仰ぎ、大尉の側に駈け寄りて、額にキスする〕無事に濟んでしまつてよ！　何でも無かつたの！〔他の椅子に坐し、ハンケチをあてゝ、烈しく泣き入る〕

大尉　一體お前はどんな祕密を持つてるんだい？

アリーツェ　どうぞ之ればつかりは訊かないで頂戴！　もう濟んでしまつたんですから！

大尉　お前の勝手にするがいゝよ、リーザや！

アリーツェ　まあ、三日前迄はあなたそんな柔しい言葉をかけてくれなかつたのね――一體どうしたんでせう？

大尉　うむ、それはね――初めて打つ倒れたあの瞬間、おれはもう墓場の向側に居る人間だつたんだ。其時おれの見た物はもう忘れてしまつた、然し其印象だけは今でも殘つて居るんだよ！

アリーツェ　それはどんな事だつたんです？

大尉　希望さ――何かより善き物に對する！

アリーツェ　より善き物に對する？

大尉　うむ！　之れこそ人生其物で無ければならんとは、おれは元來一度も信じた事が無かつたんだ……之れこそは死だ！　或はそれよりももつと惡い何かだ……

アリーツェ　そしてわたし達は……

大尉　一見お互に苦め合ふのが卽ち我々の任務だつたとでもいふ風に見えるじや無いか！

アリーツェ　そんならわたし達はもう遺憾無く苦め合つたものでせうか？

大尉　うむ、おれはさう思ふよ！　そして遺憾無く此無殘な生を引ずつて來たのだらうか？〔四邊を見廻す〕……おれ達はあとを片付けて、すつかり綺麗にして置かうじや無いか？

アリーツェ　〔身を起して〕えゝ、出來るならね！

大尉　〔室內を見廻し〕一日では駄目だ！　とても出來ん！

アリーツェ　そんなら二日掛りで！　何なら幾日でもかゝつて！

大尉　さういふ事にしようね！

間。

大尉　〔再び腰を下し〕お前此度も矢張り自由の身に成るわけには行かなかつたんだね！　そしてまたおれの身體にいましめの繩を掛けるわけにも行かぬかつたんだね！

アリーツェ　〔ぎよつとする〕

大尉　おれにはちやんと分つてるよ、お前はおれを牢屋へ打込まうとしたんだらう、然しおれはそんな物は抹殺してしまふんだ！……お前は今迄だつてもつとひどい事をしてるんだからな……

アリーツェ　〔言葉無し〕

大尉　然も横領罪とかいふ嫌疑に就いてはおれは全然潔白なんだぞ！

アリーツェ　そしてあなたの御意見では、わたしあなたの附添看護婦に成らなきやならない……？

大尉　お望み次第ではね！

アリーツェ　で無けりやわたしどうすればいゝんです？

大尉　おれは知らんよ！

アリーツェ　〔絶望的に、ぐつたりと腰を下す〕　ほんとうに永遠の苛責だわ！　そして終りといふ物は無いんでせうか？

大尉　お互に忍耐の覺悟を以てすれば、矢張り終りといふ物は有るよ！　恐らく死がやつて來る時に、ほんとうの生は始まるだらう！

アリーツェ　ほんとにさうだつたらね！

間。

大尉　お前はクルトを偽善家だと思つてるんだね？

アリーツェ　無論さうだと思ひますわ！

大尉　おれはさうは信じないよ！　だがおれ達の側に來る程の奴はみんな意地惡くひねくれて行く様に成るんだね……クルトは分けても弱い男だつた、そして惡の力は強いよ！

間。

大尉　見ろ、今では人生といふ物が此おれにとつて如何に平凡で無味な物に成つた事か！　以前にはどし〳〵打つてかゝつて來たものだが、今では只遠卷に脅すだけだ！——多分之れは間違が無いだらうが、おれ達はもう三ケ月經つと銀婚式の祝典を擧げるだらう……クルトを例の立會人としてな……そしてドクトルとゲルダも呼ぶ事にしよう……兵器監は祝辭演說をやるだらうし、曹長の奴は屹度萬歲の音頭を取るよ！　大佐だつて、我輩の觀察にして誤らずんば、自分の方からのこ〳〵出かけて來るね！——ふむ、お前笑つてるね！　だがお前あのアドルフの銀婚式の時の事を覺えて居るだらう……あの野戰獵兵のさ！　あの時銀婚式の嫁御寮は指輪を右手にはめなければならなかつたつけな、何しろ花聟先生夢中に成つた瞬間に鼻アの左の指輪指を指揮刀で以てちよん切つてしまつたといふ騒ぎだつた相だからな。

アリーツェ　〔ハンケチを口にあてゝ笑を押へる〕

大尉　泣いてるのかい？——いや、屹度笑つてるのだらう！——ねえお前、おれ達はまるで半分は

泣きたい様な、半分は笑ひたい様な氣持がするぢやないか！　此際一番いゝのは……何んにもおれに訊いてくれるな！……おれは此間新聞で讀んだけれど、或る男が……七度離婚して……だから詰り其男は七度結婚した事に成るんだが……最後の決着は、もう百に手が屆かうといふ年に成つてから一番初手の細君と突走つて一緒に成つたんだ相だ！　それが戀といふ曲者さ！……此人生といふ物は果して眞面目な物か、それとも單におどけ芝居に過ぎないのか、それはおれにも解らない！　そして此人生は單なる冗談に過ぎないとしても、冗談の人生といふ奴は決してそんなのんきな物では無くて、最も痛ましい物であるといふ事も有り得る、そして嚴肅とか眞面目とかいふ方は、元來却つておだやかで氣持のいゝものなんだ……だが折角眞面目な態度でやつて居る所へ、何處かからひよい〳〵飛出して來てはおどけ芝居に人を引込まさうとするひようきん者が有るよ……例へば、あのクルトの樣な男さね！……お前銀婚式はやる積りかい？

アリーツェ　〔默したるまゝ〕

大尉　うんと云へよ！　そりやあ世間の奴等は笑ふだらうさ！　だが笑はれたつてかまひはしない！　そしたら一緒に笑つてやるまでさ！　それともおどけ芝居はよしにして、お人柄相應鹿爪らしくやつて行くつもりかね？

アリーツェ　えゝ、わたしはもうどうでも！

大尉　〔眞面目に〕じやあ銀婚式だ！……〔起上る〕抹殺せよ、而して押進めよ、だ！——だから、どんどんやつて行くんだ！

第二部

人物

エドガー
アリーツェ
クルト
アラン　クルトの息子。
ユーディト　エドガーの娘。
中尉

場面

白色と金色とを以て装へる楕圓形の客間。正面の壁には硝子扉はまり居り、扉打開かれたる故前方に見晴し臺を望む。見晴し臺には石柱の欄干をめぐらし、石柱の頭には、ペトウニエン草や紅ベラルゴニエン草等を植ゑたる青白き陶器鉢を載せたり。此見晴し臺は公衆の遊歩場にて、その向うに海岸砲臺とそこに歩哨に立てる砲兵の姿を望む。尚遙か彼方には大洋。

室の左手に鍍金せるソーファ有り、其前に卓と椅子。右手に翼形ピアノ、書き物机、及び煖爐。舞臺の手前にアメリカ風の安楽椅子。書き物机の上に、銅製の臺ランプとそれに附屬せる卓。壁上には種々の古びたる油畫の額。

第一幕

アラン書き物机に倚り、數學をやり居る。ユーディト正面のドアより入り來る、裾短き夏衣、編髪を背後に、片手には鞠子、片手にはラケット。彼女は一寸入口に佇む。アラン身を起す、眞面目に、恭しく。

ユーディト　〔眞面目に、然しなれ〳〵しく〕何故テニスをやりにいらつしやらないの？

アラン　〔おど〳〵と、感情を制しながら〕僕忙しいもんですから……

ユーディト　あなた見なかつたの――あたし自轉車を樹の木に立てかけて置いたでせう、木から離しては置きませんわ！

アラン　え、、たしかに拜見しました！

ユーディト　そんなら、それはどういふ意味だつたの？

アラン　それは……僕にテニスをやりに來て貰ひたいつて事でせう……然し、僕の義務が……僕數學の問題をやらなきやならないもんですから……そしてあなたのお父さんと來たら、中々やかましい先生なんですから……

ユーディト　あなた、うちのお父さんをお好き？

アラン　えゝ、好きです！　よく生徒全部の面倒を見て下さいますから……

ユーディト　どんな人間でもどんな物でも、世話をやきたがるのよ、お父さんは。――あなたあたしといらつしやらない？

アラン　無論行きたいのは山々ですが――でも行けないんですもの！

ユーディト　それぢやあたしお父さんに暇を下さいつてお願ひするわ！

アラン　それはいけません！　みんなにしやべられますよ、そんな事をしたら！

ユーディト　お父さんにはそんな事を云つても駄目だらうと思つてらつしやるの？　なあに、あたしのしたいといふ事なら、お父さんだつてしたいと云ふにきまつてるのよ！

アラン　そりやあさうでせう、あなたが強情を張り通すんですから！

ユーディト　あなただつて隨分強情だつてことだわ！

アラン　僕は狼の性ぢやありませんよ！

ユーディト　そんなら羊ね！

アラン　其方がいゝですね！

ユーディト　何故あなたはテニスをやりに行かうつて云はないのか、そのわけをおつしやいよ！

アラン　御存じの癖に！

ユーディト　さあ、おつしやいよ！……あの、中尉の事でせう……

アラン　えゝ、あなたは實際は僕の事なんか之ればつかりも思つてゐるんぢや無いんです、でも中尉と二人切りでもあなたは矢張り詰ら無いんですね――僕が側に居てやきもき苦んでゐるところを眺めないと！　だから僕を引張つて行つて二人で慰まうといふんでせう？

ユーディト　まあ、あたしそんなに殘酷な女なのかしら？　あたし知らなかつたわ！

アラン　ぢや今度こそわかつたでせう！

ユーディト　それならあたし之れから氣を付けて直す樣にするわ、殘酷な女なんかに成りたくありませんからね！　殊にあなたの目に惡く映るのはいやですもの！

アラン　あなたはます〳〵僕の上に勢力を振はうと思つてそんな事をおつしやるんでせう！　僕はとうからあなたの奴隷に成つてるのに、あなたはそれだけじやあき足らなくつて、もつと奴隷を苦めて、猛獸の前に投り出さうといふんでせう！　あなたは既に一人の男を爪で引掛けて生捕にして置きながら、今度は僕をどうしようといふんです？　僕は僕の勝手にさして置いて下さい、あなたはあなたの御勝手になすつたらいゝでせう！

ユーディト　そんならあなたはあたしを追出さうといふのね？

アラン　〔答へず〕

ユーディト　そんならあたしもう行きますわ！――親類同士で時々は顔を合せなくちゃならないけれど、あたしもうお邪魔はしないわ！

アラン　〔再び机に向つて計算を始める〕

ユーディト　〔未だ行かずに、アランの向へる机の方へ次第に近寄る〕御心配は要りませんわ、あたし直ぐに帰りますからね……只一寸検疫所長のお宅つてどんな風か拝見するのよ！〔あたりを見廻す〕何も彼も白と金づくめね！――あら、大きなピアノ、ペヒシュタインだわ！――えゝ！――あたし遠なんぞ未だあの要塞の塔の中に住んで居るのよ、お父さんが退職に成つてからも……お母さんが二十五年間も押籠められて居たあの塔の中にね……それもやうやくお上のお情で許されて居るのよ！　おうちはお金持ね、おうちは……

アラン　〔静に〕僕のうちは金持でも何んでもありませんよ！

ユーディト　そんな事を云つたつて、あなたはいつでもいゝ着物を着ていらつしやるぢやありませんか！――そして又、あなたの着る物は何でも善く似合ふから不思議ね！……ちよいとあなたあたしの云ふ事を聞いて居て？

アラン　〔おさなしく〕聞いてます！

ユーディト　そんな計算だか何だかやつて居ながらあなた聞えるの？

アラン　僕は目で聞くんじやありませんよ！

ユーディト　えゝ、あなたの目は！……あなた自分の目を鏡で御覧になつたことが有つて？

アラン　勝手にしなさい！

ユーディト　あなたあたしを輕蔑してるのね、あなたは！

アラン　輕蔑も何も、僕はあなたの事なんかてんで念頭に在りませんよ！

ユーディト　〔近寄つて來て〕アルキメデスはじつと坐つて計算をして居たんですつてね、兵隊がやつて來て刺殺した時に！〔ラケットでアランの用紙に觸る〕

アラン　紙に觸らないで下さいよ！

ユーディト　アルキメデスも矢張りそんな事を云つたんですとさ！……あなた今屹度何か頭の中で考へ廻してるのね！　あたしはあなた無しには生きて居られないだらうといふ様な事を……

アラン　どうしてあなたといふ人は僕をかまはずに置いてはくれないんです？

ユーディト　まあ大人しくしていらつしやいよ、あたし試驗の時には屹度助けて上げますからね……

アラン　あなたが？

ユーディト　えゝ、あたし試驗官を知つてるのよ！

アラン　〔きつぱりと〕それで？

ユーディト　何んでも教官と仲よしにならなければ駄目だつて事はあなただつて御承知でせう？

アラン　教官つてお父さんと中尉ですか？

ユーディト　それから大佐もよ！

アラン　そしてあなたに助けてさへ貰へば僕は勉強をやらなくつても濟むといふんですか？

ユーディト　あなたは拙い翻譯家ね！

アラン　えゝ、原作が拙いもんでね！

ユーディト　まあ、あなたは恥かしく無くつて？

アラン　恥かしいですとも、あなたの爲めに、それから僕自身の爲めにも！――僕はあなたの云ふ事なんぞに耳を貸したのが恥かしいんです！……何故あなたは行かないんですか？

ユーディト　あなたはあたしが側に居るのを大好きだといふ事を知つてるからよ！――ほんとの事よ、あなたはいつもうちの窓の下を通るんでせう！　町へ行く時だつていつもあたしと同じ船に乘るじやありませんか！　あたしが船の前帆を操らなかつたら、あなたは町へ出る事も出來ないんじや無いの？

アラン　〔極り惡げに〕若い娘といふ物はそんな事を云ふもんじやありませんよ！

ユーディト　あなたあたしを子供だと思つてるの？

アラン　あなたは善い子に成る事も有るし、手におへない女に成る事も有りますよ！　あなたは此僕をあなたの羊に選んだんですね！

ユーディト　えゝ、あなたは羊よ、だからあたしあなたを保護して上げるのよ！

アラン　〔起上りて〕狼なら何時でも惡い羊飼に決つて居ますよ！……あなたは僕を喰殺さうつていふんでせう……それが祕密なんだ！　あなたはあなたの其美しい目を抵當にして、僕の頭を受け戻さうつていふんでせう。

ユーディト　あら、そんならあなたあたしの目を見たの？　あなたにそれだけの勇氣が有らうとは思はなかつたわ！

アラン　〔書類を集めて、右手へ去らんとする〕

ユーディト　〔ドアの前に立塞がる〕

アラン　退いて下さい、そでないと……

ユーディト　そでないと？

アラン　あなたが若し男だつたらなあ！　でもあなたは娘ですからね！

ユーディト　だからどうしたといふの？

アラン　若しもあなたが一片の自尊心を有つて居たら、自分が追出されてると分つた場合、直ぐにも出て行かなけりやならん筈だといふんですよ！

ユーディト　いゝわ、ようく覺えていらつしやい！

アラン　承知しました！

ユーディト　〔腹立たしく、正面の方へ〕ほんとに覺えていらつしやいよ！　〔退場〕

クルト　〔左手より登場〕何處へ行くんだい、アラン！

アラン　あ、お父さんでしたか！

クルト　誰だい、あんなにあわてゝ飛んで行つたのは……庭木がまださわ〳〵してるよ！

アラン　ユーディトです！

クルト　あの子は少しお轉婆だな、だがいゝ娘だよ！

アラン　意地惡で亂暴の娘は、いつでもいゝ娘だと云はれるんですね！

クルト　そんなにやかましくいふもんじや無いよ、アラン！……お前はあの新しく出來た親戚の人達はあまり氣に入らないのかね？

アラン　エドガー小父さんは僕好きですが……

クルト　さう、あの人には中々いゝ所も有るよ……それから他の先生達は？　あの中尉なぞはどうだね？

アラン　あの先生は不公平です！　僕だけに何か怒つてゐるのかしらと思はれる事が有る位ですよ！

クルト　いや、そんな事は無いだらう！……お前はあんまり人間の事を考へ過すよ！　餘り深く物事を考へずに、自分の義務だけを盡してる方がいゝんだよ、そして他の人間は他の人間で勝手に苦んだり考へたりさして置くさ！

アラン　えゝ、僕はさうしてるんです、でもみんなが僕を闕はずにそつとして置かないもんですからね！　つまり人を一緒に引ずり込むんですね……まるであの橋の下の烏賊の様に……嚙付きはしませんがね、然し渦を卷いて底の方へ吸込むんです……

クルト　〔やさしく〕どうもお前は憂鬱に成り易い質だと見えるね！　おれの側に居るのはお前には適しないのかしら？　何かお前物足りないと思ふ様な事は無いかね？

アラン　いえ、僕はこれまでこんなに樂しく暮した事は無いんです……只此處に居ると何だかかう息が詰る様な感じがするんです！

クルト　此海岸に住んで居るとかい？　そんならお前海は好きで無いの？

アラン　いゝえ、大洋は大好きなんです！　けれどこんな海岸にはいやな海草や、烏賊や、水母や腔腸動物など、色んな物がうよ〳〵して居ますからね！

クルト　兎に角あんまり家の中に閉籠つてばかり居るのはよくないよ！　少し外に出てテニスでもやつたらどうだい！

アラン　そんな事詰らないんですもの！

クルト　お前ユーディトの事を何か怒つてるらしいね？

アラン　ユーディトですか？

クルト　お前は他人に對して餘りやかまし過ぎてちつとも假借をしない樣だが、さういふ人間は結局孤獨に陷るしか無いものだよ！

アラン　僕は決して他人に對してそんなわけじや無いんですけれど、然し……何だか僕は薪の一番下積みにでも成つてゐる樣な氣持がしてならないんです……そして火にくべられる順番がやつて來るまでじつと待つてでも居なければならない樣な……僕は上の方から壓へられてるんです、僕の上になつてゐる一切の物から壓へ付けられてるんです……

クルト　じやあ待つてるさ、お前の順番になるまで！　薪はだん〳〵減つて輕く成つて行くからね……

アラン　えゝ、でも隨分緩慢ですよ、そりやあひどく緩慢なものですよ！　あゝ、僕はそんな風にして下積みに成つてゐる中に全身微びてしまひ相ですよ！

クルト　實際若いつて事はそんなに愉快なもんじや無いよ！　それでもみんなは若い者を羨んでは居る！

アラン　さうですね！　じやあお父さんも僕と代つて見たいんですか？

クルト　まあ御免を蒙るよ！

アラン　お父さんは知つて居ますか――若い者にとつて何が一番苦痛なのか？　老人達が下らない事をしやべつて居るのに、じつと坐つて沈默を守らなければならないといふ事です……僕だつて或點に於てはそんな老人達よりも遙によく通じて居る積りなんです……それでも矢張り沈默を守つて居なければなりません！　いや御免下さい、僕はお父さんを老人扱ひにする積りじや無いんですから！

クルト　何故老人扱ひにしないの？

アラン　多分あれでせう――僕達は云はゞ此頃に成つて初めてよくお互に知り合つた樣なものですから……

クルト　それともう一つは……お前はおれをもつと違つた人間の樣に想像して居たからだらう！

アラン　えゝー

クルト　恐らくお前は別れて住んで居た此年月の間始終おれに對して溫い感情を寄せて居たといふわけでは無いだらうと思ふが！

アラン　其通りです！

クルト　お前おれの寫眞を見た事は有つたかい？

アラン　えゝたつた一枚、それも餘りよくとれてるんじや無かつたんです！

クルト　そして老けて居たんだらう？

アラン　えゝ！

クルト　十年程以前におれはたつた一晩で髪の毛が半白に成つた事が有つたよ！……其後それはだん〳〵進んで來ては居るがね、無論！……いや、もつと何か他の事を話すとしよう！……御覽小母さんが來るよ、おれの從妹の！　お前あの人をどう思ふね？

アラン　それは何んとも云ひたくありませんね！

クルト　じやあおれも訊くまい！

アリーツェ　〔極めて明るき色の夏の散歩衣を着け、日傘を携へて登場〕　お早う、クルト！〔アランを去らしめるやうに目で知らす〕

クルト　〔アランに〕お前は失禮しな！

アラン　〔右手へ去る〕

アリーツェ　〔左手のソーファに坐す〕

クルト　〔其側の椅子にかける〕

アリーツェ　〔云ひにく相に〕あの人が直き參りますから、そんなに御遠慮なさるには及びませんわ！

クルト　遠慮なんかする必要が無いじやありませんか？

アリーツェ　でもあなたは嚴格なお考へを持つていらつしやるんですから……

クルト　自分自身に對しては、無論さうです！

アリーツェ　ほんとにさうですわ！……わたしあの時の事を考へて見ますと全く自分の身を忘れてしまつてゐましたの、あなたこそわたしの繩を解いて下さる唯一のお方だと只もう一圖に思ひ込んで了つたものですからね！　でもあなたは流石にしつかりしたものでしたわね……だからわたし達はあんな事はもうさらりと忘れてしまつてもいゝ權利が有りますわ——實際わたし達の間には何んにも無かつたんですから！

クルト　じやあさらりと忘れてしまひませう！

アリーツェ　でも……あの人も忘れてしまつてゐるだらうとはわたし思はれませんの……

クルト　あの晩の事でせう——あの人が心臓の痙攣で卒倒してしまつて……もう死んだと思つてあなたが早手廻しに喜んで失敗した……？

アリーツェ　えゝ、其後あの人は恢復して、お酒を止めたもんですから、すつかり無口に成つて了ひましたの！　今ではあの人ほんとうに氣味が悪いんですよ、何かしらわたしなんぞには想像も付かない樣な事を心の中で計畫して居るらしいんですの！

クルト　アリーツェ、あなたの御主人は實際單純な好人物ですよ、わたしにだつてそりやあ親切にしてくれますからね……

アリーツェ　あの人の親切は氣を付けないと危いんですよ！　わたしも覺えがありますけれど！

クルト　えゝ〳〵！

アリーツェ　じやああなたも矢張り盲目にされてるんですわ！……あなたには危險が見えませんの、あの係蹄に氣が付きませんの？

クルト　氣が付きませんね！

アリーツェ　じやあもうあなたの身は破滅するに決つたものよ！

クルト　まさかそんな事は……！

アリーツェ　まあ考へても御覽なさい——わたし此處にじつと坐つて居ながら、不吉な事が猫の樣にそつとあなたの側に忍び寄つて來るのを見て居ますの……そして、あなたに指して見せても、あなたはそんな物は見えやしないとおつしやるんですもの！

クルト　アランだつて、隨分眞直に物を見る方だけれど、矢張りそんな物には氣が付かないんですよ！　尤もあれは只ユーディトだけを見てるんですがね、それは又いつでも親密な關係の擔保と成る物なんですがね。

アリーツェ　あなたユーディトを御存じ？

クルト　あの人懐つこい子でせう——編髪をお下げにして、可なり短い上衣を着けた……

アリーツェ　其通りですわ！　でも此間見た時には長い上衣を着て居りましたわ……そりやあまるで若奥樣と云つた風なんです……でも髪を結ひ上げて居るとそんなに若くは見えませんのよ！

クルト　發育は隨分いゝ方ですね！

アリーツェ　そしてあの子はアランとテニスをやつてますのね！

クルト　遊戯である間はそれでもいゝでせうよ！

アリーツェ　さうですね！……もう直きエドガーが參りますわ、そして其安樂椅子にかけますのよ、

乾度！——あの人は其椅子が好きで〳〵たまらないんですの——盗みもし兼ねない位に！

クルト　じやあ差上げませう！

アリーツェ　あの人をばそこにかけさして、わたし達は此處に坐つて居ませうよ。そしてあの人がしやべり出したら——朝の間はそりやあおしやべりなんですからね——何でも無い様な事をしやべり出したら、わたしあなたに通譯してほんとうの意味を知らして上げますわ！

クルト　あゝ、あなたといふ人はあんまり怜悧過ぎるんです、あんまり怜悧過ぎるんですね、アリーツェ！　わたしはたれが何と云つたつて敢て恐るゝ所が無いじやありませんか——自分の檢疫所を非難を受けぬ様に管理して、其上自分の身を正しく持つて抗しき所さへ無けりやあ！

アリーツェ　あなたは矢張り正義とか名譽とか、さう云つた様な物を信じていらつしやるのね！

クルト　えゝ！　そして其れは經驗がわたしに教へてくれたんです。わたしも最初はそれと反對な事を信じて居たものですよ……それはわたしにとつては餘りに高價だつたんです！

アリーツェ　やつて來ましたわ、あの人が！

クルト　あなたがそんなにびく〳〵するのは珍しいですね！

アリーツェ　わたしの元氣のいゝ時は、危險が近付いて來るのを知らない時なんですの！

クルト　危險が？……あなたは又わたしを嚇かさうといふんですね！

アリーツェ　それが出來る位ならいゝんですけれど……さあ、來ましたよ！

大尉　〔正面の入口より、軍服にて登場。ボタンをかけたる黑の乘馬外套、軍帽、銀の撞木附きのステッキ。一寸點頭きて挨拶し、進みて安樂椅子に腰を下す〕

アリーツェ　〔クルトに〕先づ此人から先に口を切らせるんですよ！

大尉　之れは素敵な椅子だね、君、之れは！　全く素敵だよ！

クルト　若しなんなら差上げてもいゝんですが！

大尉　いや、さういふ積りで云つたんじや無いんだが……

クルト　わたしは決してお世辭で云ふんじやありません！　あなたには實際どんなにお世話になつてるか知れないんですから！

大尉　ハ、、冗談を云つちやあ困るよ！……こゝはかうして居ながら島中殘らず見渡せるね、遊歩道もすつかり見えるね、ヴェランダに出てゐる人達もみんな見えるし、海の上を走つて居る汽船や、出船入船、何んでもすつかり見えるね……君は實際此島に於ける最上の好位置を見付けたといふものだよ——尤も此處は少くとも「幸福なる人々の島」じや無いけれどね！　それとも矢張り「幸福なる人々の島」かね、アリーツェ！……さう、「小地獄」の名が有るんだつけ、ところが

クルトは此處に天國をこしらへ上げてしまつたんだ！　無論イーヴ無しの天國をさ――イーヴがやつて來たらあつたら樂園も臺無しだからね！　ねえ君知つてるかい、此建物は王樣が狩獵においでになる時にお泊りになつた離宮だつたんだよ！

クルト　さういふ話はわたしも聞きました！

大尉　だから君は王樣の樣に暮して居るわけだよ、君は！　だがおれの口からあけすけにこんな事を云ひ出すのは恥づ可き事かも知れんよ、之れもみんなおれのお蔭で出來た事なんだからね！

アリーツェ　〔クルトに〕そら、いよ〳〵あなたを物にしようといふのよ！

クルト　さうです、ほんとうにわたしはどうしてお禮を云つていゝか分らない位なんです！

大尉　ハヽ、何を云つてるんだ！――それから、あの、葡萄酒の箱は屆いたかね？

クルト　えゝ！

大尉　あれでいゝかね？

クルト　非常に結構でした、どうぞあれを持つて來た商人にもよろしくさう云つて下さいまし！

大尉　彼奴はいつでも第一等品を持つて來るよ！

アリーツェ　〔クルトに〕第二等の値段でね――そして差額はあなたが拂はなきやならないのよ！

大尉　何を云つてるんだ、アリーツェ！

アリーツェ　わたし？　何んにも！

大尉　一體此島に檢疫所が置かれる事に成つた時、最初はおれが其地位を占めてやらうと思つたものだよ、そして其目的の爲めにおれはわざ〳〵檢疫法の研究を始めた位なんだ！

アリーツェ　〔クルトに〕眞赤な嘘よ！

大尉　〔饒舌になつて〕政府の採つて居る如き消毒法の舊弊な意見はどうもおれには贊成が致し兼ねるんだ！　おれは所謂「海水論者」の側だつたんだ――といふわけは、海水消毒法を主張する爲めに此名が有るんだがね……

クルト　一寸お待ち下さい！　わたしはしかと記憶して居りますが、あの時海水を用ゐる事を力說したのは此わたしで、あなたは火力消毒の方を……

大尉　おれが？　何を馬鹿な！

アリーツェ　〔聲高く〕クルトの云ふ通りですわ、わたしでさへはつきり覺えて居りますわ！

大尉　お前も……

クルト　わたしがよく記憶してゐるといふわけはですね……

大尉　〔話の腰を折つて〕さう云へばそんな事も有つたかも知れないよ、然しつまりどうでもいゝ事なんだ！　〔聲を高める〕其間に……今度はかういふ事に成つて來たんだ、全然新しい事柄が〔言葉

を掴まんとするクルトに〕……君は默つて居給へ！……新しい事柄が生じて來たんだ……そして檢疫法といふ物が將に驚く可き大進歩を爲さんとしつゝあるんだ。

クルト　一寸お伺ひしますが、雜誌にあの馬鹿らしい論文を書いてるのは一體誰ですか？

大尉　〔顏を赤くする〕それは知らないね、だが何故君はあれを馬鹿らしいと云つてるんだい？

アリーツェ　〔クルトに〕ちよいと、あれは此人が書いたんです！

クルト　〔アリーツェに〕此人が？……〔大尉に〕じやあわけの解らない論文とでもいふんでせうか？

大尉　君はそんな判斷なんぞ出來る柄じや無いよ！

アリーツェ　あなた方は喧嘩をなさるおつもり？

クルト　いや、飛んでも無い！

大尉　此島に居て周圍と平和を保つて行かうつて事は中々むづかしいよ、然し少くとも我々は何處迄も好き模範を揭げて進んで行かなけりやならん……

クルト　さうですとも！　然し、一つ說明して頂きたい事が有るんです！　わたしはこちらへ來ると間も無く知名の人々と殘らず知合に成りました、中でもあの公證人とは殊に親密に成つたんです——つまり我々の年齡に於て親しく成り得る程度に於てですがね。ところがしばらく經つと——あなたの御全快後間も無くですが——一人づゝだん〳〵わたしに對して冷淡な素振りを見せる樣に成つて來たんです、そして昨日なんぞあの公證人と遊步道で出逢つた時、わたしを見て見ないふりをするんです。實際どんなに厭な思をしたか知れやしません。

大尉　〔默す〕

クルト　あなたもさういふ風な敵意を周圍の人達からお氣付きになつた事は無かつたでせうか？

大尉　いや、おれは正反對だ！

アリーツェ　〔クルトに〕あなたは御存じ無いの——此人があなたの友達をみんな横取りしてしまつたんじやありませんか！

クルト　〔大尉に〕ひよつとしたら、あの新しい株を引受けるのを拒んだ爲めかも知れない、とも思つて見たんですがね。

大尉　いやそんな事は無いよ、だが何故君はあれを引受けなかつたんだらう？

クルト　僅ばかりの貯へは既にあなた方のソーダ工場の方へ出資してしまつたものですからね、それに又、新しい株を引受けたら古い方のは餘り善く無いものだといふ事を意味する事にも成りますからね。

大尉　〔氣が無さ相に〕君は素敵なランプを持つてるね！　何處から手に入れたんだい？

クルト　町からですよ、無論！

アリーツェ　〔クルトに〕今度はランプがあぶないわ、あなた？

クルト　〔大尉に〕どうぞわたしを恩知らずだとか、人を信頼しない男だとかいふ風には思はないで下さいよ！

大尉　でも友達と一緒にやり出した事業から自分だけ手を引かうつて云出すなんぞは、あまり信頼の念の強いといふ證據にはならん様だね。

クルト　えゝ、そりやまあさうですがね、極く普通の用心と云ふ點から云つても、人は時期に後れぬ中に自分と自分の所有物とを救ひ出すことを忘れてはならん、といふ事を教へられますからね！

大尉　救ひ出す事を？　まるで何か危險でも目の前に迫つて居る様な騒ぎだね！　誰か君の財産を强奪しようとかかつてゐる者でも有るのかい？

クルト　そんな人聞きの惡い言葉を使はなくつてもいゝじやありませんか？

大尉　おれは君の爲めに六分の利が付く様に投資してやつたのが、君は不滿なんだね？

クルト　不滿どころか、わたしは大いに感謝してるんですよ！

大尉　君は感謝なんかして居るもんか——そんな事は君の柄に無いんだ、と云つて君は其他にはどうにも仕方が無いんだらう！

アリーツェ　〔クルトに〕まあ、お聞きなさい！

クルト　わたしの性質には無論色々の缺點が有りますよ、そしてそれを矯正する爲めには之れでも隨分努力はしてるんですけれど、兎角思ふ様には行かないんです、然しわたしは自分の義務だけは忘れたく無い積りで居るんです……

大尉　じやあそれを見せて貰ひたいものだね！　〔手を延して新聞を取る〕何だい、これは？　廣告か！　〔讀む〕衞生顧問官逝去！

アリーツェ　〔クルトに〕今度は此人は人の死體をつかまへて何か儲け仕事を考へて居るんですよ！

大尉　〔獨言の如く〕屹度何かしら……變化が起るに相違無いね……

クルト　どんな方面にですか？

大尉　〔起上る〕今に分るよ！

アリーツェ　〔大尉に〕どちらへいらつしやるの？

大尉　おれは町へ行つて來なけりやならんと思ふ！……〔机上の封筒をちらと一瞥し、何か心に考へて うつかりして居るかの如くに其れを取上げ、表書を讀んで、もとに返す〕いや、これはついうつかりして濟まない事をした！

クルト　いや、何でもありませんよ！

大尉　アランの製圖器具だね！　あの子は何處へ行つてるね？

クルト　外でお嬢さん達とテニスをやつて居ます！

大尉　大きな坊やが！　それはいかん！　それにユーディトだつてそんなに跳廻らしては置けないよ……君は若旦那に目を配つて居なけりやいかんよ、おれもうちのお嬢さんには十分氣を付ける様にするからね！　〔翼形ピアノの側を通り過ぎて、二三音叩き見る〕　素晴しい音が出るね！　シュタインペッヒかい、え？

クルト　ペッヒシュタインですよ！

大尉　ほんとに君はうまく行つたよ！　おれに感謝してもいゝよ、元來おれが君を此方へ來る様にしてやつたんだからね！

アリーツェ　〔クルトに〕　嘘ですよ、此人は却つてあなたの邪魔をした位ですわ！

大尉　一寸失敬するよ！　次の船で一寸町へ行つて來るから！　〔壁にかかれる繪をじろ〳〵見廻しながら退場〕

アリーツェ　さあ？

クルト　さあ？

アリーツェ　わたし未だあの人の肚の中は讀めないわ。でも――あの人が見た封筒ね……あの手紙は誰から來たんですの？

クルト　お恥かしいものですよ――あれはわたしの唯一の祕密なんですから！

アリーツェ　それをあの人は易々と嗅ぎ出して了つたのね！　あなた思ひあたつたでせう――あの人は魔法を使ふつて、わたし前に云つて置いたのが！……封筒に何か印刷してあつたんですか？

クルト　えゝ、『選擧人協會』。

アリーツェ　そんならあの人はもうあなたの祕密を嗅ぎあてたに相違有りませんわ。あなたは國會議員に出るおつもりなんでせう、多分！　そして、今に御覽なさい、あなたでは無くつてあの人が、ちやんと成つてしまひますからさ！

クルト　そんならあの人はさういふ事を考へた事が有るんですか？

アリーツェ　いゝえ、然し其れを一目見てしまつた以上は一生懸命に其事に頭を突込んでるに相違有りませんわ！　あの人が封筒を見てる間に、わたしあの人の顏色でちやんとわかつたんですの。

クルト　其爲めに町へ出かけて行つたんでせうか？

アリーツェ　いゝえ、町へ行く氣に成つたのは、あの死亡廣告を見た時なんですの！

クルト　衛生顧問官が死んだからつてどうしようといふ積りなんでせう？

アリーツェ　さうですね、わたしにもよくはわかりませんわ！……でも其人は多分あの人の計畫の邪魔をした敵だつたんじや無いでせうか！

クルト　あの人があなたがおつしやる通りの人間だとすりやあ、怖がられるのも無理が有りませんね！

アリーツェ　あなただつてお聞きの通り、あの人はあなたを奪ひ、其上にあなたの兩手を縛り上げてしまはうとしたんですわ。實際跡方も無い事を恩に着せたりしてね。例へば、あなたの地位を世話してやつたのは自分だなんて云つてるけれど、眞赤な嘘ですわ、それどころか、あの人はあなたの就職を一生懸命妨げようとしたのですわ！　だからあれは「人泥棒」ですわ、甲蟲ですわ、あなたの内側に食ひ込んで、何時の間にか朽ちた松の木の様に空洞（うつろ）にしてしまはなけりや承知しない白蟻ですわ！……つまりあの人はあなたを憎んで居ますの、子供の頃からの友達といふ思出だけにはつながれて居るわけですけれどね……

クルト　隨分あなたも神經が鋭く成つてるんですね、人を憎み始めると！

アリーツェ　そして人は何んでも愛する時には馬鹿に成るのね！　盲目に、そして阿呆に！

クルト　まさか！　あなたの辯口にはかなひませんよ！

アリーツェ　あなた「吸血鬼（ヴァンピール）」といふのはどんな物か御存じ？……それはね、死んでしまつた人間の亡靈で、生きてる人間の身體を狙つて其中にもぐり込んで、寄生蟲の様に血を吸つて生きてる魔物なんですつて！　エドガーもあの時一遍倒れてからはもう精神的に死んで了つてるんです。あの人自身だけではもう何の興味も無く、個性も無く、自分から何かしようと思ひ立つ様な獨立性も無く成つてしまつたのです。然し一旦誰か一人の人間に狙ひを付けてそれをつかまへようもんなら、其人間にすつかり寄生してしまつて、生血を吸上げる管の様な根を下して、其血で以て自分の身體を大きくして、花咲く様に成るんですの。今はつまりあなたに寄生して例の根を下してる最中なんですわ！

クルト　あんまり近くに寄つて來たら、叩き落してしまふばかりですよ！

アリーツェ　そんないがなんか振ひ落してしまひなさいよ、出來るならね！……ちよいとあなた、ユーディトとアランが一緒に遊ぶのをあの人が喜ばないわけが解つて？

クルト　二人の感情を懸念してるんじや無いんですか？

アリーツェ　まるで違ひますわ！……あの人はユーディトをあの……大佐へ片付けようと思つて居りますの！

クルト　〔昂奮して〕あの老いぼれのやもめ男にですか？

アリーツェ　えゝ！

クルト　恐しい事だ！……そしてユーディトは？

アリーツェ　あの子はね、八十になる陸軍大將を手に入れる事が出來たら、六十になる大佐の頭を壓へ付ける爲めに、死に損なひのお爺さんの所へでも行き兼ねはしないつて程の子ですわ。人の首根っこを壓へ付けてぎゆう〳〵云はせる事――ようどさんすか――それがあの子の一生の目的なんですの！「踏ん付けて、壓へ付ける」――之れがうちの人達の標語（モット）なんです！

クルト　それが實際ユーディトの本性なんですか？　あの美しい、氣位の高い、立派な娘の！

アリーツェ　さうなんですの、わたし達はちやんと知つて居ますの！……わたし一寸こゝを拜借して手紙を書いてもよろしいでせうか？

クルト　〔机の上を片付ける。〕さあどうぞ！

アリーツェ　〔手袋を脱いで机に向ふ〕今度はわたし戰術を試して見るのよ！　毒蛇を退治しようとしかゝつて一遍はしくじつたけれど！　然し今度はわたし腕に覺えがありますからね！

クルト　然し擊つ前に先づ彈丸（たま）を罩めなくちやなりませんよ――いゝですか？

アリーツェ　えゝ、そして實彈をね！

クルト　〔右手へ退く〕

アリーツェ　〔考へて書く〕

アラン　〔慌しく入り來り、アリーツェの在るに氣付かずソーファに身を投げ伏し、袖縁のハンケチを顏にあてすゝり泣く〕

アリーツェ　〔初め一寸彼れを見てから、起上つてソーファに近寄る。やさしき聲にて〕アラン！

アラン　〔あわてて突立上り、ハンケチを背後にかくす〕

アリーツェ　〔やさしく、女らしく、僞ならぬ感動を以て〕わたしを怖がる事はありませんよ、アラン！わたしは決してあなたの惡い樣にはしませんからね……あなた、どうしたの？――何處か惡いの？

アラン　えゝ！

アリーツェ　何處がよくないの？

アラン　分らないんです！

アリーツェ　頭痛でもするの？

アラン　いゝえ！

アリーツェ　じやあ胸――苦しいの？

アラン　えゝ〳〵！

アリーツェ　苦しい、苦しい！　まるで心臓が溶けて流れ出し相に！　そして胸がだん〳〵……

アラン　どうして小母さんはそれが分るんです？

アリーツェ　そして、死んでしまひたいんでせう——おゝ死んでさへしまつたら、そしたら何も彼も眞暗闇に成つてしまふ！　そしてたつた一つの同じ事ばかり——同じ人の、同じ女の事ばかり思ひ詰めてるのね……でも二人の男が一人の女の事ばつかり思ひ詰めれば、どつちか一人の男にはます〳〵胸が苦しく成つて來るばかりだわねね……

アラン　〔我を忘れて例のハンケチを引むしる〕

アリーツェ　それがお醫者様でも癒らぬといふ病氣なのよ……何にも食べたくも無し、飲みたくも無し、只無性に泣きたいのね、そして苦い涙を流しては泣くんです……そんな時には森の中が一番いゝのよ、誰にも見られないから。だつて、さうした歎きをよく世間の人達は笑ひ物にしますからね……意地の惡い人達が！　あなたはあの子をどうしようといふの？　どうしようといふんでも無いわね！　あの子の口にキスしたいといふんでも無いわね、そんな事をしたら、あなたは死んでしまひ相に思ふでせう——あなたの思ひがあの子の方へ飛んで行けば、「死」が近附いて來る様な氣がするんでせう！　そして其れが矢張り死なのよ、ねえ坊や、命を吹込む死といふものよ。然しそんな事は未だあなたには解らないわね！……まあ菫の匂が！　あゝこれだわ！〔アランに近寄りて、手荒な事をせずにハンケチを取る〕　あの子の匂だわ、何處もあの子だらけね！　そしてあの子だけだわ！　おゝ、おゝ、おゝ！〔アラン、アリーツェの腕の中に顏を埋めてしまふ。他にせん術を知らず〕　可哀相に、まあ可哀相にね！　おゝどんなに辛いでせう、どんなに辛いでせうね！〔ハンケチで彼れの涙を拭いてやる〕　さう、さう、さう！　泣きなさい、涙の泉の涸れるまで存分に泣きなさい！　さう！　するといくらか樂に成りますからね！……だけど泣くだけ泣いたらもうちやんとしなくちやいけませんよ、アラン、男らしくね！　で無いとあの子だつて愛想を盡かしてしまひますよ！　殘酷な子、然しほんとうは決して殘酷じや無いの！——あの子はあなたをいぢめたの？　中尉の事で？　ねえ、いゝかい、あなたは中尉と仲よしに成つた方がいゝんですよ、さうすると二人一緒にあの子の話が出來る位に成りますからね！　そんな風に成るといくらか氣持も樂に成るものよ！

アラン　僕は中尉なんか見たくも無ないんです！

アリーツェ　まあお聞き！　今に見て居なさい、中尉の方からのこ〳〵やつて來ますからね、あなたと一緒にあの子の話をし合ひ度くつてね！　何故と云つて……

アラン　〔希望の光を認めし樣に顏をもたゞ〕

アリーツェ　さあ、教へて上げませうか？

アラン　〔又首を垂れる〕

アリーツェ　あの人も此事では矢張りあなたと同じ様に不幸なのよ！

アラン　〔嬉しげに〕そんな事は無いでせう？

アリーツェ　有りますともさ、確實な話よ、それであの中尉も自分の心持をすつかり訴へるやうな相手が誰か欲しいのよ、ユーディトに撥付けられた時にね！――あなたもう氣早に嬉しがつてるのね！

アラン　じやあユーディトは中尉のところへ行く氣は無いんですか？

アリーツェ　えゝ、と云つてあなたの所へ來る氣でも無いのよ、あの子は多分あの大佐のところへ行く事に成るでせうからね！

アラン　〔再びしよげる〕

アリーツェ　おや又雨が降り出したの？――さう、此ハンケチは矢張りあなたの物にはならないのよ、ユーディトは自分の物はそりやあ大事にする子ですからね、そして一ダースちやんと揃つてゐなけりや承知しないの！

アラン　〔當惑せる樣子〕

アリーツェ　えゝ、さうした子なんですよ、ユーディトは！……さあ此處に腰かけていらつしやい、わたしもう一本手紙を書きますから！　それからどうぞお使に行つて來て下さいな！　〔机に行きて書き出す〕

中尉　〔正面の入口より登場。憂鬱なれども、滑稽に見ゆる迄に至らず。アリーツェに氣付かずしてアランの方を目指して進む〕志願兵君！

アラン　〔姿勢を正して起立す〕

中尉　どうぞ其まゝ！

アリーツェ　〔二人を見る〕

中尉　〔アランに近寄り、彼れの側に坐す。吐息してさて懐よりハンケチを取出して額を拭く。其ハンケチ、アランの持てる其れに似たり〕

アラン　〔貪る如き目付きで其ハンケチを見る〕

中尉　〔悲しげなる目もて彼れを見守る〕

アリーツェ　〔咳をする〕

中尉　〔ハツと飛上る〕

アリーツェ　どうぞあなた、其まゝに！

中尉　失禮致しました、大尉夫人！

アリーツェ　ちつともかまひませんのよ！……どうぞおかけなすつて、此志願兵さんのお相手に成ってやつて下さいな、此島へ來て淋しがつて居る樣ですからね！〔書き續ける〕

中尉　〔極り惡げに、アランと小聲にて話す〕馬鹿に暑いですね！

アラン　さうですね！

中尉　もう第六卷は上げてしまつたんですか？

アラン　今恰度最後の問題をやりかけてゐます！

中尉　其奴はいやにひねくれてゐるでせう？

沈默。

中尉　君は何ですか……〔言葉を捜す樣にしながら〕今日はテニスをやつたんですか？

アラン　いゝえ、日中はあんまり暑いもんですから！

中尉　〔滑稽に見えぬ程度の不安の顏付〕えゝ全く、今日は馬鹿に暑いですね！

アラン　〔小聲にて〕えゝ、非常に暑いです！

沈默。

中尉　君は今日……舟を漕いだんですか？

アラン　いゝえ、前帆をやる人が居ないもんですから！

中尉　君はそんな……前帆をやる位の事なら僕に云つて下さればいゝのに！

アラン　〔相變らず鄭重に〕それでは餘り恐れ入りますから、中尉殿！

中尉　いやどうぞ、どうぞ……如何でせう……風が善かつたら、正午頃は……其頃なら僕ひまなんですが！

アラン　〔ずるく〕正午頃には風が凪ぐでせうね……其時分にはユーディト嬢は課業が有るんですが……

中尉　〔困つた樣に〕あゝさう、さうでしたね！　ふむ！——そんなら君は……

アリーツェ　どなたかお一人どうぞ此手紙を屆けて頂けないでせうか？

アランと中尉、疑はしげなる目を見交はす。

アリーツェ　あの、ユーディトのところへ！

アランと中尉、俄に飛上つてアリーツェの側に駈け付けるが、彼等の感情を包むべき幾分の體面は失はず。

アリーツェ　まあ、お二人で？　そんなら一番安全ですわね！〔中尉に手紙を渡して〕あの、中尉さ

ん、其ハンケチはわたしが頂いて置いた方がいゝやうですわ！　うちの娘は變な子でしてね、そんなハンケチの樣な物をひどくやかましく云ふんですよ！　いくらかこまかい方の質なんですね……ですから其ハンケチは此方に頂いて置きますわ！……わたし決してあなたを笑ふわけじやありませんの、でもあなたはそんな物を持つてらつしやると、詰らなく笑ひ物に成つてしまひますからね！　それにあの、大佐だつてまさかオセロの二の舞はやりたく無いでせうからね！〔ハンケチを取る〕（沙翁の悲劇「オセロ」の主人公は、妻のハンケチを間官が持ち居りしより疑惑と嫉妬を起し、妻を殺す。）さああなた方、行つてらつしやい、そして成るべく感情を外に表さないやうにするのですよ！

中尉　〔身を屈めて去る、アラン彼れに從ふ〕

アリーツェ　〔呼ぶ〕アラン！

アラン　〔しぶ〳〵ドアに立止る〕何です、小母さん！

アリーツェ　こゝにいらつしやい！　我慢がならない樣な苦しい目を見たく無いなら！

アラン　えゝ、でも中尉が行つてしまひますよ！

アリーツェ　勝手に身を焦させて置きなさいよ！　そして自分だけはよく氣を付けなさい！

アラン　僕はどうなつてもいゝんです！

アリーツェ　じやああなたは屹度あとで泣くわ！　そしてわたしが又慰め役を引受けなけりやならないのね！

アラン　僕は矢張り行きます！

アリーツェ　じやあいらつしやい！　でも戻つて來たら、あなたをうんと笑つてやつてもいゝ權利が有るんですからね！

アラン　〔急いで中尉のあとを追ふ〕

アリーツェ　〔又書き出す〕

クルト　〔登場〕アリーツェ、今匿名の手紙が來ましてね、わたし心配になつて來たんです！

アリーツェ　あなたエドガーに氣が付きませんか――あの人軍服を脱いだらまるで別人に成つて了ひましたのね！　上衣一枚でかうも人間が變るものだらうとはわたし今まで思はなかつた！

クルト　あなたわたしの質問に答へてはくれないんですね！

アリーツェ　だつてあなたのは質問じや無かつたんですもの！　只の知らせだつたんですもの！　あなたは一體何が御心配なの？

クルト　何も彼もめちやくちやに心配なんです！

アリーツェ　あの人町へ出かけて行きましたのね！　町へ行つて來ると屹度何かしら怖い物をお土

産に持つて來るのよ！

クルト　然しわたしにはどうにも手の付けやうが無いんです、何しろどつちの方面から攻撃が始まつて來るものやら、まるで見當が付かないもんですからね！

アリーツェ　〔手紙をたゝみて〕わたしの云つた事があたるかどうか見ていらつしやい！

クルト　じやああなた、わたしを助けて下さる？

アリーツェ　えゝ！……けれど、わたしの利害關係が許す以上にはとても出來ませんわ！　わたしの利害關係と云つても、つまりわたしの子供達の利害關係なんですけれどね！

クルト　それは解つてゐます！……ねえ、なんて靜なんでせう——自然が、海が、どこもかも！

アリーツェ　でもひつそりした其藪に何やら聲が聞えますわ　……ぶつ〳〵いふ樣な聲が、叫ぶ樣な聲が！

クルト　一寸默つて！　わたしにも何か聞えますよ！……いや、鷗だつた！

アリーツェ　わたしには何か他の聲が聞える樣ですわ、わたしには！……之れからわたし郵便局へ行つて來なければ——此手紙を出しに！

第二幕

同一舞臺。アラン書き物机に向ひて勉强し居る。ユーディト、ドアに立つ、テニス帽を冠り、手には自轉車のハンドルを持てり。

ユーディト　螺旋廻しを貸して頂戴な！

アラン　〔振返らずに〕いゝえ、貸せません！

ユーディト　あたし一寸でも顏を出すと、あなたは直ぐにいやな顏をなさるのね！

アラン　〔そんなに不愛想でも無く〕決してそんなわけぢや無いんですけれど、成るべく僕にはかまはないで置いて貰ひたいんです！

ユーディト　〔入つて來て〕アラン！

アラン　何ですか？

ユーディト　あたしのことを怒つちやいやよ！

アラン　怒つてなんぞゐませんよ！

ユーディト　じやあその印に握手して頂戴！

アラン　〔やさしく〕握手なんかしなくてもいゝでせう、然し僕は決して怒つてるんじやありませんよ！……一體あなたは僕をどうしようといふんですか？

ユーディト　あなたはほんとに頭が悪いのね、ほんとうに！

アラン　悪いには相違ありませんよ！

ユーディト　あたしを意地悪とばつかり決め込んでるのね、あなたは！

アラン　いゝえ、僕だつて、あなたは親切なお方だといふ事も知つてますよ！　あなたは親切にしようと思へばいくらでも出來るお方だつて事は！

ユーディト　あたしだつてあなた方にはどうにも手の付け様が有りませんわ——中尉と二人で森の中へ入り込んでめそ〳〵泣いてなんか居るんですもの！　何故あなた方は泣くの、え？

アラン　〔困惑〕

ユーディト　おつしやいよ！……あたし女だけれど、どんな事が有つたつて泣きなんかしやしないわ！　そして一體あなた方はどうしてあんな仲のいゝお友達に成つちまつたの？……腕を組んで散歩しながら、あなた方はどんな話をしてるの？

アラン　〔答へる事が出來ず〕

ユーディト　アラン！　あなただつて今に解るわ——あたしはどんな人間だか、それから自分が心配して居る人の爲めには屹度何かやれる女だつて事が！……それからあたしあなたに一つ忠告をして置きたい事が有るの……おしやべりするんじや無いんですけれどね！……あなた覺悟していらつしやいよ！

アラン　何をですか？

ユーディト　厭な事をですわ！

アラン　どんな方面の？

ユーディト　あなたなんぞには一番思ひ掛けも無い方面の事よ！

アラン　僕は厭な事には之れまで可なり慣らされて來ましたよ、そして之れまでだつて僕はあまり愉快な經驗は無かつたんですが……一體どんな事が起りかけてるといふんですか？

ユーディト　〔考へ深さうに〕あゝお氣の毒に！……まあ、握手をさして頂戴！

アラン　〔彼女に手を渡す〕

ユーディト　あたしを御覽なさい！……あら、あたしの顏が見られないの？

アラン　〔彼れの感情を押しかくさんが爲めに、急いで左手より退場〕

中尉　〔正面より〕御免下さい！　只今志願兵君が……

ユーディト　一寸中尉さん、あなたあたしのお友達になつてくれて？　あたしの相談相手に成つてくれて？

中尉　お嬢さんが僕にそんな名誉を與へて下さるなら……

ユーディト　えゝ！……たつた一言よ！……あのアランを見棄てないで頂戴、何か不幸な事が起る様な事が有つてもね！

中尉　どんな不幸なんですか？

ユーディト　今にわかりますわ、多分今日の中にも！……あなたアランを愛していらつしやる？

中尉　あの青年は僕の受持の中では一番善い生徒です、そして僕は個人的にもあの人の性格の強さといふ點を尊敬して居ります……實際此人生といふ物には、我慢し、忍耐し、一言にして云へば「惱む」爲めに、〔語調を强めて〕力を要求する瞬間が有るものですからね。

ユーディト　「一言」以上ね！……それで、あなたはアランを愛していらつしやる？

中尉　えゝ！

ユーディト　じやああの方を捜し出してお相手に成つて下さいな！

中尉　僕も全くさうする積りだつたんです、其他に何も目的が有つて此處へ來たわけでは無いんです！　全く其爲めに他ならなかつたんです！

ユーディト　大丈夫ですよ、あたしあなたが心配してゐる様な事なんぞちつとも思つてやしませんから、御安心なさいよ！……アランはあちらへ行きましたの！〔左手を指示す〕

中尉　〔ためらひつゝ左手へ行く〕　えゝ……捜して參ります！

ユーディト　そんなら、どうぞね！

アリーツェ　〔正面の入口より〕お前こんな所で何をしてるの？

ユーディト　あたし螺旋廻しを借りようと思つて！

アリーツェ　一寸わたしの話を聞いてくれる？

ユーディト　聞きますわ！

アリーツェ　〔ソーファに坐す〕

ユーディト　〔立てるまゝ〕　どうしても云はなければならない事だけを手短に云つて頂戴な、長つたらしい御講釋は御免よ！

アリーツェ　講釋？……ようございますー　お前、之れからは髪をちやんと結ひ上げてピンで止めるんです、そして長い着物を着るんです！

ユーディト　何故なの？

アリーツェ　お前はもう子供じやあ無いからですよ！　それにお前は、自分の年よりも若造りをして人の注意を惹かなければならない程の年でも無いんですからね！

ユーディト　まあ、どういふ事なの、それは？

アリーツェ　つまりお前はもうお嫁に行つてもいゝ年頃だといふ事ですよ！　それから、そんな風をしてると、人様に不快な感じを抱かせるといふ事ですよ！

ユーディト　じやああたしさうするわ！

アリーツェ　では解りましたね？

ユーディト　無論ですわ！

アリーツェ　じやあわたし達は意見が一致したんだね？

ユーディト　えゝ、完全に！

アリーツェ　有らゆる點に於てだね？

ユーディト　えゝ、最も微妙な點に於ても！

アリーツェ　それからお前それと一緒に止めますか――アランとあそぶ事も？

ユーディト　そんならいよ〳〵眞面目な事に成るの？

アリーツェ　さうですともさ！

ユーディト　そんなら直ぐに始めませう！　〔ハンドルを投出し、自轉車服の帶を引下げ、編髪を束髪に卷き直し、母の髪よりピンを拔取つて自分の髪をしつかと留める〕

アリーツェ　よそのお家でそんな事をする人が有るもんですか！

ユーディト　似合つて？……そんなら之れで出來上りね！　どなた樣でも來て御覽よ、だ！

アリーツェ　今度はお前少くともしとやか相には見えるよ！……そんならこれからはアランの邪魔をしないやうに氣を付けなさい！

ユーディト　お母さんは何故そんな事を云つてるのかあたし解らないわ！

アリーツェ　お前解らないの、あんなに苦んでるのが……？

ユーディト　えゝ、それはあたしも氣が付いてるのよ、けれどあたし何故だか矢張り解らないわ！あたしは苦まないんですもの！

アリーツェ　それはお前の强味といふものさ！　けれど、何時かお前だつてわかる時が來ますよ！……さあお家へいらつしやい、そして決して忘れるんじやありませんよ――自分はもう長い着物を着てるんだつて事を！

ユーディト　さうすると歩き方もこれ迄と別になるの？

アリーツェ　あゝ、やつて御らん！

ユーディト　〔貴婦人の如くに歩まんと試みる〕　まあ、足に丸太でもくつ付いてる様だわ、足が引からまつてしまつて……あたしもう走れやしないわ！

アリーツェ　さう、ユーディトや、これからはね、未だ知られない物の方への途が、のろ〳〵した往來が始まるんだよ——其れは前からちやんと分つてるんだけれど、知らない振りをしてゐなけりやならん物なの！……もつと小刻みに、もつとゆつくりと、もつと〳〵ゆつくりと！　靴だつて今度はそんな子供靴は脱いでしまつて、編上げを穿かなければならないんです！　ユーディトや！——お前子供の靴下をやめて初めて靴を穿かされた時の事を思ひ出せないだらうね、わたし思ひ出したよ！

ユーディト　そんな事あたしにはとても我慢がならないわ！

アリーツェ　そんな事を云つて……お前どうしたつて慣れなくちやならないんです、ならないんです！

ユーディト　〔母の側へ行き、一寸頬にキスする、それから貴婦人の如くに勿體振つて出て行く。然しハンドルは忘れて行く〕　左様なら！

クルト　〔右手より登場〕もうお歸りでしたか？

アリーツェ　えゝ！

クルト　あの人は歸つて來ましたか？

アリーツェ　えゝ！

クルト　どんな様子でした？

アリーツェ　正裝でしたわ！　屹度大佐の所へも行つて來たんでせう！　勳章を二つもぶら下げて居ましたからね！

クルト　二つ？　退役に成る時に劍章を貰つたつて事はわたしも聞いて居りますが、もう一つはどういふんですか？

アリーツェ　わたしにはよく解りませんけれど、何んでも赤十字に白い十字のあるんでしたわ！

クルト　じやあポルトガルの勳章だ！……はてな！……あゝさう〳〵……あの雜誌に出た論文はたしかポルトガルの港の檢疫所の事を取扱つたもんじや無かつたですか。

アリーツェ　えゝ、たしか其様に記憶して居りますわ！

クルト　そしてポルトガルに行つた事は無いんですね？

アリーツェ　えゝ一度も！

クルト　然しわたしは行つた事が有るんですよ！

アリーツェ　どうしてあなたはさう何も彼もしやべつてしまふんでせうね？　あの人は人の話をそりやあよく聽いてるんですからね、そして記憶も素晴しくいゝんですからね！

クルト　其表彰もユーディトのお蔭で貰つたんだらうとあなたお思ひになりません？

アリーツェ　まさかそんな事が有るもんですか！……境といふ物が有りますわ、物には……〔起上つて〕そしてあなたはそれを踏超えたんです！

クルト　じやあわたし達はこれから仲違ひに成らなきやならないんですか？

アリーツェ　それはあなたのお心一つですわ！　兎も角之れからわたしの利害關係には觸らないやうにして頂きませう！

クルト　でもそれがわたしの利害關係と衝突を來す場合には、だまつては居れませんよ、そりや手加減はしますけれど……あの人が來ましたね！

アリーツェ　さあいよ〳〵始まりですよ！

クルト　何が——何が始まるといふんです？

アリーツェ　今に分りますわ！

クルト　攻撃が始まつても差支へ無いです、こんな包圍狀態は徒らにわたしの神經をすりへらすばかりなんですから！　此島の中にはもう一人の味方も無し！

アリーツェ　いゝから待つてらつしやい！……さあ、こゝにおかけなさい——あの人は又其安樂椅子にかけるでせうから——そしたらわたしあなたに臺詞を付けて上げますわ！

大尉　〔正面の入口より登場。正裝に劍章とポルトガルの十字章を帶ぶ〕失敬！——此處はまるで待合室見たいなもんだな！

アリーツェ　あなたお疲れでせう！　おかけなさいまし！

大尉　〔躊躇に反して左手のソーファに腰を下す〕

アリーツェ　どうぞお樂に！

大尉　こゝで澤山だよ！——お前は全く御親切だね！

アリーツェ　〔クルトに〕氣を付けなさい、わたし達を疑つてるのよ！

大尉　〔意地惡く〕何を云つてるんだい？

アリーツェ　〔クルトに〕屹度飲んで來たのよ！

大尉　〔荒々しく〕なあに、そんな事があるもんかー

沈默。

大尉　さて……何か面白い事でも有つたかな？

アリーツェ　そしてあなたの方では？
大尉　お前おれの勲章を見てるのかい？
アリーツェ　いゝえ！
大尉　さうだらう、お前は嫉んで居るんだからな。――さうで無けりやあ表彰された人には祝ひの言葉を述べるのが當然じや無いか！
アリーツェ　そんなら――お目出度う御座います！
大尉　詰り女優なんぞが月桂樹の花輪を貰ふやうにおれ達はかういふ物を貰ふんさ！
アリーツェ　塔の家の壁にも花輪がかゝつてゐましたわね……
大尉　お前の兄さんから貰つたのがね……
アリーツェ　まあ、何を云ふんです、あなたは！
大尉　そして其奴の前におれは二十五年間も忝しく頭を下げなけりやならなかつたんだ……そして其の化けの皮を引剝ぐのに二十五年間もかゝつたんだ！
アリーツェ　あなたわたしの兄に逢つて？
大尉　あゝ何遍も！
アリーツェ　〔參つてしまふ〕

沈默。
大尉　おい、クルト！　君は何んにも云はないね！
クルト　わたしは待つてるんです！
大尉　ねえ君、君は大變な椿事を聞いたかね？
クルト　いゝえ！
大尉　こんな話を持出さなけりやならんのは、餘りいゝもんじやあ無いがね……
クルト　かまはずに云つて下さい！
大尉　ソーダ會社が潰れたんだ！
クルト　それは飛んだ事に成りましたね！――あなたはどんな關係に成つてるんですか？
大尉　おれの方は大へん好都合さ、恰度いゝ時期に手離してしまつたんでね。
クルト　それはうまくやりましたね！
大尉　ところで、君はどうなんだい？
クルト　いけません！
大尉　それは自業自得だよ！　だから君は恰度いゝ時に賣つてしまふか、それとも新株の方を引受けてくれりやあ善かつたんだ。

クルト　そんな事をしたら、其方も亦しくじつてしまつたでせう。

大尉　いや〳〵さうじや無いよ！　君がさうしてくれたら或は會社の維持も出來たかも知れないからね。

クルト　會社で無くつて、重役の維持でせう、そしてわたしは、あの新株募集といふのも實は重役の利益擁護の爲めの手段だらうと見てゐるんですが！

大尉　そんな觀察法が君を救ひ出す事にでも成るのかね？　それが當面の問題さ！

クルト　いや、かうなりやあ何も彼も投げ出さなくちやなりません！

大尉　何も彼も！

クルト　此住居も、家具も！

大尉　それはひどい！

クルト　わたしはもつとひどい目に逢つて來てゐますよ！

沈默。

大尉　大抵そんなもんだよ、素人が投機なんぞに手出しをするとね。

クルト　之れは驚いた事をおつしやる、若しあの時株主にならなかつたら、わたしはあなた方からボイコットされるところだつたじやありませんか！……海岸民の副業、海の勞働者、無盡藏の、

大海の如くに無盡藏なる資本、博愛、國益……あなた方はこんな大袈裟な文句を並べ立てゝ趣意書を書立てたんじやありませんか！……それを今になつて投機だなんて……

大尉　〔平氣で〕それで結局君はどうしようといふんだね？

クルト　競賣に附するより他に仕方がありますまいよ！

大尉　それがいゝ！

クルト　どういふ意味なんです？

大尉　今云つた通りさ！……此處には多分〔ゆつくりと〕或る變化が起るだらうからね……

クルト　此處に、此島にですか？

大尉　さうさ！……譬へばだね……君の此住居なんぞも、他のもつと簡單な所と取りかへられるだらう……

クルト　さうか！

大尉　それで、檢疫所をもつと島の外側の方に、つまり海水の近くへ持つて行かうといふ目論見も成立つんだ！

クルト　それがわたしの最初からの意見だつたんですよ！

大尉　〔ぶつきら棒に〕そんな事はおれは知らんよ……此事に關する君の意見なぞは最初からちつと

も知らなかつたんだからね……それからだね、君が家具の様な物を殘らず競賣に附して手離してしまはうといふのは至極いゝ思付きだよ、さうすると此――外聞の惡い一件もあまり目立たずに過ぎてしまふからね！

クルト　何ですつて？

大尉　外聞の惡い一件と云つてるんだ！〔起上る〕だつてまたさうじや無いか、君――やつと新しい地位にあり付いたかと思ふと餘計な仕事に手を出して、家族に憂き目を見せるなんか、あまり外聞の善い話じや無いからね……とりわけ家族を泣かせる事は！

クルト　其事に就いては全く苦しいんです！

大尉　もう一つ君に云つて置くがね――今度の事件で若しおれが君の味方に立つて居なかつたら、君はもう少しで地位を失ふところだつたんだよ。

クルト　地位までも？

大尉　一體物事を秩序的に片付けて行くといふのは、君の様な人間にはむづかしい仕事かも知れないね！――君のやり方に就いては大分非難の聲も聞える様だよ！

クルト　當然な非難なんですか？

大尉　決つてらあな！　何故つて君は――そりやあ尊重すべき性質もいろ〳〵持つては居るだらうけれど――大體に於てやりつ放しな人間だよ！――まあ話の腰を折らんでくれ給へ――さうとも君は實際ひどくやりつ放しだよ！

クルト　之れは異な事を承るものですね！

大尉　それで前に云つた、その――變化だがね、早速行はれなけりやあならん！　それで君に忠告するが、直ぐに競賣に附するか、それとも直接に買手を捜す様にしたらいゝだらうと思ふんだ。

クルト　直接にですつて？　一體こんな島で買手なんか見付かるでせうか？

大尉　おれが君の家具を引受けなけりやならんとは君も思つては居ないだらうね？　さうすると、隨分面白い事に成るんだけれど――〔斷續的に〕ふむ！　殊に……先に一度……有つた事を……考へて見るとな……

クルト　何が有つたといふんですか！――あなたは何か有りもしない事を思つてるんじや無いですか？

大尉　〔向きを換へて〕時にアリーツェはまた恐しく默り込んでしまつたね？　どうしたんだい、老嬢君！　御機嫌大分斜めだね！

アリーツェ　わたしかうしてじつと考へて居ますの……

大尉　おゝ十字架様よ、だ！　お前考へてるんだつて？　然しお前速く考へてしまはなけりや駄目

だぜ、正確に、敏捷にな、何か役に立たせようといふんなら！――さあ、考へたり！　一、二の三と！　ハ、、、！　どうだい、未だ考へが付かんかい？　そんならおれが一つ手傳つてやらう。

ユーディトは何處へ行つてるの？

アリーツェ　何處かに行つてるでせうよ！

大尉　アランは？

アリーツェ　〔默す〕

大尉　中尉は何處へ行つてるね？

アリーツェ　〔默す〕

大尉　ねえ、クルト！　君は之れからアランをどうしようと思つてるね？

クルト　どうしようとは？

大尉　うむ、之れからはあの子を砲兵隊に入れて置くわけにはもういかないだらうね？

クルト　多分いかないでせう！

大尉　もつと費用のかゝらない歩兵隊にでも入れてやらなけりやなるまいね――もつと北部の、ノルランドあたりの？

クルト　ノルランド？

大尉　うむ！　それとも何か實務を見習はせた方がいゝといふ考へなら、おれが君の立場なら、何處かの商會にでも入れるんだが！……何も店員だつて惡い事は無いだらう！

クルト　〔沈默〕

大尉　此文明の時代にな！　アリーツェはまたいつに無く默り込んでしまつたね！……ねえ、之れが卽ち人生の上下板（シーソー）といふものさ――今、上になつて得意らしく四邊を睥睨してゐると思ふ間も無く、がつたん下に落こちてしまふ――そしては又ぴよこんと跳上る――上つたり下つたり、下つたり上つたり――世の中はそれでやつて行くのさ！　さうしたものさ！　〔アリーツェに〕　お前何か云つたのかい？

アリーツェ　〔頭を振る〕

大尉　二三日中にお客が有る筈だよ、立派なお客が！

アリーツェ　どなたです？

大尉　お前興味を持つてるね！……さあ、誰が來るものかあて、御覽！　そして其間にまあ此手紙でも見て御覽、もう一遍ね！　〔封を切れる手紙を彼女に渡す〕

アリーツェ　わたしの手紙？　封を切つて？　局から返つて來たのかしら？

大尉　〔立上る〕　さうさ！　家族の首長として、はた又お前の後見人として、おれは常に家族の神

聖なる利害關係を監視して居る、而して、犯罪的なる密告に依つて家族の絆を解かんと欲する一切の陰謀を斷乎として切斷するんだ！

アリーツェ　〔參つてしまふ〕

大尉　おれは死んでは居ないぞ、お前！　然し怒つてはいけないぜ――今正におれは我々全部を、不當なる、少くともおれに就いては不當なる屈辱より引上げんと努力して居る場合だからな！

アリーツェ　あゝユーディト！　ユーディト！

大尉　そしてホロフェルネスかな？　おれがホロフェルネスに成らなきやならんといふのか？　へん！　（ユデアのベトウリエン市を包圍せる猛將ホロフェルネスが、其町のユーディトといふ女に欺かれて惨苦をかゝれし事蹟を外典に見ゆ。）〔正面の入口より退場〕

クルト　あの男は一體ありや何ですか？

アリーツェ　わたしには分らないわ！

クルト　我々はやられてしまつた！

アリーツェ　えゝ、疑も無く！

クルト　おれはもう骨までしやぶられてしまつた、でもやり口がうまいもんだから、非難の仕方も無いんだ！

アリーツェ　あゝ、ほんとにあなたは非難どころか却つてあの人のお世話に成つて居る樣な形なのね！

クルト　あの人は一體自分で自分のやつてる事が分つてるのかしら？

アリーツェ　いゝえ、自分では分つちやゐないのですわ！　あの人は只自分の本性と本能に盲從して動いてるだけなのですわ、そして今は、運命に惠まれて、いゝ氣になつてゐる最中なのです。

クルト　お客といふのは大佐がやつて來るらしいですね！

アリーツェ　多分さうらしいの！　だからアランが此處を去らなけりやならないんです！

クルト　あなたはそれでいゝと思つてるんですか？

アリーツェ　えゝ！

クルト　じやあ我々の道は二つに別れる事に成りますね？

アリーツェ　〔行かんとして〕えゝ一寸ばかりね！　でも又直き一つに逢ふ事に成りますわ！

クルト　恐らくさうでせうよ！

アリーツェ　そして、今度逢ふ所は何處か、あなた分つて？

クルト　矢張り此處です！

アリーツェ　あなたさう思つてらつしやるの？

クルト　だつて決つてるじやありませんか！　此家に移つて此家具を買ふのはあの人なんでせう？

アリーツェ　わたしもさう思ひますわ！　けれどどんな事が有つてもわたしを見棄てないで頂戴！

クルト　勿論ですとも！

アリーツェ　左様なら！〔行く〕

クルト　左様なら！

第三幕

同一舞臺裝置。然し外面は曇りて雨降れり。アリーツェとクルト、雨外套に包まれ、傘を手にして正面より登場。

アリーツェ　あゝやうやくこゝまで連れて來たわ！……でもクルト、あなたのもとのお家で、「よくいらつしやいました」なんて云へる程わたし思ひやりの無い女じや無い積りよ！

クルト　なあに、そんな御遠慮には及びませんよ！　わたしは三遍も差押へを食つた經驗の有る程の人間ですからね……之れからだつて又有るかも知れませんが……だからそんな事は何んでも無いんですよ！

アリーツェ　あの人があなたを呼んだのですか？

クルト　形式張つたお召出しでした、然しどういふ理由からなのかわたしには解りません！

アリーツェ　あの人何もあなたの上役といふわけじや無いんでせう？

クルト　えゝ！　でもあの人はすつかり此島の王様氣取りで居るんです！　そして誰でも反抗する者が有ると、直ぐに例の大佐の名前を持出すんです、それでみんな恐れ入つてしまふといふわけな

んです！――何だ相ですね、今日はいよ〳〵其大佐がやつて來るんだつて話じやありませんか？

アリーツェ　其筈になつて居ますがね――確な事はわからないんです！――まあ、おかけなさいな！

クルト　〔坐す〕何も彼ももとのまゝですね！

アリーツェ　そんな事はなるべく考へないことにしませうよ！――痛手はそつとして觸らないで置くものよ！

クルト　痛手？　わたしは只變なものだと思つてるだけですよ！　恰度あの人と同じ様に變なものだとね！――一體若い折に初めてあの人と知合になつた時は、わたしはあの人から逃げたものなんです……然しあの人はあとから追かけて來ては、うるさく追從を云つたり、どうぞ何かやらして下さいと云つて附纏つたりするんです、そしてわたしを身動きも出來ん様にしてしまふんです……わたしは何遍逃げ出さうとしたか知れないんですけれど、そんなわけで駄目だつたんです……今ではもう此通りすつかりあの人の奴隷です！

アリーツェ　ほんとうに、一體何故なんでせう？　あの人の方があなたに負債が有る筈なのに、あなたが却つて債務者だなんて！

クルト　わたしの破產後の事ですが、あの人はアランを試驗で救つてやらうなんて云出して來ましたよ……

アリーツェ　そんな事をしたら、あとで屹度ひどい目にお逢ひに成りますよ！……あなた議員の候補者には未だ成つていらつしやるのですか？

クルト　えゝ、わたしの見る限りに於ては、何の障害も起つてゐない様です！

沈默。

アリーツェ　アランはほんとうに今日立つんですの？

クルト　えゝ、わたしが止める事が出來ないとすればね！

アリーツェ　ほんの束の間の喜びでしたわね！

クルト　束の間の！――人生以外の有らゆる物と恰度同じ様にね――人生といふ奴だけは恐しく長い物なんだけど！

アリーツェ　ほんとうにさうですわ！……次の間へ行つて一寸お待ちになりませんか？　あなたが苦しく無くつても、わたし苦しくつて仕樣が無いんです――此部屋に居ると色々の事を思ひ出させられるんで！

クルト　其方がいゝとおつしやるなら！

アリーツェ　わたしほんとに恥かしいんです、穴が有つたら入りたい程に恥かしいんです――でも

わたしの力ではどうにも成りませんわ！

クルト　じやああちらへ行く事にしませう、あなたのお望み通りにね！

アリーツェ　それに誰か人が來る樣ですわ！　〔兩人左手の室へ入る〕

大尉とアラン、軍服にマントを纏ひて正面より登場。

大尉　そこへかけ給へ、君、少し話が有るんだから！　〔安樂椅子にかける〕

アラン　〔左手の椅子にかける〕

大尉　今日は雨だ、さうで無いと、此處にかうして居ながら海がすつかり眺められるんだが。

沈默。

大尉　さて？——君は行きたくは無いだらうね、どうだね？

アラン　お父さんを殘して行くのはいやです！

大尉　うむ——お父さんか！　どうも不仕合せな人だよ！

沈默。

大尉　そして兩親といふ物は必ずしも子供達の最善なる物を解してゐる者では無いからね！——つまり——いや、無論例外は有るには有るがね、ふむ！……ねえ、アラン！　君はお母さんと文

通してるかね？

アラン　えゝ、時々手紙を貰ひます！

大尉　お母さんが君の後見人に成つてるつて事は承知してるだらうね？

アラン　えゝ知つて居ます！

大尉　ねえ、アラン！　お母さんは此おれに全權を與へたんだよ、此おれがお母さんの代りになつて君の事は萬事處置を付けるやうにね！

アラン　それは存じませんでした！

大尉　少くとも今に成つて分つたわけだね！　そして此根據から君の將來の方針に就いての議論も決定したといふわけなんだ！——そこで君はノルランドへ行く事に成つたのさ。

アラン　でも僕には金が有りません。

大尉　それはおれが拵へたよ！

アラン　此際僕は小父さんにお禮を申上げるだけです！

大尉　君は恩知らずじや無いよ、君は——然し世間には君の樣な心掛けの人間は至つて少いものだよ！　ふむ！……〔聲を高めて〕大佐が……君は大佐を知つてるかい？

アラン　〔困つたやうに〕いゝえ、僕は存じません。

大尉　大佐は〔語氣を强めて〕おれの特別の親友なんだ——〔急ぎ言葉を足して〕君も——多分——知つての——通りにね！　ふむ！　それで大佐はおれの家族——おれの家内の身内も引くるめてなんだが——の爲めにいろ〳〵心配してくれられるんだ。其大佐の斡旋で君の課程を卒へる迄に必要な學資の調達も出來たといふわけなんだ！——そんな次第だから、おれが義理の有る事も、君のお父さんが義理の有る事も——大佐に對してだよ——君はよく分つた筈だ！……どうだい、此位云つて聞かしたら、大概呑込めただらうと思ふが！

アラン　〔身を屈める〕

大尉　じやあ之れから行つて荷造りをし給へ！　金は棧橋で渡す事にするから！　では、左樣なら！　〔指を一本出す〕左樣なら！　〔身を起して再び右手へ行く〕

アラン　〔室内を見廻しながら、悲しげに一人殘る〕

ユーディト　〔正面より入る、頭巾付外套、雨がさ、裾長き上衣、結ひ上げられたる髮、精選せる着付け〕まあ、アランじや無くつて？

アラン　〔振返り、ユーディトをじろ〳〵眺める〕之れがユーディトなのかしら？

ユーディト　あなたもうあたしが分らなく成つたの？　それはさうと、あなたは何處にいらしつたのよ、こんなに長く？……何を見てるの？——あたしの長い着物……それからあたしの髮……あなた初めて見るのね！

アラン　えゝ！

ユーディト　あたし奥さんの樣に見えて？

アラン　〔彼女より顔を反ける〕

ユーディト　〔眞面目に〕あなた、こんな所で何をしていらつしやるの？

アラン　僕お別れに上つたんです！

ユーディト　何ですつて？——あなたは——行かなくつちやならないの？

アラン　ノルランドの方へ轉任に成つたんです！

ユーディト　〔びつくりして〕まあ、ノルランドへ？——何時お立ちになるの？

アラン　今日です！

ユーディト　誰がそんな事を思ひ付いたの？

アラン　あなたのお父さんです！

ユーディト　思ひあたらない事も有りませんわ！　〔室内を歩き廻つて、床を踏み付ける〕　せめて今日だけでも居て下さるといゝんだけれど！

アラン　大佐にお目にかゝる爲めにですか？

ユーディト　大佐の事何か知つてらつしやるの？……どうしてもあなた、立たなくちやならないの？

アラン　だつて他に仕方も無いじやありませんか！　そして今となつては僕自身それを望んで居るんです。

沈默。

ユーディト　何故そんな事を望んでるの？

アラン　僕はどうなつてもかまはないから只此處から離れてしまひたいんです――そして廣い世の中へ出て見たいんです！

ユーディト　此島つたらほんとに狹っ苦しいのね！　あたしあなたの心持がようく解りますわ、アラン、此處はほんとに堪らないわ！――此處ではみんなが投機を張つてるのね――ソーダや、人間を種にして！

沈默。

ユーディト　〔爲ならぬ感動を以て〕アラン、あたしはね、あなたも知つての通りこんなのんきな性分で、悲しいとか辛いとかいふ事は今迄ちつとも知らなかつたの――けれど――今に成つてやうやく其心持が餘程解りかけて來たのよ！

アラン　あなたが？

ユーディト　えゝ！――今こそあたし解つて來たわ！〔兩手を胸に押しあてゝ〕あゝ――あたしどんなに悲しいか！　あゝ！……

アラン　どうしたんです？

ユーディト　分らないわ！――あたし何だか息が窒り相よ！　あたし屹度死んでしまふわ！

アラン　ユーディト！

ユーディト　〔叫ぶ〕あゝ！……さうなんだわ！　さうなんだわ……あはれな若者達は！

アラン　僕があなたの樣な殘酷な人間だつたら、只薄笑ひをして見てゐたでせうよ！

ユーディト　あたし決して殘酷な女じや無いのよ、でもあたし先にはもつとよく解らなかつたの！……あなた行つてしまつちやいやよ！

アラン　でも行かなくちやならないんです！

ユーディト　じやあおいでなさい！……でも何か記念の品を殘して行つて下さいな！

アラン　何を上げたらいゝでせうね？

ユーディト　〔最も深き苦悶を以て〕あなた！……あたしとても堪らないわ、もうとても！　〔號泣して

胸のあたりを摑む〕　あたし苦しい……苦しい……あなた、あたしをどうしたのよう？……あたしもう生きてなんぞ居たく無いわ！――アラン、行つちやいや、一人で行つてしまつちやいや！　行くなら二人一緒に行きませうよ、そしてあたし達は小さな舟に乘つて出かけるのよ、小さな、白い舟にね――それからいよ〳〵乘り出すのよ、帆綱をしつかと張り詰めてね――風も恰度い〻工合よ――それから方々を漕ぎ廻つて――沖の方へ、遙か向うの沖の方へ――海月（くらげ）や八重葎などが泳いでゐない大洋の方へ――え、何？　云つて御らん！――けれどこんな事なら、昨日帆を洗つて置くと善かつたわ――雪の樣に眞白で無くちや駄目だわね――あたし其瞬間には何かかう眞白い物を見たいのよ――それからあなたあたしを腕に抱へ込んで、あたしと一緒に泳ぐのよ、疲れ切つてしまふ迄――それから、一緒に沈むのよ――〔向きを換へて〕……それがい〻わ！　どの位い〻か知れやしないわ――こんな所でぐづ〳〵泣面をしながらぼつつき廻つて、手紙で色々の惡企みをしたり、其れを又お父さんに見破られて怒鳴られたり……そんな氣の利かない眞似ばかりしてるよりはね！　ねえ、アラン！　〔兩腕を取つて彼れを搖りつゝ〕あなた聞いてるの？

アラン　〔輝く目を以て彼女の姿を見まもりつゝ〕なぜもつと早くさう云つてはくれなかつたの？

ユーディト　だつてあたし自分でも未だようく分らなかつたんですもの、分らない事は云へないじやありませんか！

アラン　あなたの本心が漸く分つたのに、僕はあなたを棄てゝ遠くへ行かなければならない！……でも、矢張り其れが一番い〻んだ、其他に仕方は無いんだ！……僕は他の男と競爭する事なんぞとても出來やしませんからね……そんな……

ユーディト　大佐の話はどうぞしないで頂戴よ！

アラン　じやああの話はほんとうの事じや無いの？

ユーディト　それはほんとうよ――そして――ほんとうで無いのよ！

アラン　じやあほんとうで無くしてしまふ事も出來るんですね？

ユーディト　え〻、屹度さうして見せますわ、一時間中に！

アラン　どうぞ約束を忘れないで下さいよ！　僕はいくらでも待つて居ますから、いくらでも辛抱しますから、いくらでも勉强しますから！……ユーディト？

ユーディト　未だ行くんじや無くつてよ！――あたしどの位待てばい〻の？

アラン　一年！

ユーディト　〔歎呼して〕一年？　あたし千年でも待つわ、そして、それでもあなたが來なかつたら、あたし大空を引くり返して太陽が西から出る樣にしてやるわ……シッ、誰か來るやうだわ！――アラン、もういよ〳〵お別れね……默つて！――あたしを抱いて頂戴！　〔互に抱擁する〕――で

もキスはいけなくつてよー〔頭を側に反らす〕さう、もういらつしやいよー——もういらつしやいよー

アラン　〔正面奥へ行きてマントを羽織る。と兩人互の腕の中へ身を投じて、ユーディトの姿はマントにかくされる。一瞬間キスを交す。アラン急いで出て行く。ユーディトはソーファに身を投げ伏して、すゝり泣く。アラン又入り來りて、ソーファの前に跪く〕駄目だ、僕は行けやしない！　僕はもうあなたと別れて行く事は出來ないんです、もう出來ないんです！

ユーディト　〔身を起して〕まあ、今のあなたの美しくつていらつしやる事！——御自分で見られるものなら見せて上げたい位だわ！

アラン　止して下さいよ！　男が美しいなんて事が有るもんですか！　けれどあなたは、ユーディト！　あなたは——あの——僕氣が付いたんだけれど、あなたがそんなに柔しくしてくれると、まるで別なユーディトが現れて來るんですね……其ユーディトこそ僕の物なんだ！……けれどあなたに棄てられたら、僕は死んでしまひますよ！

ユーディト　あたしだつて屹度死ぬわ！……あゝ、今此處で、こんな幸福の絶頂で死ねるものならねえ！……

アラン　誰か來る樣ですよ！

ユーディト　誰が來たつてかまひはしなくつてよー　あたしもう世界中に怖いなんて思ふ物は何んにも無くつてよ！　けれど、一寸あなたのマントの中へ入れて頂戴な、〔そマントの中へ身をかくす樣にする〕かうしてあたしと一緒にノルランドへ飛んで行つて下さるといゝんだけれどー　ノルランドへ行つて何をしませうね？　獵騎兵に成る……あの帽子に羽毛をさした……あれは一寸意氣だわね、そして屹度あなたに似合つてよ……〔彼れの髮の毛をいぢる〕

アラン　〔彼女の指尖を一本づゝ順々にキスして——それから彼女の靴にキスする〕

ユーディト　何をするの、お馬鹿さん！　口のまはりが眞黑に成つてしまふじやありませんかー〔俄に突立上つて〕……あなたが行つてしまへば、もうキスも出來ないのね！……さあ、あたし一緒に行きますわー

アラン　いけませんよ、そんな事をしたら僕牢屋へ打込まれてしまひますよ！

ユーディト　あなたとならば牢屋へでも何處へでもついて行くわー

アラン　そんな事が出來るもんですか！……さあ、もうお別れしなければなりません！

ユーディト　あたしあなたが乘つて行く汽船のあとから泳いで追かけて行くわ……さうするとあなた海の中へ飛込んであたしを救ひ上げてくれるでせう、すると新聞に出るわね、それで二人は結婚する事に成るのよー　ねえ、さういふ事にしませうか？

アラン　未だあなたはそんな無駄口がきけるんですか、あなたは？

ユーディト　泣くのは何時だつて出來ますわよ！……さあ、左様ならをしませう！

二人互に飛付く。アラン、開けたるまゝなる正面のドアより後ずさりする。兩人雨に打たれつゝ抱擁する。

アラン　雨がかゝりますよ、ユーディト！

ユーディト　雨なんかどうだつていゝわ！

と、兩人サツと離れて、アランひとり行く。ユーディト、雨と風に髪や衣服を靡らせながら、ハンケチを打ち振りつゝ立つて居る。やがて、室内に駈け入り、ソーファに身を投げ伏し、兩手に顏を覆ふ。

アリーツェ　〔入り來つて、つか〳〵とユーディトの側へ〕どうしたの？……何處か惡いの？——立つて顏をお見せなさい！

ユーディト　〔起上る〕

アリーツェ　〔じろ〳〵見詰めてから〕何處も惡くは無いんだね！……でもわたしお前にかまつては居られません！〔右手より退場〕

中尉　〔正面に現れる〕

ユーディト　〔立上り、頭巾附外套を羽織る〕あなたどうぞ電話局まであたしと一緒に行つて頂戴な、どうぞ中尉さん！

中尉　お役に立つ事ならば喜んで……でもいさゝかおだやかでない樣にも思へるんですが。

ユーディト　却つて善いじやありませんか！　あなたはあたしも仲間へ入れなけりやいけませんわ、あたしさう思つてるのよ——けれどつまらないイリュージョンなんか抜きにしてね！……あなた先になつて頂戴よ！

兩人正面のドアより退場。

大尉とアリーツェ　〔右手より。大尉は平生の軍服を着てゐる〕

大尉　〔安樂椅子に腰を下す〕此方へ入れるがいゝ！

アリーツェ　〔左手へ行きてドアを開き、それからソーファに腰かける〕

クルト　〔左手より〕わたしに何かお話が有るんだ相ですね！

大尉　〔親しげに、といふよりはやゝ卑下して〕さう、少し重要な事件に就いてお話しせにやならん事

が有るので！――まあかけ給へ！

クルト　〔左手の椅子にかける〕さあ承りませう！

大尉　そんなら！……〔演說口調になつて〕御承知の如く、我が檢疫制度の廢頽に瀕して以來、將に一世紀になんとする……ふむ！

アリーツェ　〔クルトに〕國會議員候補者の演說だわ！

大尉　……然し乍ら現代に於ける未曾有の發達に際しては……

アリーツェ　〔クルトに〕無論、交通の發達の事を云つてるのよ！

大尉　……その有らゆる方面に於ける發達に省みて、政府は一の擴張を企圖するに至つたのである。其目的の爲めに衞生局は監察官を任命し……而して……

アリーツェ　〔クルトに〕まるで口述をやつてるやうね！

大尉　……最初に云ふも最後に云ふも結局同じ事だが……我輩が其檢疫監察官に任命せらるゝに至つたのである！――

沈默。

クトル　それはどうもお目出度い事です、以後何分よろしくお願ひ致します。

大尉　我々の個人的關係は親戚關係が成立して居る以上從來と變る事は無い！――ところで、別の話に成るが――御子息のアランは我輩の希望に依つてノルランドの步兵聯隊へ轉任する事に成つた！

クルト　然しそれはわたしが欲しません！

大尉　君の意志は此場合に於ては母親の希望に從はなければならん……そして此おれが母親に萬事を委任せられて居る爲に、只今云つた樣な事に決定しただけなんだ！

クルト　わたしはあなたに感服します！

大尉　現在の息子から別れなければならぬ此瞬間に君が感ずる所はそれだけなんだね？　君は何等純人間的なる感情を持たないんだね？

クルト　わたしは此際大いに悲まなければならない筈だとおつしやるんですか？

大尉　さうだ！

クルト　わたしが悲んだら、あなたは喜ぶでせう、あなたはわたしの悲む事を希望していらつしやるんですか？

大尉　君はそんなら悲む事も出來るのかい、君の樣な男が？……何時かおれが病氣に成つて倒れた事が有つたね――君も側に居たんだが……そしておれの思ひ出し得る限りに於ては、君の顏は佯りならぬ喜びの色を現して居たんだ！

アリーツェ　それは大違ひですわ！　クルトは夜つぴてベッドの側に附きつ切りで、あなたが良心の苛責で苦み出すと、一生懸命にあなたの心を靜めてくれたんじやありませんか……それなのにあなたはよく成つてしまふと、恩も何も忘れてしまつて……

大尉　〔アリーツェの云ふ事には耳も貸さずに〕だからアランは立つ事に成つたよ！

クルト　費用は誰が出すんです？

大尉　それはもうおれがいゝ工合にして置いたよ、つまり此有望なる青年の前途の爲めにいろ〳〵心配してゐる人々が一の組合を作つて……

クルト　組合！

大尉　さうさ！――それで萬事おれは正當に取計らつたんだつて事を知らせる爲めに、此名簿を見せてもいゝよ！〔書付を彼れに渡す〕

クルト　名簿？〔書付を見る〕之れは奉加帳じやありませんか？

大尉　何とでも云ふがいゝさ！

クルト　あなたはそんなら伜の爲めに袖乞までもしてくれたんですか？

大尉　君は又そんな恩知らずを云つてるね！――實際恩知らずといふ奴は此世界が背負つてゐる一番厄介なお荷物だよ！

クルト　そんならおれはもう社會的に葬られてしまつた！……そして立候補だつてもう駄目に成つてしまつた！

大尉　何の候補だね？

クルト　國會議員のです！

大尉　君はまさかそんな馬鹿な事は考へやせんだらうな！……殊に、おれは此島の先輩として常に自分の價値を一般に認めさせようと心がけて居るつて事は、君だつて想像するに難くは無い筈なんだから、尙更の事だよ――尤も君はおれの人物を見くびつて居る樣だけれど！

クルト　うむ！　之れも駄目に成つてしまつたのか、之れも！

大尉　君は無から何か有を捻り出さうとでもしてるらしいね！

クルト　何も彼も殘らずあなたが理不盡に横取りしてしまつたんじやありませんか！　此上に未だ何か引たくらうといふんですか？

大尉　君は人に取られる樣な物を未だ何か持つてるかね？　そして君は何かおれを非難する口實が有るのかい？　おれに對して何か不足がましい事を云へた義理かどうか、よくく考へて見給へよ！

沈默。

クルト　嚴密に云へば、毫も非難すべき點は無いんです！　一切がすべて、正直な市民相互の間に日常行はれてる樣に、正確に、適法に行はれた事なんですから！

大尉　君はあきらめでそんな事を云つてるんだね――おれは其諦めを犬儒的と云つてやりたいよ。だがシニカルなのはそれだけじや無いよ、君の性格は何處から何處までみんなさういふ風に出來上つてるんだ、そしておれも時々君に關するアリーツェの意見に同じたく成る事が有るよ――アリーツェの意見に依ると、君は僞善家だ相だ、然も第一流の僞善家なんだ相だ！

クルト　〔しづかに〕それがアリーツェの意見なんですか？

アリーツェ　〔クルトに〕何時かはさうだつた事も有つたんですの！　けれど今ではもうさうじやありませんの、あなたが之れまでよく堪へて來た程の物を堪へ得るには、それこそ立派な英雄的の勇氣と――其他の何かが必要でせうからね！

大尉　もう議論は此邊で終結だらうね。さあクルト、アランに暇乞でも云つて來給へ、此次の船で立つんだから！

クルト　〔立上る〕もう立つんですつて？……よし！　おれはもつとひどい目に出逢つた事の有る人間なんだ！

大尉　うむ、君は其言葉を實によく使ふね、それでおれは訊きたく成つたよ――君は全體アメリカでどんな目に出逢つて來たのか？

クルト　どんな目に出逢つたといふんですか？　無論不幸な目に逢つて來ましたよ。そして不幸に見舞はれるといふ事は、有らゆる人間の拒むべからざる權利なんです。

大尉　〔鋭く〕尤も中には自業自得と云つた樣な不幸も有るね――君のもそれだつたのかい？

クルト　それは良心の問題でせう！

大尉　〔言葉短かに〕ほゝう、君に良心が有るのかい、君に？

クルト　世の中には狼も有り、羊も有ります、羊に成るといふ事は決して人間として名譽な事ではありません！　然しそれでもわたしは、狼たらんよりもむしろ羊たらんことを欲するんです！

大尉　人は各々その運命の鍛匠なりといふ古い格言を君は知つてるかね？

クルト　それは眞理なんですか？

大尉　君は知らないんだよ、人間の自力が……

クルト　其事ならわたしがよく承知して居ますよ、あなたの所謂「自力」があなたを去つて、床の上にお倒れになつたあの晩以來？

大尉　〔聲を高めて〕我輩の如き當然それに値する人間は――さう、此おれを見給へ――おれは五十年間も戰ひ通して來たんだ――世界を相手にな――然しおれは遂に終局の勝利をかち得てしまつ

た、堅忍不拔の精神と己れの義務に對する忠實と、精力と而して――正直とに依つて！

アリーツェ　それはあなた、人様に云つて貰ふ言葉ですわ、自分で云つてしまつちやあ有難くも何とも無いわ！

大尉　いや他の奴等なんかそんな事は決して云やしないよ、何しろ奴等はみんな人の成功を羨んで居やがるからな！　それはさうと――今日はお客様が見える筈だよ！　娘は、ユーディトは、今日未來の旦那様にお目通りする筈なんだが……ユーディトは何處へ行つてるんだい？

アリーツェ　外ですわ！

大尉　雨が降つてるのに？……呼びにやれよ！

クルト　わたしはもうおいとましてもいゝんでせうか？

大尉　いや、待つてくれ給へ！……おい、ユーディトはもう身支度は出來て居るのかい――しとやかな貴婦人らしく？

アリーツェ　えゝ、そりやもう！……ですがあなた、大佐が來るつていふのは、確な返事が有つての事なんですか？

大尉　〔起上る〕うむ、それはね、不意にやつて來てみんなをびつくりさせようといふあの方の肚なんだ！……おれは今にも電報が來やしないかと思つて待つて居るんだ！　〔右手へ行きて〕直ぐに歸つて來るよ！

アリーツェ　とう〳〵あの人は自分の正體を殘らずさらけ出してしまひましたわね！　あれでも人間と云へるでせうか？

クルト　最初あなたにさう訊ねられた時に、わたしは、人間では無いと答へましたね！　然し今ではわたしは、あの人は世界中の人間の中で最も平凡な人間であると思ふやうに成りましたよ……どんな人間だつて多少あゝいふ傾向を持つて居るんじや無いですか――人間や好機會をつかまへてずるく利用したりする樣な！

アリーツェ　あの人はあなたやあなたの家族をなまのまゝ骨までしやぶつたんですよ……それなのにあなたは、あの人を辯護するおつもりなの？

クルト　わたしはもつとひどい目に逢つて來た人間です、あの人喰ひも流石にわたしの魂だけには手も付けて居ませんからね――之れだけはいくらあの男でも嚙り付くわけに行かなかつたんですね！

アリーツェ　「もつとひどい事、もつとひどい事」つて、一體あなたどんな事にお逢ひなすつたの？

クルト　あなたがそれを訊くんですか？

アリーツェ　あなたぶしつけな事を云ふつもりなの？

クルト　いゝえ、わたしそんな積りは決して無いんです、ですから……もう決して訊ねないで下さいー

大尉　〔右手より〕もう電報が來て居ようよー——どうか讀んでくれ、アリーツェ、おれは善く見えんから！……〔得意げに安樂椅子に腰を下す〕……讀んで御覽！——クルト、君は行かなくつてもいいよー

アリーツェ　〔先づ素早く、無言にて讀み、吃驚せし面持〕

大尉　どうだい！　お氣に入らない文句かね？

アリーツェ　〔無言にて大尉を見詰める〕

大尉　〔わざと皮肉に〕誰から來たんだね？

アリーツェ　あの大佐からー

大尉　〔滿足げに〕おれもさうだらうと思つた！……で、何と云つて來たね？

アリーツェ　かう書いてありますわ——『ユーディト孃の無禮至極なる電話の通告に依り、余は彼の關係を斷絶せるものと認む——永遠に！』〔大尉の顏をじつと見詰める〕

大尉　もう一遍、どうぞー

アリーツェ　〔早口にて〕『ユーディト孃の無禮至極なる電話の通告に依り、余は彼の關係を斷絶せるものと認む——永遠に！』

大尉　〔蒼白と成り〕ユーディトだ！

アリーツェ　そしてホロフェルネスも居ますわね！

大尉　じやあお前は何だい？

アリーツェ　今に分りますわー

大尉　貴樣やつたんだなー

アリーツェ　いゝえー

大尉　〔激怒して〕貴樣がやつたんだー

アリーツェ　いゝえー

大尉　〔立上りてサーベルを引拔かんとするや、卒中の發作起りて倒れる〕

アリーツェ　さうら、今度こそは天罰だわ！

大尉　〔老の涙聲にて〕おれを惡く思はんでくれー　おれは病氣なんだからー

アリーツェ　病氣ですつて？　さう聞いて、わたしほんとに有難いわー

クルト　ベッドに運びませう！

アリーツェ　いゝえ、わたしこんな人に觸りたくもありませんわ！　〔呼鈴を鳴らす〕

大尉　〔前の如く〕お前達おれの事を惡く思はないでくれ！　〔クルトに〕子供達の事を頼むよ！

クルト　崇高な事だ！　おれが此人の子供の面倒を見てやらなければならないとは――此人に自分の子供を盜まれてしまつた此おれが！

アリーツェ　よくもそんな事を云つて自分で自分を欺いて居られるものですね、あなたは！

大尉　子供達の事を頼む！　〔不明瞭なる言語をブル、ブル、ブルと云續ける〕

アリーツェ　とう〳〵此舌の根が止つてしまつたね！――もう法螺も吹けないんだ、嘘も吐けないんだ、毒付く事も出來ないんだ！――クルト、あなたはたしか神樣を信じて居たわね！　どうぞわたしの代りに其神樣にお禮を云つて頂戴！　おかげ樣でわたしもやつと自由な身體に成れましたつて！　あの牢屋の塔から、此狼から、此吸血鬼（ワンピール）からやう〳〵救ひ出されましたつて！

クルト　そんなに云ふもんじやありませんよ！　アリーツェ！

アリーツェ　〔大尉の顏に近寄つて〕さあ、お前さんの「自力」とかは何處へ行つて了つたのさ？　え？　お前さんの「精力」とかは？

大尉　〔最早言葉を發する力も無く、彼女の顏に唾を吐きかける〕

アリーツェ　未だ毒氣を吐くね、蝮奴、そんな事をすると舌を引つこ抜いてやるぞ！　〔大尉の頰のあたりを一つ喰はせる〕　頭は無く成つても未だ赤く成るんだね！……おゝ、ユーディト、まるで復讐其物の樣にわたしの胎内に十月の間抱いて居た天晴れな娘！　お前が、お前がわたし達みんなを救ひ出してくれたんだ！　ヒドラ奴（レルナ沼に住むといふ、ギリシヤ神話中の多頭の怪物。一頭を斷てば新たに二頭を生ずるといふ故拂ひ除けんとする程却つて勢を增す如き邪惡に譬へらる。）、いくら頭が澤山有つたつて、一つ殘らずちよん切つてやるぞ！　〔大尉の髮を引張る〕……ねえ、矢張り正義といふ物は此世に有るんだわねえ！　之れまでわたしもぼんやりとそんな物を思つては居たけれど、はつきり信じた事は未だ一度も無かつたんだわ！　クルト、どうか神樣にお宥しを願つて頂戴、わたし今まで見損なつて居たんだから！　あゝ矢張り正義は有ります！　それでこそわたしの樣な女でも初めて羊に成れるといふものです！　神樣にさう云つて頂戴、クルト！　少しでも幸福が與へられさへすれば、わたし達だつてもつと善い人間に成れるんです、不幸ばつかりだと、みんな狼に成つてしまふんです！

中尉　〔正面奥より〕

アリーツェ　大尉が卒中で倒れたんですの、どうぞ手傳つて椅子を向うへ運んで下さいな！

中尉　奥さん！……

アリーツェ　何ですか？

中尉　あの、ユーディト嬢が……

アリーツェ　先づ手傳の方からやつて貰ひませう！　其あとでユーディト嬢の事をいくらでもおつしやいよ！

中尉　〔椅子を右手の方へ押して行く〕

アリーツェ　小汚い死骸なんかとつとあつちへ投り出してしまへ！　出してしまつたら、戸を開けるんだわ！　風を通さなけりや駄目よ！　〔正面のドアを押開く、外は晴れ模様〕

クルト　あなたはあの人を打つちやつて置く積りなんですか？

アリーツェ　難破してしまつた船なんぞは打つちやつて、乗組員だけが助かればいゝのよ！……わたしあんな腐つた動物の爲めに湯灌女に成る必要はありません！　あの人の世話は掃除屋と解剖室の小使がやれば澤山よ！　こんな小汚い肥料を盛つた手押車を打ちまけるには花壇だつてあんまり綺麗過ぎる位だわ！……さあ、わたし之れから此汚いけがれをすつかり洗ひ落して來なくつちや――いくら洗つたつてもと通りには成れないかも知れないけれど、若し綺麗になれるもんなら！

ユーディト外の欄干のところに現れ、顔りに海に向つてハンケチを打振る。

クルト　〔其方へ出で行きて〕誰かしら？　ユーディトだ！　〔呼ぶ〕　ユーディト！

ユーディト　〔入り來り、叫ぶ〕　行つちまつたわ！

クルト　誰が？

ユーディト　アランが行つちまつたのよ！

クルト　別れの挨拶もせずに？

ユーディト　わたし達はお別れをしたのよ、あなたによろしくつて云ひましたわ、小父さん！

アリーツェ　さうだつたのか？

ユーディト　〔クルトの腕の中に身を投げて〕あゝ、行つちまつたわ！

クルト　又歸つて來ますよ、ね、いゝ子だ！

アリーツェ　わたし達も追かけて行つてもいゝわね！

クルト　〔右手のドアの方を指して〕あの人を棄てゝ？――世間が……

アリーツェ　世間？　そんな物が何です！……ユーディト、さあお母さんを抱いて！

ユーディト　〔アリーツェの側に寄る、アリーツェ嬢の額にキスする〕

アリーツェ　お前追かけて行く氣かえ？

ユーディト　そんな事訊ねるまでもありませんわ！

アリーツェ　お父さんが病氣なんだよ！

ユーディト　病氣だつていゝじやありませんか！

アリーツェ　それでこそユーディトだわ！――あゝわたしほんとにお前が可愛い、ユーディトや！

ユーディト　けれどお父さんは詰らない事にこせ〳〵しちやゐないわ……そしてめそ〳〵する事が大嫌ひなんですもの……何の彼のと云つても、お父さんはお父さんで、他人に眞似の出來ない所が有つてよ！

アリーツェ　さう云つて見ればまあそんな物さね！

ユーディト　そして、あんな電話をかけてからは、お父さんだつてあたしの事をあんまり善くは思つていらつしやらないわ！……ほんとうに、何故お父さんはあんな白髪頭なんぞあたしに押付けようとなすつたんだらう！　あたしどうしてもいやよ、アラン、アラン！〔クルトの腕に身を投じ〕あたしアランの所へ行きたいわ！〔身を振離して、ハンケチを打振る〕

クルト　〔彼女に隨ひて外に出で、同じくハンケチを打振る爲めに外へ急ぎ出づ〕

アリーツェ　花は稟芥の中から咲くつて云ふけれど……

中尉　〔右手より〕

アリーツェ　どう？

中尉　そゝー　あのユーディト嬢が……

アリーツェ　まあ、あなたそれ程あの子の名前を口に上せて見たいんですか――死にかゝつて居る人の事も忘れてしまつてさ！

中尉　えゝ、でもあの方のおつしやるには……

アリーツェ　あの方ですつて？　それよりもユーディトと云つて頂戴よ！――でも、そんな事よりかも、あちらはどうなんです？

中尉　えゝあちらは！……もう息をお引取りになりました！

アリーツェ　もう？……あゝ神様、あなたが我々をあの惡魔から救ひ出して下さいました事を、私自身の名に於て、及び人類の名に於て感謝致します！……一寸あなたの腕を貸して頂戴よ！　わたし外に出て、息を吹返したいの！――胸一杯自由に息を吸つて見たいの！

中尉　〔彼女に腕を差出す〕

アリーツェ　〔身を引いて〕あの人臨終に何か云ひましたか？

中尉　ユーディト嬢の父上は少しの言葉を云ひ殘されました！

アリーツェ　どんな事を云つて死んだの？

中尉　かうおつしやいました――『彼等を宥せよ、何となれば、彼等は自らの爲すところを知らざるなり。』（路加傳二三―三四、十字架上のキリストが最後の言葉。）

アリーツェ　解らないわ！

中尉　えゝ、ユーディト嬢の父上は善良な、氣高いお方でありました。

アリーツェ　クルト！

クルト　〔入り來る〕

アリーツェ　息を引取りましたつて！

クルト　おゝ！

アリーツェ　あなたあの人の最後の言葉の意味が解つて？　いゝえ、解りませんわね！『彼等を宥せよ、何となれば、彼等は自らの爲すところを知らざるなり！』

クルト　あなたはさう云つて死んで行つたあの人の眞意がお解りになりますか？

アリーツェ　あの人の積りでは屹度、自分は一生涯正しく行動して、今人生といふ物に欺かれた人間として死ぬ、といふ事なんだらうと思ひますの！

クルト　追悼の演説は屹度素晴しいものでせうね！

アリーツェ　それから花輪が澤山來るでせうよ！　例の下士達からね！

クルト　さうでせう！

アリーツェ　一年ばかり前にあの人はこんな意味の事を云つた事が有りましたわ――人生といふ物は、まるで我々みんなが何か馬鹿げた惡戯をされてるやうなもんだつて！

クルト　するとつまり、あの人は死ぬまで我々に惡戯をしてゐたといふ意味なんですか？

アリーツェ　さうでも無いんですけれど！……けれど變なものですね、あの人もとう〳〵往生してしまつた今と成つて見ると、わたし何だかあの人の事を善く云つてやりたい樣な氣がして參りましたわ！

クルト　では善く云ふ事にしようじやありませんか！

中尉　ユーディト嬢の父上は善良な、氣高いお方でありました！

アリーツェ　〔クルトに〕まあお聞きなさい！

クルト　『彼等は自らの爲すところを知らざるなり。』……わたしは之れまで何遍あなたに訊ねたか知れない位でしたね――あの人は自分のやつてる事が果して自分に解つて居るのだらうかつて！するとあなたの返事は何時でも、あの人はそれを解つてゐない、といふんでしたね。だから、あ

の人を宥しておやりなさい！

アリーツェ　謎！　謎！……でも御覽なさい、今は家中が平和です！　死の不可思議な平和が支配して居ます！……まるで子供が初めて此世界に生れ出ようとして居る時のおどそかな不安に似た様な不可思議な平和が！　わたしの耳には其沈默の聲が聞えますわ……それからあの人を載せて曳いて行つた安樂椅子の痕が床の上に見えますのね！　そしてわたし今こそ解りましたわ——わたしの生涯ももうおしまひです、そして追々寂滅の方へ近付いて行きつゝあるのです！……妙なものですわね、中尉の單純なあの言葉が——そして人間としても單純な人ですわね——わたしの氣にかゝるのです、そして今では犯す可からざる嚴肅な物に成つてしまつた様な氣がするのです。わたしの夫、わたしの青春時代の戀人は——えゝ、わたしもう笑はれたつてかまひませんわ——あの人は善良な、氣高い人間でした——何と云つても！

クルト　何と云つても！　そして又勇敢なお方でした——自分自身の及び家族の生存の爲めに之れ迄戰つて來たんですから！

アリーツェ　一生の間にはまあどれ程の苦勞、どれ程の屈辱！　然もそんな物はあの人がよく云つた通り、抹殺し、抹殺して押進んで行つたのですわ——どし〳〵先へ突進する爲めに！

クルト　あの人は「顧みられない人」でした！　之れには深い意味が籠つて居ります！——アリーツェ！　さあ參りませう！

アリーツェ　いゝえ、わたし行かれませんわ！　今此處であの人の事を話して居る間に、あの人の若い頃の面影が目の前に浮んで參りましたの——わたしあの人の若い姿を見たのです、今も見てるのです——今も、あの人の二十の頃と同じ様に！……わたし矢張りあの人を愛して居たのに相違ありませんわ！

クルト　そして同時に憎んで居たのに相違ありません！

アリーツェ　そして憎んで居た……！　亡き人の上に平和有れ！　〔右手のドアまで行きて、合掌して佇む〕

譯者の跋

劇作家としてのストリンドベルクが、青年期のロマンティクに出發し、自然主義的戲曲の數多の傑作を出せる四十歳代を經過して、五十歳といふ年齢に達するに及んでその作風にも一新時期を劃し、一九〇〇年(ストリンドベルク五十一歳)を中心とする數年間に亙りて、『罪と罪』、『死の舞踏』、『ダマスクスへ』、『夢の曲』等の異色有る一群の戲曲を出すに至つて、劇作家としてのストリンドベルクは玆に殆ど圓熟完成の境に達せるかの觀が有る。物質的、器械的なる人生觀と藝術觀とに捕はれて、類型的なる性格と定型的なる運命觀以外に出でなかつた所謂自然主義時代のストリンドベルクは、此時期に至つてその叡智と洞察力とをひたすらに內面的に深く沈潛して、事物の核心に徹し人間の魂の祕奥に迄肉薄し、現實と非現實との界に横はる幽玄の境より、神祕的、象徴的色彩を多分に帶びたる作品として現れたる物こそ之等一群の戲曲である。そこには、曾ては凄じく荒れくるひたりし暴風の如き反抗と爭鬪とは止んで溫和なる忍從の精神を生じ、冷かなる懐疑の迹は空しくして殆ど宗教的とも稱すべき諦念の曙光ほの見え、宥め難き憎惡(特に女性に對する)は消え去つて、何時しか溫き愛と憧憬の微光がさし始めた。然し乍ら本來ストリンドベルクの裡に生れ存する

懐疑家、厭人家、反抗兒は此期に至つても勿論決して死んでしまつたわけでは無くして、暗澹たる自然主義時代を經過して憂鬱なる物はます〳〵憂鬱に、暗黒なる物はます〳〵暗黒に、此要素と彼の要素とが、明と暗、正と邪、神と魔とが渾然融合して、そこに深刻無比なる藝術品を完成するに至れる點にこそ、此期のストリンドベルクの偉大さが存する。

前に擧げたる四篇の戯曲の中、ストリンドベルクの『ファウスト』と稱せられる『ダマスクスへ』は勿論、夢幻劇『夢の曲』等も異色有る藝術品として傑れた物には相違無いが、その手法餘りに人間的現實生活より離れ過ぎて夢幻の神祕境に彷徨し、或は象徴の爲めの象徴に墮し、且つその構造に於ても戯曲的緊張を缺く等の嫌無くは無いのだが、之れに反して『罪と罪』、『死の舞踏』の二曲は、現實の境を一歩も出づる事無くして然も超自然的なる神祕の境を發き、全然現實主義的手法を以てして然も象徴的効果を擧げ、その外形に於ても間然する所無き戯曲的形式を具へて居る點に於て、兩者共通の特色を有し、且つ製作の年代も亦殆ど同一時期(一八九九、一九〇〇)に屬するが故に、獨譯全集に於ても此二曲を合して一卷と爲せるは適當の處置と云ふ可きである。

『罪と罪』は、獨譯では『爛醉』(Rausch) といふ名が付いて居る。然し之れは矢張り原の表題(Brott och Brott) 通り『罪と罪』とすべきである。その理由は此戯曲の内容と主題を檢討すれば直ちに分明する。其れはその題名の示す如くに「罪」なる物の奥深く超倫理的なる眞意義を闡明せんとするもの、而してその『罪と罪』と稱するは、「罪」は決して普通に所謂罪人や惡人にのみ在るに非ずして、到る所に、有らゆる人間の裡に存するといふ作者の主張を暗示するものであらう。そこには、意識せられたる罪、意識せられざる罪、表面に現れたる罪、個人の内部に祕められて、その魂を蝕む罪、二人の人間の罪と罪との間に生ずる氣味惡き葛藤、等苟くも「罪」に關する有らゆる問題が、物凄きまでに鋭利なるメスを以て縱横に剔抉せられて、遂に蒼白き神祕の微光を發する境地にまで到達して居る。

本書に收むる二曲の飜譯は大正十三年の夏期に成り、それより二年後に更に補筆を加へた。私が此飜譯に着手する前に既に早く長友山本有三氏の『死の舞踏』の譯書が出て居り、業終つて後更に同書の訂正版と舟木重信氏の新譯『爛醉』とが現れた。山本氏もその譯書の序文に云つて居られる通り、既に飜譯が出てゐる作品をあとから追かけて第二次の譯をやるといふ事は、甚だ心苦しくも有り、餘所目には一寸想像が出來兼ねる苦心を要する仕事である。そんならお前は何故そんな厄介な仕事を引受けたのかと云はれるかも知れないが、上記の如く、其當時はまだ『爛醉』は出てゐなかつたし、『死の舞踏』の譯に就いても私はいさゝか自ら信ずるところの物を有つてゐたのである。

そんな次第で、私が公にする第六番目の譯本である本書は、實にこれ迄に覺えが無い程の苦心と手數を費して出來上つた物である。臺本としてはシェーリングの獨譯に據り、ビョルクマンの英譯本をも參照した。（大正十五年秋）

大正十五年十一月二十日印刷
大正十五年十一月廿八日發行

（定價貳圓）

《罪と罰・死の舞踏》

譯者　三井光彌
發行者　東京市牛込區矢來町三番地　佐藤義亮
發行所　東京市牛込區矢來町三番地　新潮社
電話牛込（八八八〇）六七八九番
振替（東京）一七四貳番

印刷所　東京市麹町區飯田町二丁目五十番地　京華社
印刷者　猪木卓二

ストリンドベルク全集

（全部獨逸本より移せる精譯の譯）

自叙傳小說（全部完了）

第一卷　女中の子　福田久道氏譯　價參圓五拾錢　送料拾六錢

第二卷　魂の發展史　秦豐吉氏譯　價貳圓貳拾錢　送料拾貳錢

第三卷　痴人の告白　三井光彌氏譯　價參圓　送料拾四錢

第四卷　不和・孤獨　伊藤武雄氏譯　價貳圓　送料拾錢

第五卷　地獄・傳說　秦豐吉氏譯　價貳圓八拾錢　送料拾貳錢

戲曲（既刊）

□ダマスクスへ　楠山正雄氏譯　價參圓五拾錢　送料拾六錢

□自然主義劇と一幕物　楠山正雄氏譯　價參圓五拾錢　送料拾六錢

□祝祭曲と小劇場曲　楠山正雄氏譯　價參圓五拾錢　送料拾六錢

◇社會小說叢書◇

(1) 赤い星

ボグダノフ著　大宅壯一氏譯

新四六判紙裝▼壹圓參拾錢　紙數三百頁▼郵送料六錢

マルクスの流れを汲む經濟學者で、勞農ロシヤの經濟委員長であつたボグダノフが書いたユートピアである。インテリゲンチヤから革命運動に身を投じた勇敢なる青年闘士が地球の兄星たる「赤い星」卽ち完全に社會主義化した火星に赴き、其處で何を見聞し、どんな行動を演じたか。次から次へと奇想天外的な事件を展開させて行く豐富な想像力と、多方面に亙る正確な科學的知識とは、唯々驚嘆する外はない。

(2) 軌道

ビエル・アンプ著　內田傳一氏譯

新四六判紙裝▼壹圓五拾錢　三百六十頁▼郵送料八錢

アンプは、生粹の勞働者から身を起した典型的の無產派藝術家で、此作は彼が鐵道從業員としての實際經驗に材を取つたものである。勞働苦の讃美。勞働愛の高揚。彼の精神はこゝに盡きる。彼が勞働こそ人類幸福の源泉であり、社會改造の鍵であるとの信念から書いた此「軌道」一篇は實に勞働の福音書とも云ふ可きで、此の作の世に問はんとする所は、獨り此の作の藝術的價値に於てではない。これこそ人生そのものとも云ふべき作品である。

(3) 裸の年

ビリニヤーク著　富士辰馬氏譯

新四六判紙裝▼壹圓五拾錢　三百四十頁▼郵送料八錢

一九一九年のロシヤは、內亂と飢餓と蛮扶斯の眞ッ暗な年であつた。この恐ろしい闇黑の裡に蠢めくロシヤ人を、ロシヤのあらゆる階級を生地の儘に描いたもので、此作こそ實にビリニヤークを文壇の頂上へ押上げた代表作である。そこには、滅び行く者の溜息がある。默のやうになつた農民がある。闇と饑ゑの中に素つ裸となつた感慨がある。それらの一切が、世にも淸新な、世にも獨特な筆觸とスタイルとを以て描き盡くされてゐる。

海外文學新選

現代世界文學大叢書

□は小說 ■は戲曲 ═早稻田大學及び東京外國語學校教授を中心とせる譯壇の權威者十二家の編纂に成るもので、それ〴〵分擔して仔細に檢閲し、完璧のものと認めた上で、始めて公にする。

□(1) 死刑をくふ女 (西) イバニエス 永田寛定譯
■(2) チヤッテルトン (佛) ヴイニイ 小林龍雄譯
□(3) イスカリオテのユダ (露) アンドレエフ 米川正夫譯
■(4) 勝利者と敗北者 (英) ゴルスワージー 山田松太郎譯
□(5) 影の彌撒 (佛) アナトール・フランス 山内義雄譯
■(6) リンカーン (英) ドリンクオーター 横山有策譯
□(7) 彼女は眠れり (露) ドウイモフ 梅田寛譯
□(8) 三分間のローマンス (獨) ハインリヒマン 宵木武雄譯
■(9) 長い歸りの船路 (米) オニイル 北村喜八譯
□(10) 盲人國その他 (英) ウエルズ 石井眞峰譯
□(11) 吸血鬼 (佛) シユウオブ 矢野目源一譯
□(12) アグラフェーナ (露) ザイツエフ 松永信成譯
□(13) バスク牧歌調 (西) ビオ・バローハ 笠井鎭夫譯
□(14) ギリシアの踊女 (埃) シユニツツレル 大槻憲二譯
□(15) 卵の勝利 (米) アンダスン 吉田甲子太郎譯
■(16) 秋の胡弓 (露) スルゲーチエフ 黑田辰男譯
□(17) 愛の物語 (諾) ハムスン 宮原晃一郎譯
■(18) ベランジエ (佛) ギトリイ 平林初之輔譯
■(19) 機械破壞者 (獨) トルラア 藤井清士譯
□(20) 請願人 (露) ザルトイコフ 八杉貞利譯
□(21) 謎の女 (英) ワイルド 矢口達譯
□(22) シッタルタ (埃) ヘルマン・ヘッセ 三井光彌譯
□(23) 田園交響樂 (佛) ジッド 井上勇譯
□(24) 笞の下を潛つて (露) スキターレツ 關口彌作譯
■(25) 聖女の反面 (佛) ドウキユレル 小田切照譯
■(26) 結婚の夜 (獨) ダンタス 關一雄譯
□(27) アッシャア家の沒落 (英) アラン・ポウ 谷崎精二譯
□(28) 令孃エルゼ (埃) シユニツツレル 三井光彌譯
□(29) 小さな町 (佛) フイリツプ 小牧近江譯
■(30) 翼 (伊) ペネツリー 岩崎純孝譯
□(31) 狼 (佛) ロマンローラン 高橋邦太郎譯
□(32) イワン・ダ・マリヤ (露) ビリニヤーク 尾瀨敬止譯
■(33) 離婚法案 (英) デイヤン 葉野天來譯
□(34) 運命の秋 (露) ブローク 黑田辰男譯
□(35) ハインとグレーテ (獨) シユミットボン 浦上后三郎譯
□(36) 彼等が生活の一年 (露) ピリニヤーク 平岡雅英譯
□(37) 搖籃の歌 (西) シユエルラ 花野富藏譯

・中版紙裝・一冊六拾錢づゝ
・百五十頁・送料各四錢づゝ